113
C21

始

外2464
113
C21

カアペンター原著
宇佐美文藏譯

愛と死の戲曲

聚芳閣出版

發行所寄贈本
大正
14.5.23
寄贈

目次

デルファイの神巫

——地上を見下ろす山腹にて——

第一章　序論……（一）
第二章　戀愛の始源……（五）
第三章　術としての戀愛……（一四）
第四章　戀愛の究極の意義……（五一）
第五章　死亡術……（七五）
第六章　死の通路……（九五）

第七章　死後の狀態はありや……（一二七）
第八章　潛在的自我……（一四〇）
第九章　自我の存殘……（一六九）
第十章　內的即ち靈的の肉體……（一八四）
第十一章　形體の創造と物質化に就て……（二〇二）
第十二章　再化身……（二二七）
第十三章　神性の精神……（二五二）
第十四章　復歸の旅……（二六六）
第十五章　個人的存在の神秘……（二八二）
第十六章　結論……（三〇八）

エドワド・カアペンタ著
宇佐美文藏譯

愛と死の戲曲

（人間の進化と變形の研究）

デルフアイの神巫

（地上を見下ろす山複にて）

海岸線は遠く細く續き、大空は擴つてゐる。
山々は段々をなして、高く輝いてゐる。
閃めき出づる太陽は今も變らず、
花麗しく咲く月桂の樹の繁みに、女神（ひめみ）ダフニを探し求める。
深く皺立つ古への海は、永なへに若々しく、
潮の唇もて、銀色の岸邊を口づけて止まない。
洞窟（ほらあな）には今も妖女（ニンフ）達が、戀人と共に住まひ、
巨人（タイタン）等は不思議の火もて、陸（くが）を搖るがす。

千代にも亘つて人々は此の地に來て、
此の岡の上を道よひ、光に面した。
千度びとなく取るにも足らぬ人間は、
空しき人てふ者の胎から生れ、
又再び闇夜に姿を消した。
此處に蠻族の群れ住ひを定め、劍戟を交へ、彼等の宿星を咒つた。
又陸となく海となく、彼等の望みに充すものを求めて、歩いた。
若き豫言者の眼を持つ者此處に來て、遠きを眺め、
半ば口を開きし儘、偉大なる事業を默想した。

過ぎ去りし取るにも足らぬ人は皆、夢想だにせず、
又その生命の元を測る事もしなかつた。
唯けだものゝ群、又は海に投げ入れし網を見守るのみにて、
風に傳はる祖先の聲を耳にするよすがもなかつた。

又遠き未來には、如何に不思議にも麗はしき、己れと似たる多くのものゝ、
その陽に輝く眼の內に己が魂は生き、
その心胸には、己が秘めたる希望も惧れも共に生きる。
己れと同じ多くの自我の、現れ出づる臆測も持たなかつた。

だが私は——私は見た。然り、私の高い足場から、
私は各の生命の絶え間もなしに、
人てふ空しき區劃に妨げられもせで、擴つてゐるのを、
一人の手は他のものゝ手から手へと、互ひに限り無くつながつてゐるのを、
私は一つの川の如く、各の時代の子等が皆、
時代から時代へと、流れ下るのを見た。
又大きな廣い、人間の熱情の渦卷が、流れ慄えるのを見た。——
それは神々の姿の映る、不思議な一つの鏡であつた。

然かもかゝる凡ての時代の間にも、少しの變化も、
私の山の傾斜にも、又は海に向つた曲線にも受けてゐない。
又人々は今も尙、古き規則の下に居て、
その古き慣例に戻つた事がない。
愛と死は今も尙、姿を隱しつゝ、互ひに手と手を取り合つて、
恐ろしい避け難いものとして、人々の頭上を飛んで行く。
偉大な聲々のひゞき幻の住む彼の別な境土の門を開くために。

第一章　序論

戀愛と死とは、別々のものゝやうにして、現世を歷巡つてゐる——全く現世を潛行してゐて、到る處にその姿を現してゐる。然かも現世と違つた、他の或る形式の世界に屬してゐるものゝやうに思へる。死が一度び我々友達仲間の間に、姿を現しでもすると、我々は最早や何と云つていゝか分らなくなつて終ふ。心の考へる力もはたと行き詰つて、日常の經驗から修得した、僅か許りの機智も智慧も、箴言も標語も、凡て煙と消え果てゝ、何の役にも立たなくなつて終ふ。かうした凡てのものは、我々の世界をその翼で黑闇にする。此の不思議な廣大なものに向つては、何かの有效な方法でそれに觸れたり、又はそれを闡明にする少しの力も持つてゐないやうに見える。戀愛に於ても亦、反對の意味ではあるが、此れと全く同じである。言葉は此の場合、何の役にも立たない。又凡ての哲學も——その苦惱の理由を說明したり、その魅惑に打ち克たうとしたり、又はその喜ばしき經驗を記述しようとしたりするに際しては——全く何等の力も持つてゐない。

かうした戀愛と死と云ふ二つのものは、最も仲の好い友達のやうにして、互ひに遠くに離れることも無く、此の世の中を縱横に動き廻つてゐる。そして一種何物にも負けない、勝ち誇つた態度で現世に君臨してゐる。然かも一番仲の惡い敵同志のやうにして、互ひに相手の動靜を覗ひ合つたり相手の事業を打ち壞したり、人類の肉體や精神を、互ひに激しく奪ひ合つたりしてゐる。

いつか我々は、かうしたものゝ支配から、數時代の後には遂に離脱して——反對に彼等を征服し又我々の從僕とならしめる事は出來ないであらうか？　我々は、一見して我々の世界に振つてゐるやうに見える彼等の壓制を、その手から奪ひ取り、又彼等の間の不和を、取り除くことが出來ないであらうか？　彼等をしてその假面を脱がしめ、又は我々の前にその本來の姿を——寧ろ新しい秩序を世の中に齎す天使として、又は使者として——現はさしめる事は、出來ないであらうか？

此れは實に大きな、且つ困難な企てである。だが此れは、思ふに、我々現代人の、到底回避しようとして回避し得難い事である。最早や我々は死と言ふものを、見て見ない振りをしたり、又はその存在を知らぬ顏に、若しくはその挑戰を耳にしないかのやうな態度を取つてゐる事は、出來なくなつた。我々は現代に至つて、漸く自然界の事實を絶へず直視して、その內奥に徹しようと云ふ傾向を取るに至つた。が矢張りかうした根本的な事實に向つても、更らにそれに直面して、その內奥

に徹する覺悟を、我々は持たなければならない。然かもかうした企ては、確かに戀愛と同盟を結ぶことに依つて——又恐らくさうする事に依つてのみ——成功されるであらう。

何故なれば、我々が此の種の「共通の敵」に敵意を持つて、その權力をなみするものは、畢竟主として我々自身の爲めではなくて、我々の愛する者の爲めであるからである。我々自身のためには、死に對して、冷淡になる事も又は諦める事も出來るであらう。だが兎に角他の人々のためには、我々の心を奪ひ持つてゐる神聖な者のためには、彼等が死ぬなどゝ云ふ考へには、どうしても平氣でゐる事は出來ない。我々は斯樣な考へを抱く事を、拒否する。戀愛は或一種不可思議な力で、死の恐怖を一掃して終ふ。火の輪を足の下に蹂躙するジーグフリードにしても、魔法の掛つた木の繁みの中を、無理やりに通り拔ける天上の王子にしても、又はユリディスを求めて、地獄の入口に迄元氣よく辿り行くオルフユーズにしても、又はアルセスティスを得んがために、地下の王と戰ふヘルキユレスにしても——皆古代の人類の本能は、かうした最後の決戰には、いつも愛が勝利を得べきものである事を、明言してゐる。

即ち我々は、此處に擧ぐる神々の一方の名を以て他の、一方の者に挑戰するのである。然かも我々はその兩者に感謝しなければならない。と云ふのは、(恐らく何よりも多く) 我々をして互ひに忠

誠を勵み合ふ心持を確持せしめるに至つたのは、實にアズラエル（猶太、マホメッド教の天使、死に際して靈と肉を引き離す。）の、我々の世界への侵入と、我々に對する拷戰とのお影であつたからである。又彼の侮辱は、我々人間の魂の内に、互ひに睦み合ふ精神を呼び醒し、又獻身的な互助の繋がりを固めるに至つた。そして斯る二つのものは、一見して恰も敵同志のやうに見えるが、その實或不思議な方法で互ひに利し合つてゐる。又互ひに相手の秘密を知つてゐて、然も秘密の間に相互間に、相類似した生命と、或る深い共通の關係とを持つてゐる。我々は此れを、我々の最も深い直觀に依つて感知する事が出來る。又それは我々人間界の、日常の出來事の觀察のうちにも認める事が出來るし、（今直ぐに述べるが）又一般生物學や最も原始的な細胞の一生涯の歴史の内にも、よく説明されてゐるのが發見される。實際、かゝる戀愛と死の相互作用に關する題目は、恰も一つの縫取りの糸のやうにして、此の著書の中を行き渡るであらう。——そして望むらくは、此の兩者をして互ひに釋明の光を投げ合はしめ、又その二つの者が協力して、共に我々人間の運命の上にも、釋明の光を投ぜしめ度いものである。

第二章　戀愛の始源

丁度今暗示した通り、戀愛と死と云ふ人間の大きな問題は、最も原始的な生命形體の内に、不思議にも、又非常に明瞭に説明されてゐる。故に私は、何等の辯明の言葉も述べずに、細胞の成長、生殖、並びに死に關する近代の研究の上に、暫らく讀者の注意を止めよう。此の章は少しく專門的に渡つたり、又は處々複雜した嫌ひがないでもない。だが此の種の研究が、此の書の殘りの部分や、そこで論ぜられてゐる一般の諸問題の上に、不思議な釋明の光を投げると云ふ理由からして、此れに注意を止めて、又忍耐してそれに考慮を拂ふ價値が、充分あるであらう。

戀愛とは元來（又恐らく究極の意味に於て）本質的なものゝ交換である。原始動物（プロトゾア）——最も初期の細胞で、又動植物界の祖先に當るもの——は、自分の周圍の液體内に發見する微細物を食物として、成長する。そして次第に成長して行つて、遂に不便な大きさに達すると、更らに二個乃至それ以上の部分に分裂する。此れが即ちその繁殖法なのである。その後裔細胞、即ち斯樣な風にして蒔

き散されて行く各部分は、取りも直さず元の、即ち親の細胞の生命の、分裂に依る、單なる延長に過ぎない。——故に此の種の原始動物の生命は、(不斷の派生に依つて)各時代に亘つて無限に繼續されて行くがために、又或意味に於ては、不死であると稱せられてゐる。斯樣な芽生乃至分裂の生殖方法は、更らに高等な部類に屬するものゝ内にも、存在してゐる。それはかの昆虫間に見出される、所謂獨性受胎のやうなもので、後期の性的生殖の形式と相並んで存在してゐる。それは實際一種の處女誕生である。植物界に於ける球根の芽生や、又は灌木から折取つた枝を、地面に挿して置くと、大抵の場合、それが旨く親木の生命を持續して行く事實などが、その好實例である。又蠕虫や、昆虫や海綿などの下等動物に於けるやうな分裂とか、又は性的接觸や其他何等の性的行爲も經ないところの、發芽や産卵などに依る生命の持續法も亦、その好實例である。

此れは實際、最も初期の原始的な繁殖の形式のやうに思はれる。そして此れは明かに、成長に基因してゐる。繁殖は生命の過剰である。そして先づ第一に、饑餓の滿足と關係を持つてゐる。先づ最初に饑餓が起り、次いで成長が行はれて、分裂乃至發芽の生殖がそれに伴隨する。そして此の過程は明らかに何等の變化もなしに、何代もの間——原始動物にあつては實に何百代と云ふ間も——繼續される。だがいつか成長力と精力とが衰微して、活力の減退[1]する時が——兎に角一般に[2]——到

來する。やがて此の時には、先づ或種の變異が行はれる。二つの細胞は結合し、互ひに液を交換して、再び二つに分裂する。此れは榮養攝取の新しい形式でもあれば、又戀愛の初期の形式でもある。此れは非常に本質的な榮養法である。と云ふのは、結合した細胞の核そのものは、大抵の場合共通のものとなつて、又幾分は交換し合ふ。そして斯くして得られた活力は、その各細胞に、更に新しい壽命を附與するからである。事實さうした細胞は更新される。そして各細胞は共に再び元氣よく成長して行つて、更らに元通りの發芽や分裂の方法で、その主張を繼續して行く。時とすると斯く結合した二つの細胞は、その儘離れる事なしに終る事がある。その場合には多くの芽を發芽さすか、又は破裂せん許りに膨脹して、自體は死滅し乍らも、矢張り後とには無數の後裔者を殘して分裂する。[3]

今迄の處では、饑餓と戀愛との間には、まだ殆ど少しの分化も存在しないやうに見える。此の場合戀愛は、唯細胞をして他の同類の細胞から養分を攝取せしめる、一種特殊な饑餓に過ぎない。そして此の初期の生殖は、成長現象に伴ふ必然的のものである。それは丁度、饑餓の滿足に續いて起ると同じ樣に、又戀愛の滿足にも結果する。ロルフのかうした二つの衝動の關係に就て述べた言葉(ゲッデスとトムスンの引用に依る)は、非常に暗示的である。彼はかう云つてゐる。——「接合生

殖は、榮養の減退した時に起るものである。……それは滿足のため、即ち增大して行く饑餓の滿足のために、必要なものである。それは動物を驅つて、その近隣のものを呑呑 isophogy せしめる。此の接合の過程は、唯特別な一種の榮養の方法に過ぎない。そして攝取する榮養量が減少したり、榮養の要求が增加する場合に起るのである。」

そして今迄の處では、性の區別も存在しない。二個體間の結合乃至融合と云ふ意味では、或は事實性の區別は存在するかも知れない。だが男性女性と云ふ意味では、性の區別は存在しない。原始動物に於ては、一般に、細胞間の單なる接合がある。だが觀察し得る範圍內に於ては、その各の細胞は共に全く相似の者である。それは全く相似者間の結合に過ぎない。そしてその結合の結果、成長し、又は生殖し得るやうになる。だが斯樣な初期の結合や生殖は、共に廓然たる性的行爲とは獨立に存在してゐる。即ち各個體は未だ、男性と女性とに分化してゐない。

だが後期になつて、初めて性が現れて來る。成長（や生殖 には、明かに或程度迄の互ひに相反した、二つのものが必要になつて來る。――一つは食物の探索と獲得とであつて、それは活動と力とを意味する。今一つは食物の消化と合化であつて、それは靜止と受動とを意味する。そして或る階梯――概して、多くの原始動物細胞が結合して、共働的な聚合體の形に「動物」を形成する時期――

に此の分化が開始される。そして或個體は活動と追擊とを專門とし、（同じ種の）他のものは、休息と同化とを專門とする。かうした性質を持つた二組のものは、明かに唯聯合してゐる時にのみ有用である。然かも既に述べた通り、それ等は皆或程度迄は、互ひに相反してゐる。故に此の相對した二つの個體の集りが、各種族內で夫々分岐してゐながらも、然も尙聯合を保つた二つの大きな分派に分れるのは、寧ろ當然の事でなければならない。

此の二大分派が即ち、男性と女性――活動的な、精力消耗的な、餓えた、食物を漁り廻る分派と、固着的な、不活動な、同化的で且つ生殖的な分派――とである。そして此の二大分派の發生に依る分業は、その全種族に多大の利益を與へる。だが勿論此れの條件として、時折り相反した各要素は、その融合を新たにしなければならない。更らに種族本來の性質や特質の保存されるのも、亦此の種の各要素の融合の結果であつて、その將來の發達と繁殖も、亦此の融合に依つて確保されるものである事を、記憶しなければならない。

滴虫類の或者には、性分化の始まりとも見るべきものが存在してゐる。その融合は此の場合、極く微かに相違した二個體間に行はれるやうに思はれる。だが原始動物の多くに於て既に觀察した通り、――勿論此の場合にも、一般に結合に魅力と價値とを提供する、何か或種の相異點はあるであ

らうが――現在我々の觀察し得る限りに於ては、矢張りその結合も相似者間の結合に過ぎない。

性的分化が男性と女性とに確然と現れ始めるのは、一般に複細胞動物や、又は共働的な細胞の集合體で、その生命が組成されてゐる生物に於てゞある。此の場合では――一個體の細胞全體が、他のものゝ細胞の全部と融合する事が出來ないために――結合の使命を帶びた特別な細胞が、各生物の內部に特設される。そして永年の間に、前記の男女兩性への分化は、自然各個體が次第にその執れかへの變化の傾向を取るに伴れて――性的細胞や性的器官とか、又は（それよりも不明瞭ではあるが）一般の肉體や構造の上にも、現れ始める。

概して下等な生物、即ち兩棲類、魚類、又は軟體動物などに於ては、男女兩性の細胞――即ち精虫と卵子――の結合は、決してその兩親のいづれの肉體に於ても行はれない。それは、例へば水のやうな周圍の媒體の中で會合し、且つ融合するために、體外に排出される。そしてかくして合體した細胞は、次第に新しい個體に發達して行くのである。だが高等な生物にあつては、此の種の會合や成長の初期の階梯は、必ず兩者の執れかの肉體の內に於て行はれる。そして誰しも期待するやうに、それは女性の體內に於て行はれる。と云ふのは今も云つた通り、女性は靜止と同化とを代表するからである。卵子は精虫に比してその形が大きい。又その性質は固定的である。だが精虫はそれ

に反して非常に活動的である。故に當然精虫は、卵子を女性の體內に探すのである。普通に、動物の女性の方は靜止的で、男性の方がそれを探し出してゐる。それと同じやうに、女性の卵子はその體內に止まつてゐて、訪問者の來訪に接する。そして交接の裝置の全體も、よくその間の關係を象徵してゐる。女性の肉體は謂はゞ一種の殿堂であつて、そこでは新しい生命の誕生、即ち創造のために、二個體間の結合或は融合の神聖な神秘が完成される。

だが斯樣な風にして、女性が生命附與の力の器（うつは）ともその聖處ともなり得る特權を持つてゐるが、それは決して男性よりも女性の優越してゐる證據にはならない。結合の過程は、單なる受精作用として論ぜられる場合がある。その場合でゞは、卵子即ち女性の要素が主要物であつて、唯その發達の開始と進行の動因となる微かな衝動、乃至は刺戟を、男性が附與するに過ぎない、と考へられてゐる。だが多くの下等動物に於ては、化學液や單なる針の先きの刺戟でゞも、卵子の發達は開始されるが、それ以上の繼續はしないやうである。又近代の研究は、正常の受胎作用に就てかう述べてゐる。即ち結合する男女の要素、及び新しく形成せられる生體への此の兩者の寄與は、絕對的に平等である。

恐らく此の研究の結果程、驚異に値ひするものはなからう。此れに依れば、原始動物細胞（及び

性細胞）の構造は、單純ではなへて、實は既に非常に複雜したものである。そして受精即ち融合に於ては、それは不思議な程の巧妙な、組織的な變化を起す。又さうした細胞は、最も原始的な階梯に於ける生命の、顯微鏡的な始まりに過ぎぬやうに見えるが、事實それは、長い活動の目に見えるに至つた最初の結果であり、又細胞内部に働く非常に有機化された、賢明とも云ふべき力の現れでもある。

原始的な細胞の、分裂と繁殖との極く簡單な過程の内にも、既に一種靈妙な慧智とも云ふべきものが具つてゐる。極く簡單にそれはかう説明されよう。核は細胞の最も主要な部分であるやうに思はれる。それは遺傳的及び形成的物質を供給する點から見れば、確かにさうである。――周圍の原形質は主として、榮養及び保護の役目を司る。その核液内には縱横に、不規則な網目をした物質が擴つてゐて、（ほんの偶然な理由から）核粒（クロマティン）と稱せられてゐる。そして核が靜止してゐる間は、その網目は可成り平等に核の内部に擴つてゐる。だが分裂が近づくと、先づその合圖として、限られた一定の數の短い糸狀のものに、核粒は分裂をする。――此の短い糸狀のものは、染色體（クロモソーム）と名付けられてゐる。此の染色體は或不思議な發展の後に、遂に核の中央を通る一線となつて並列する。染色體の此の作用や、全體としての細胞の分裂作用は、明かに微細な星狀の放射體（中心體（セントロソーム）と稱せられ

る）に依つて支配されてゐる。此れは核の外側、即ち細胞の一般原形質内に現れて、全過程に重要な役目を勤めてゐるやうに思はれる。此の中心體は、細胞分裂の時機が來ると同時に、自ら二つに分れる。そして此の星狀の二つの中心は、（後に夫々二つの新しい細胞の中心體となるのであるが）徐ろに原（もと）の細胞の相對する端、即ち極（ポール）に向つて移動する。――そしてかうしてゐる間常に、それ等の中心體は、光線狀の糸、即ち細纖維を射出して、兎に角染色體と連結し且つその運動を調整する。そして遂に、今も述べたやうに、染色體は兩極を結ぶ線に垂直に、細胞の中心を通る一列の線となる。此の時期には、即ち細胞の兩端にある小さな星狀の中心體と、その間を貫く染色體の一線とが見出される。（又此の過程の間に、核壁即ち核を包む膜が無くなつて、細胞や核の一般内容物は、凡て區別し難いものとなる。）丁度此の時、本當の分裂が始まる。染色體は――[6]動植物の各種（スペシズ）に對しては、常に一定不變の染色體があると云はれてゐる。又一般にそれは、遺傳的要素即ち未來の個體を決定するものを含むと信じられてゐるが――既に縱に、又細胞の中央を通つて、互ひに眞向ひに配列する。彼等は此處で明かに、夫々兩極にある放射點の支配を受けて、（丸太を割るやうにして）縱に裂ける。――かく二列に分れた染色體は、その一半は一つの極に、他の一半は他の極に歸するやうになる。そしてかく分離した半數は、夫々その屬する極に向つて、近づいて行く。同時に細胞

壁は赤道線即ち分裂線に沿つて收縮して、直ちに元の細胞は、二つの細胞に分裂する。やがて新しく分裂した細胞内の染色體は、夫々各自の極即ち中心體の（周圍ではないが）近くに集る。そして新しい核膜が出來て、各の染色體の集りを包んで終ふ。此處に於て、遂に元の細胞と同一構造の二細胞が出來て、その染色體の數も性質も、元のものと少しも變らない。[7]

此の全過程は實に、不思議なものである。如何なる陸軍の展開や集合の運動も、又は寺院内の新入者の、前後したり後退したり、集合したり分離したり、又は舞踏の相手が入り換つたりする、如何なる複雜した神秘的な舞踏も、その慧智の點では、確かに此れとは比較になりさうもない。[8] 然かも此れは最下等の生命形體の、一細胞から二細胞に分裂する際の現象なのである。又高等な生命形體に於ても、全く同一である。即ち卵子細胞と精子細胞との結合した一細胞が、更らに一生物體を形成するために分裂を重ねる時も亦、同樣の事が行はれる。よく知られて居る通り、此の結合細胞は先づ二つに分裂して、更らに二分して四つになる。それが更らに分裂して八つになり、十六、三十二、六十四と——遂には何千、何十萬、何百萬と增えて行く。そして遂に一物體を形成するに至る。且つ各分裂の過程は、此處に述べたやうに、實に驚くべき注意と正確さを以つて行はれる。——故に各細胞は、全く元細胞の連結であり、又それと同一性質のものである。尙その上に、兩親

から得た半數宛の同じ核要素を含んでゐる。然かも此過程に分化が少しづゝ始つて、遂には各細胞は、肉體内の位地と官能とに——例へば皮膚、粘膜、血球、腦、筋肉組織などに——適應するやうに修正される。[9] 此の分化の意味を知るためには——即ち凡らゆる樣姿を具へ、色彩や、模樣や、速かに動く四肢や腦髓の複雜さを具へた全個體は、恐らく單一の細胞から出たものに相違ない。又實際それは、潛勢力の具現した元細胞に過ぎない。且つその元細胞は、親の兩性細胞の融合であつた事を、知るためには——動物の、若しくは我々自身の肉體を觀察する價値は、充分あるであらう。

更らに此の兩親の細胞が、一つのものに融合する事實に就て、一言しよう。此處に於て再び、非常に注目に値ひする、二つの事柄が生ずる。その一つは性の平等に關してであつて、他は性現象の特色とも、又は原動力ともなつてゐる偏重（若しくは缺點、或は不完全）に關してゞある。

第一の缺點に關しては、我々は既に原始動物の間に於ける、次の事柄を知つた。即ち接合は、その大きさも構造も、共に全く（どう見ても）同一のものとしか見えない、二つの個體の細胞の間で行はれる。かくて此の接合から生殖が結果される。だが高等な生體で性が現れ初めると、接合細胞——卵細胞と精虫細胞——の大きさが一般に違つてゐて、より高等な動物でゞは、その大きさの差がひどくなつてゐる。例へば人間の場合にあつては、卵子は精虫（スペルマトゾーン）の千倍に相當する。[10] 此の事實

は前に述べ通り、屢々片方の性に優越性を與へる、誇張した說の論據となる事が多い。だが不思議な事には、人間若しくは他の高等な動物にあつては、精虫が卵子に透入して、將さに精虫の核が卵子の核と結合しやうとする際に、いつも豫備の期間がある。そして此の期間內に、核は急速に周圍の原形質から養分を吸收して、成長し——遂に卵子の核と全く同一の大きさに達する。即ち此の際の狀況は、大きさも一般性質も共に同一の核粒を持つ二つの核は、極く接近して、互にその融合の時機を待つのである。

此の融合に依つて、即ち新しい生命が作られる。尙ほ現在明かに觀察し得られる限りでは、此の過程中の、二つの性役割は、全く平等である。その官能上の相違はあるかも知れないが、そこには何等の不平等も存在しない。「[11]兩性細胞は共に」とロレストン敎授は云つてゐる。「接合の行はれる遙か以前から、その準備を行ふ。そして受性に際しては、兩性細胞のいづれが能動力であるとは云へない。『受精』と云ふよりは、寧ろ『融合』が此の過程の適語である。男女兩性は共に、完全な一つのものゝ半分宛を現すと云ふ、プラトー時代の神秘說は、今日では最早や何等詩的な比喩でない事が明瞭になつた。生殖の本質的な特質に關しては、此の說は全く文字通りの事實である。」

此の第二の驚くべき點は、性的接合の偏重と、それの含む交換の補足的性質とに關聯する。此れ

は確かに注目すべき興味ある事實である。種々一定した核粒——人間ならば十六——を含む卵子細胞と精虫細胞とが、單に結合するならば、その結果として倍の染色體を持つ細胞が現はれるに違ひない。即ち人間ならば三十二で、此れは明かに他の種の數である。「實際兩性の各種細胞は、その染色體の數を半減して接合の準備を行ふ。此の際核は二回の分裂を行ふ。然しそれは、染色體が縱に裂ける普通の場合のやうではない。その方法としては、即ちその二分裂に於て十六の染色體の內の四つ宛（都合八つ）が、核と細胞の外に排出される。そしてその儘死ぬか、若しくは卵子細胞の周圍の營養物の被ひを作る助けとなる。此れが即ち『成熟分裂』と呼ばれる。そして此の分裂の完了される迄は、受胎は不可能である。[12]」かくして染色體が正當の數の半分に減少された二つの核は、（此の場合八つ）何時でも合體して、その種特有の數の染色體（即ち十六）を持つ、新らしい細胞の形成に取掛る。此の細胞が即ち新しい生體の始まりである。そして既に述べた如く、それが分裂を重ねて、かくして作られた無數の細胞は、各色々な組織に分化して、遂には完全な一個の動物が出來上る。

イー・ビー・ウィルスン敎授は云つてゐる。「成熟を廻る多くの論爭の中に、完全な明瞭さと確かさを具へた一事實は、最後の卵[13]（並びに精虫）細胞の染色體が、體細胞に特定の數の半分に減

少される事である。此の減少は明かに、それに續く接合のために、卵（並びに精虫）細胞の準備でもあれば、又その種の染色體の恒定數を持續さす手段でもある。[14]」

接合する各細胞がその組成要素の半數を排出するのは、確かに不思議な事である。[15]又此れは不思議にも巧妙な事柄のやうに思はれる。[16]此の問題に就いては、色々な學説が行はれてゐる。だが現在では、まだその實際の現象の、確かな結論が出來てゐない。或人は、或場合には一定の男性要素が排除され、又或場合には、女性の要素が排除されると考へてゐる。だが兎に角、補足的作用が行はれて、それによつて各々の細胞は、共に他のものから別種の要素を得やうと準備し、又かくしてその結合を一層有效ならしめるものと、考へられる。男女兩性は完全なもの〻各半分を現はすと云ふプラトーの説は、既に引用した。彼は又（「饗宴」の中のソクラテスの演説で）貧困は愛の母であり、愛は「いつも欠乏の仲間となる程度迄に、母の性質を受け繼いでゐる。」と云つてゐる。そして此れは、最も初期の階梯の生命の場合に於ても事實であつて、即ち二つの細胞は、夫々或欠乏や不足を補ふために結合し或は合體する。

兎に角今述べた過程の内で、次の二つの點は明瞭である。即ちその一は、精子細胞及び卵子細胞が、受精卵に寄與する染色體の數は、常に等しい。――勿論此れは、後裔體に兩者の遺傳が均しく

著明に現れることにはならないが――確かに兩親の子に與へる遺傳は、常に平等であることを示してゐる。[17]第二には、此れは新しく出來た肉體の凡ての細胞に於ても、事實である。――即ち凡ての細胞の源である結合細胞の潜勢力、從つて兩親の潜勢力は、肉體内の各細胞に行き渡つてゐる。

此の生命の起源並びに生殖に關する驚くべき結論は、――勿論此處では極く簡單に、又不充分にしか説明しなかつたが、我々をして思はず立止まらしめずには置かない。我々の目に見ゆる自我を築き上げる、此の無數の無限に小さい有機體の進化と類縁、及びその運動の凡てに行き渡つてゐると思はれる、不思議な慧智を考へると、心は――稍、想像を絶した星の進化と類縁とを考へる場合と同じやうに――ぐらついて終ふ。[18]我々は確かに、かゝる極微の領域に於ても、我々自身の肉體と心の關係に於て辿ると同じ法則、若しくは活働を辿るやうに思はれる。細胞は丁度人間と同じやうに、互に惹き合ふ。そしてその吸引は或程度迄、相違に基因するやうに思はれる。決つて男性動物が、女性動物を探し求めると丁度同じやうにして、男性の精虫は女性の卵子を探し求める。原始的な細胞は丁度原始的な考へや情緒が、分裂に分裂を重ねて分化をして、人間の心を構成するのと丁度同じ方法で、分裂に分裂を重ねて分化をして、動物の肉體を構成する。だが斯くして我々は、我々に熟知の過程が、最極小の縮圖の中にも繰り返されるのは見るけれども、以前よりも何かの「説

明に向つては、少くとも近づいてはゐないやうに思はれる。又何かの説明の見込ありさうには思へない。我々は單により廣い眼界を得るに過ぎない。又宇宙の理法は、凡て同一性質のものであると云ふ暗示も得るが――同時に又斯る過程の設明は、恐らく如何なる事物の連續そのもののうちにもない。寧ろ斯る事物の連續が比喩的な、若しくは象徴的な表現となつてゐる、或種の他の世界にありはせぬかと疑はれるのである。私は次の諸章の處々に於て、原始動物と、愛と死と云ふ大きな事柄に於ける我々自身の經驗の或る者との間の、類似若しくは相同を、更らに詳細に亘つて辿らう。

註 1 千八百八十五年の十二月に、エム・モーパスは一個の滴虫 (Stylonichia pusitulata) を離して、千八百八十六年の三月迄、その繁殖を觀察した。此の時迄に普通の分裂に依つて、二百十五代發生した。そしてかうした下等な有機體は、近い近親者とは接合しないために、勿論性的結合は行はれなかつた。――その結果はどうであつたらう？　上記の期日に於てその一族は衰微するのが見られた。その各員は、全く老齢でないが生れ乍らに老齢であつた。性的分裂は休止した。そして營養力も亦喪失した。」(Evolution of Sex, Geddes and Thomson, 1901, P. 177)

2 だが「性の進化」(Evolution of Sex) 百七十八頁を見ると、他の滴出で、何等の衰退もなしに、四百五十八代も續いた例が記錄されてゐる。又 The Cell, by Dr. Oscar Hertwig(Sennenschein, 1909), P. 209 參照。

3 二個體間の生命要素の交換は、滴虫類 Nocticula の場合によく説明されてゐる。AとBのノクテイクラが合體する。NB やがて再び（點線で示した）両に沿つて、接合面とは直角に分裂する。かくして新しい二個體が形成される。そして各ノクテイクラは、一方のもの丶半分を吸收した譯である。そして彼等の活動は更新されて、再び新生活を始める。

4 Volvox に於けるがやうである。「性の進化」百三十八頁參照。

5 そして我々は又此處に於て、男性女性と呼ばれる特殊な分化は、多くの可能な性分化の内の一つに過ぎないと想像してもいいと云ふ事が出來る。――主要な重大な條件は、如何なるものにもしろ、分化は相互に補足的で、又共に種族の全性質と特質とを組立てるものでなければならぬと云ふことである。

6 例へば人間の場合は十六で、蟋蟀は十二、百合は二十四などである。

7 August Forel's "The Sexual Question" (English Translation; Reebman, 1908), PP. 6 and 11; "The World of Life" by A.R. Wallace, ch. XVII. P. 313; "The Plant Cell" by H. A. Haig (Griffin, 1910), ch, Viii. 及び其の他の著書參照。

8 ステファン・レダックは Théorie Ehysico-chémique de la vie (Paris, 1910) の中で、上記の凡ての現象を、單なる濾滲と滲透の作用 (Karyokinesis に關する第三章參照) に歸せしめようと努めてゐる。だが上に述べた或る種の形式が、瀰漫の模樣に似てゐるのは――磁場の形式に似てゐるのと同樣に――興味のあることであるが、此れは決してその發生が瀰漫か磁力かのいづれかによると實證するものでない。唯それは此の現象のあるものが、非常に漠然たる瀰漫か若しくは磁氣かの力に關係するらしく考へしめるに過ぎない。――そして此れは既に、勿論許容されてゐる事柄である。此れに就て讀者は、或る階梯に於ける蠅を構成するところの凡てゝある、單なる牛乳のやうなパン粥からの、成熟した肉蠅の驚くべき復活を研究しなければならない。("The Biology of the Seasons," by J. Arthur Thomson, 1911 參照)。

9 「凡ちゆる既知の場合に於て、受精作用の本質的な現象は、胎兒の最初の核を作るための、父系の精

子核と母系の卵子核との結合である。此の核は……分裂に依つて肉體の凡らゆる核を生ぜしめる。故に子供の凡らゆる核は、兩親から出た核質を含む事が出來る。」("The Cell in Development and Inheritance," by E.B. Wilson, macmillan co. 1940, P. 182)

10 勿論後者は、丁度肉眼で認める事が出來る。

11 "Parallel Path", by T. W. Rolleston (Duckworth, 1908), P. 53

12 'Parallel Path," P. 52. 更らに此れ以上の説明は、"The Plant Cell" by H. A. Haig, PP. 121, 123. et seq; "The Evolution of Sex," PP. 112-14; "Die Vererbung" by Dr. E. Teichman (Stuttgart, 1908), PP. 39, 40, &c. 參照。一般に、此の生殖細胞の「成熟」過程は、非常に複雜してゐる許りでなく、又各種の動植物に於て、非常に多種多様のものである事を、忘れてはならない。又讀者は、間に合せの説明や、凡ての場合に當て嵌るやうに思はれる概説を、餘りに容易く容認する事を警めなければならない。

13 此處や其他の到る所で、ウイルスン教授は「精虫細胞」をも含めて「卵細細胞」と云ふ言葉を使つてゐる。それで私は括弧に入れてそれを示して置いた。

14 "The Cell," P. 285.

15 原始動物の普通の接合に於ても、全く同じ過程が認められるやうに思はれる。

16 「細胞の歴史の何れの處に於ても、かゝる間違のない。驚くべき手段と目的との合致、即ちかくも豫言的な性質のものを、我々は見出す事がない。」と云ふのは、成熟は、卵(及び精虫)細胞の現在ではなくてその未來に注目するからである。("The Cell"; P. 233)

17 此れにも拘はらず、接合が母の體内で行はれ、又その凡ての影響を蒙むるがために、女性の方が明かにより大きな權力を持つてゐると、云はれるかも知れない。だが此れを補ふ下思議なものが、次の事

實に存在してゐる。即ち接合の後には卵子細胞の中心體は喪失するが、男性の中心體は後とに止まつてゐて、新細胞の、從つて未來の全生體の形成のための、分裂の原因となるのである。("Parallel Path," P. 56: Proffessor E. B. Wilson in "The Cell", P. 171. 參照)

18 「一細胞がその内に種の遺傳の總體を持つてゐると云ふこと、それ、數日又は數週間内に、軟體動物や人間を生ぜしめると云ふことは生物學上最大の驚異である。」("The Cell," P. 396)

第三章　術としての戀愛

戀愛の眞相は好く前以て描寫することも、又は合理的な愼重な言葉でそれを云ひ現すことも出來ない。ために、その偉大な初戀の示現は、全く若き人々に取つては豫想外のものに屬する。例へば自分自身の內部の組織が蕩ろけ出して、恰かも誰かの保管の中に移るかのやうに遠方に離れ去る感じは、確かにそれ丈けでも不思議な、生理的な又は心理的な經驗である。——然も適當な科學的な言葉で、記錄することの出來ない經驗である！　斯くして一種苦しい空虛の感——凡ゆる動脈や器官又は凡らゆる心や肉體の隙間と云ふ隙間に泌み渡つて、肉體の力を奪ひ、又時とすると脅かすに身體の破滅を以つてすることさへある、空虛と饑餓の感——が作られるが、それからは一刻も離れる事が出來ない。そして一つの事——卽ち或一人の人間——以外には、人生の凡ての興味が無くなつて終ふ。又一方には、此の新らしい人間が、その最も親密な者に自己を注入してゐる——（少くとも）自分と結婚して、微小な各細胞に新らしい生命を附與すると云ふ豫想を、脈官の凡てに泌み渡

らし、組織や體液に不思議な擾亂と變形とを與へるのを——名狀し難い元氣と喜びとを以つて認知する。又驚きを以つて自己の心の內部では、見る者凡てが一變してゐるのを發見する。それを認識する心の背景や構造が一變してゐる——卽ち自分と一緒に見てゐる別な人間がゐる——からだと、微か乍らも意識したりする。かやうな凡ての事は——全く我々の言葉で現したり、又豫め正確に記述する事が出來ない。然かもそれが到來する時の實際の事實には、抗るべからざる本當の力と現實性とを與へてゐる。斯樣な不思議な感情の發揚の外に——更らに少くとも、戀愛の始めの間のやうな——空しい憧れや切望のどん底から、期待若しくは成就の確信ある、恍惚とした高味への目まぐるしい移り變り——天國の喜びから地獄の苦痛への交互の速やかな地裂たい轉變——を考へると、此の新らしい全經驗は、非常に異常な又日常作業の生活からは非常に隔離したものともなつて來る。爲めに此の體驗を語る場合には、それは——恰も夢の國へか何かに——唯一笑の下に斥けられる事が屢々である。

然かも既に述べた通り、此れはいづれにしても微弱な非現實的なものではない。人間相互の關係の內でも、此の不思議な——「戀に陷る」と云ふ大變革程、顯著なものは、又と他にあるであらうか？　そしてそれに關聯する一切の幻想の後ろには、或事柄が、非常に現實的で又或重大な事柄が

起つてゐる。戀に陷るのは相互的な事もあらうし、單に片側丈けに止まる事もあらう。成功する場合もあらうし、失敗に終る場合もあらう。又それは、戀愛とは非常に違つた別種な事柄が、單に表面的にそれと類似した徴候を示す場合もあるであらう。だがいづれにしても或何かの事柄が、深い潜在意識の世界で起つてゐる。それはまだ見た事もない、だがぼんやりとはあるらしく思はれてゐた二人の存在が、本當に且つ永久に結ばれることであるかも知れない。又或時期の間、又（恐らく或事實になるかも知れぬが）或深味に迄互ひに移り合ひ、又徹底的に修正し合ふ事であるかも知れない。又それは、相互要素の混合と變形とが、殆ど完全に一方の相手には行はれるが、他の相手には極く僅かしか、又は全く行はれない事であるかも知れない。だがかうした色々な場合を通じて——幻想、誤解、蜃氣樓、心の迷ひ、又は表面的な滿足や内面的な失望と云つた風の下に於て——常に非常に現實的な事柄が起り、又重大な成長と進化とが行はれてゐる。

極く僅かな程度でさへも、此の種の現象が理解出來たり、又少しでも、此の激しい人生の荒海を乘り切るための羅針盤の度盛りが分つてゐるのは、誰しも、青年男女に取つての必須の事柄であると考へるであらう。だが悲しい哉！ それに關する智識は、彼等には少しも授けられてゐない。——實際今日の實狀としては、大人も若者も、それに關する少しの智識を持つてゐない。又少しの考察

も出來てゐない。戀愛術の研究は、實際存在しない事はない。——そして（その方面でさへ）オヴィドの「戀愛術（アルス・アマトリア）」やバツーヤナの「カーマ・スートラ」などは、非常にいゝものである。だが彼等は主として、若しくは全然、その題目に關する詳細や專門の事を——情事や情交の動作や、時間時節、位置、準備、藥、又はその效目と云ふやうなものを一緒にして——觸れてゐるに過ぎない。それは恰も船乘に船の詳細に關して——帆や櫓の使ひ方、舵の取り方、針路の變へ方、又は浪に向つて船首の方向を變ずる方法——を教へるやうなものである。それはそれ丈けとしては確かに結構な、必要な事柄であらう。だが誰が太平洋の上の我々の針路を示したり、又は道知るべとなるべき星を示すのであるか？ 此の大きな題目に關する近代の研究は、——根本の方面は矢張り蔑視することなしに——更らに深く心理學、生理學の兩方面、及び最後には宗教の方面に迄、深く入らなければならないであらう[1]。

既に述べたやうに、戀愛は成長と進化とに深い關係を持つてゐる。それは——まだかうした關係の下に認容されてはゐないが——確かに人間の不斷の成長の根本の要素をなしてゐる。と云ふのは戀愛が一個人の、一種の饑餓と見られる以上、饑餓の滿足は、人間の成長の須要のもので——又それは（色々な形式で）生理的、心的、又は靈的な養分としても必要で、健康、心の精力、又は博愛心

に取つての須要物であるからである。又戀愛は――此れも亦同じく未だ充分認められてはゐないが――進化の過程の根本的な要素をなしてゐる。即ち戀愛は、新生命構成のために、二つの生命の結合でもあれば、又その結合を誘導するものでもある。以上、それは明かに進化の一階段であつてその階段の方向は、主として明かに、それに關係する戀愛の性質や特質に依つて、決定されるからである。かくして戀愛術の研究の必要は、益々我々の注意を喚起するやうになつて來た。それは最早地下の、身を忍ぶ恥づべき儀式ではない。寧ろ適當な時機に於て、廣い常識としての教訓と手引とに若者を導く、公然の何等恥づることのない、人間生活の一部分なのである。

前章で略說した、原始動物の戀愛を一瞥する時、そこには確かに一種の純朴な魅力が存在してゐる。單純ではあるが、一意專心的な方法で、彼等は互ひに、時々融合し合ふ。そしてその過程の間に、個々の自體をすつかり失つて、互ひに混合して終ふ。そして一種愛情から共喰ひの形で、本質的なものを交換した後、再び分離する。此れは戀と饑餓の間の、明白な顯然たる關係でもあれば、又生殖の最初の始まりでもある。又一人の者が半分宛に分れるのが便利だとなると直ちに、二人の者に分裂する。次いで更らに分裂して四つになる。そして斯うした分裂を繰り返して、遂にはそ

の最初の者が何千、何百萬の多數に上つてしまふ。此れは實に實際的な方法と云ふの外はない。――然もその分れた者等は、果して（彼自身にも恐らく分るまいだらうが）尙一個人であるか、又は夫々相異つた個人であるかの決定がつかない。即ちかうした凡ての事は、確かに我々の賞讃と尊敬とに値する丈けではなく、又多くの思索の材料を我々に提供してゐる。

我々を驚かす最大のもので、又我々人間の生活にも適用し得ると思はれる事柄は、かうした微細な生物にあつては、戀愛はその各個體健康の重大な須要物となつてゐる事である。「性の進化」の著者は、或る頁（一七八頁）でかう云つてゐる。「此れ（接合）なくしては、不死と稱せられる原始動物も遂には自然の死を免れ得ないであらう。彼等に取つては、接合はその永遠の若さと不死との、須要條件となつてゐる。斯る下等な生物界に於ても、その種の不死鳥は、矢張り戀愛の火を通してのみ、よくその若さを回復するのである。」又他の頁（二七七頁）でモーバスの結論を引いて、かう云つてゐる。「既に我々は此の重大な結果、即ち結合は種の健康に必須のものである事に、氣附いた。即ちかゝる原始的な階梯に於ては、多少共に完全な融合、即ち本質的なものゝ交換は、その更生と活力更新とを結果するやうに思はれる。――然かも此れは明確な性現象の出現の、遙か以前に行はれる事で、先づ最初にそれは更生を結果し、次いで傍ら後期に於て、生殖を結果してゐる。

兎に角――どう云ふ譯かはつきりしないが――戀愛を以つて他人の健康に必須のものとする此の考へ方は、その後基督教の時代に、ひどく曖昧なものとなされた。當時當るべからざる勢の基督教が、それに對して取つた態度は、遂に戀愛の住地をば人間最奥の生命と歡喜との表現で、又その活動でゝもあるものから、單なる種の繁殖(スペシス)のための卑しき要求に過ぎないものに迄、一變せしめるに至つた。戀愛の靈と肉との兩方面を分離する、猛烈な努力が行はれた。靈の方面は讃美され、肉の方面は卑下された。前者は天國に祭り込まれたが、後者はその反對の地位に貶謫された。肉的の交合や種の繁殖の要求は卑しむべき要求と見做れた。眞の愛は天國にあつて、凡ゆる地上の接觸を卑しめた。然かも之れは引き離し得ざる者を引離さうとする、空しい努力に過ぎなかつた。それは恰も繪から繪具を引き離さうとするやうなもので、繪は「善い」が、繪具は「惡い」と云ふやうなものであつた。

かくて何千何萬と云ふ多數の男女は、かうした否定、即ち（凡らゆる方面で）戀愛は個人の健康に必要であると云ふ說の否定に依つて――或者は「天國」のために又或者は社會の慣例のために――空しく己が生命の不具にされ、害はれ、又はその個人的な幸福の蹂躙されるが儘になつた。人間の活動や活力の深い源泉は、屑芥に汚く閉されて終つた。人類進化上の或種の目的が、此の不思

議な否定に依つて、達成された事は、否むも無益な事であらう。實際斯樣な目的は――此の否定が文明期の間に廣く擴まり、又その長期に亘つて持續した事を考へると――有りさうに思へる。だがそれだからと云つて、人間の健康と活力が、此の否定のためにひどく減殺された事を否認する譯には行かない。勿論人間の進化は、區分的になされる。――たとへば一時に片足を前に出すやうなもので、此れは決して他の足が、永久に後ろに殘る事を意味するものではない。それに反して、その順番の來る時には、更らに一層確固たる前途が、その後ろの足に依つてなされる事を意味するのである。

今日我々は、新しい時代の開始期に際會してゐる。そして何かの方法による、異教的な世界觀の復興の準備をしてゐるやうに思はれる。否定的な基督教の宗規は、急速にその終焉に近づいてゐる。健康な生命の根本要素としての、凡らゆる形式の戀愛の必要が、再び我々の注意を强要してゐる。何人もよく成功した求愛の健康に及ぼす良效果――良い顏色、生き〳〵とした眼、輕やかな足取り、明晰な頭腦、敏活な反應、樂天的な世界觀――を見逃す程の、下手な觀相家ではあり得ないであらう。實際その凡ての組織に與へる影響――榮養、成長、健康の增進――は非常なものである。然かも此れは――戀愛と饑餓に就て述べた事を想起すると――極めて當然なことなのである。何故な

れば結局、既に熟知の如く、肉體内の凡ての細胞は、皆發生して來た元の細胞の寫しであるからである。故に一細胞に達する戀愛は、又恐らく凡てのものにも、何かの方法で達するであらう。又(實際の性交に於ては)恐らく唯に、特殊な兩性細胞の間に、融合と交換が行はれる許りではなく、一般に兩者の體細胞の間にも(戀愛狀態にある凡ての時期の間)目に見えない精氣的な融合と交換が行はれる。又微細な要素の交換に依る、相互の榮養が行はれる。

二個の肉體内の一般細胞間に、かうした交換と榮養が行はれる事は、既でに論及した化學的受精に關する研究で、一層確からしくなつて來る。その研究に依ると、或種の卵子、即ち卵細胞は、或化學的藥品、例へばストリキニーネか又は普通の鹽のやうな弱い溶液を施すと、精虫の受精作用とは全く獨立で、副分裂及び成長の過程を開始する事が、示されてゐる。[2] さて――一度び此の肉體が立派に形成されると――それから以後の成長と榮養とは、連續的な體細胞の分裂と副分裂とに依つて持續されるものである以上、此の成長の刺戟は容易く、他の肉體の勢力範圍に入る時、その肉體から發する微妙な放射と反應とに依つて、供給される。(と想像する事が出來る。)――此の放射と反應は、組織を通つて種々の細胞に到達出來る程微妙なものであつて、――勿論他の場合でゝは有毒で有害でもあるが――或る場合に於ては、既に我々の想像した如く、充分特殊な獨特のもので、よ

く活力附與の力を持ち、又刺戟的でゝもあり得る。そして此の活力附與の關係を給し、又その關係そのものであるのは、唯獨り戀愛のみである事は勿論である。

時々此の活力附與の力が非常に强烈で、又その要求が非常に熱烈なために、全身は苦痛のために跳躍、戰慄することがある。プラトーは彼の詩的な方法で、皮膚や組織の全般に渡る燒けるがやうな感覺を說明して、それは、到る處に(即ち我々の考へによれば、凡らゆる小さな細胞の内に生え出ようとする魂の翼の羽根のために依るものと想像してゐる。兎に角此の題目に關する彼の言葉は不思議にも深長な意味を含んでゐる。と云ふのは彼は(「フェドラス」の中で)かう云つてゐる。「實際愛する者の美を凝視して、自己に降り掛つて浸入する微分子を、その美から受け入れると(そして此の分子は此の故に『慾情』と名付けられてゐる)、魂は水分を與へられて暖められる。それは苦しみから解放されて歡びに滿ちる。だがそれが愛する者から離れて、又濕氣の欠乏のために乾枯らびて終ふと、直ちに羽毛の生え出る口は此の乾燥のために、非常に固く閉されて終ふ。そして生え出づるべき羽毛の萠芽は、ために妨害されるやうになる。そこで此の萠芽はかく下の方に、全體に滲み渡つてゐる、慾情と共に閉ち込められて、皷動する動脈のやうに跳躍したり、各々の閉塞された出口に向つて突つかゝつて行つたりする。ために魂は一面に突つつかれて、遂に苦痛のために狂

亂して終ふのである。」

即ち受精作用の特色をなす此の補足的なものゝ融合は、戀人の間に――唯にその性細胞の上丈けではなしに、又恐らく可成りの程度で體細胞の上に於ても、行はれる。そしてかうした融合上の補足的な性質は、如何なる戀人達にあつても、よく種族の生命の全部の光榮が保存され得る程の完全なものではない。だが時とすると、さうした程度の極く近くに迄到達される事がある。その時彼等は狂氣染みた一種の不滅の觀ある恍惚の感で充たされて終ふ。そして實際、魂に羽根が生え始めた！　とさへ彼等に考へせしめる。此れよりも低い程度ではあるが、尙此の補足的な結合や交換は疑ひも無く、かの非常に注目すべき點の――即ち數年の間に戀人同志が――樣姿、顏の表情、聲の調子、身體の運び工合、書體及びその他の凡らゆる微細な點に於て――不思議な方法で似通ひ合ふ事の――說明となつてゐる。

私は此處に於て、戀愛をば（その凡らゆる方面に於て）人間の健康の一般的な一條件として認める事は、凡ての又は何かの情慾に、亂暴にも耽溺するがいゝと云ふ意味でない事を、說明する必要があると思ふ。――即ち此うした場合に於ては、極く單純な論說の提出者でも、その實際の言葉よ

りは、遙かに、意味深長のものを示してゐると、一般に取られ勝ちであるからである。此處に性教育が、初めて必要となつて來る。と云ふのは、今迄かゝる戀愛に關する一般の教訓や議論は非常に不完全なものであつた。ために人々はヒステリー病みのやうにしか、――讃美する場合にも、けなす場合にも――それに就て語ることが出來なかつたからである。戀愛の積極的な價値や我々生活の優しい、立派な、必要部分としての戀愛の積極的な教養は、殆んど（少くともアングロサクソン國内では）人々の念頭に入らなかつた。青年男女に戀愛する事や、戀愛の方法を教へ、又實際にその技術を授け、又それを奬勵する事は、何か或る邪惡な、言語同斷の事のやうに思はれてゐた。[3]ハヴェロック・エリスはかう云つてゐる。「基督教が果たして此の責任を負ふべきか否かは知らない。だが基督教國の全體に渡つて、單に戀愛上からのみならず、又道德的にも、戀愛術の持つ最上の意義が不幸にも認め損はれたのを否む事は出來ない。今日我々の周圍に行はれてゐる、かの性的覺醒運動の復活に於てすら、戀愛術の智識を以つて性教育の根本的な必須事項とする極く微かな認容すら殆ど罕にしか存在しないやうである。今日一般に知られてゐる大抵の性教育は、全く純然たる否定的のもので、勿れ主義の連續である。若しもかうした失敗の原因が、戀愛術なるものは事實、その基礎を生理學や、心理學の智識の上に置かれるべきものであるにも拘はらず、それは非常に微妙で入

組んでゐて、然かも余りに個人的であるために、講義や册子として、系統立てる事が不可能である
と云ふ、意識的な念入りな觀察に基くならば、それは合理的な正論に違ひなからう。だがそれは實
際、全然の無智と無關心と、更らにそれ以上のよくない事柄に基因するやうに思はれる。」
私は、かの前世紀の善い人達をして、貪慾な商業主義に至らしめた殆ど凡ての責任は實に此の無
關心、即ち俗人根性にあると考へるのも、敢て當を失した事でないと思ふ。彼等はその手から、笛
や竪琴を奪ひ取られたのを知つて、糞耙を以つてする更らに一層の活動に、向はうと欲したのであ
る。

戀愛は人間の——生理的、心的、情的、靈的などの、夫々多少共に必要な——諸關係の合成物で
ある。そして此れは完全に實現されないのは極く罕な事であるが、かうした各方面からの幾らか宛
の表現がなければ、その戀愛は不完全な觀を免れず、又戀愛そのものにも、不完全な感じが伴ふも
のである。戀愛を特殊な一方面に限ることは、たとへ馬鹿げた不可能なことでないとしても、全く
不完全なものたる事は免れない。例へば單なる性慾方面の肉體的な戀愛は、馬鹿げた事で、又一種
の空文である。——肉體的な方面の享樂や滿足は、表現される感情に所以するところが非常に多い

故にその感情を拔きにしたところには、殆ど何等の滿足も存在しない筈である。せい〳〵共處には
唯、消極的な快樂、即ちその以前の肉體の緊張狀態の緩和から來る、樂な氣持しかあり得ない。そ
してかうした場合には、性交は容易く沈欝と失望との感に伴はれる。なぜなれば、肉體方面の滿足
が充たされた後にも尙持續し、且つ二人の者を接ぎ合せるそれ以上の微妙な、持續的な要素が、充
分戀愛に存在しない以上は、後の狀態が初めの狀態よりもよくないのは、寧ろ當然なことではない
か！
だが例へば、戀愛を單に心的の方面にのみ制限して、それを唯愛情の籠つた手紙を書いたり、又
は經濟學上の意見の一致を見たりするやうなものに過ぎぬものとせしめる企ても、等しく又、全然
馬鹿げてゐる。又情緒の方面にのみそれを限つて、多少共に女々しい感傷的な領域のみにそれを制
限しようとしたり、又は幾分高慢げに、物質の方面を侮蔑して、唯靈的の方面にのみそれを限るこ
とも——此の場合でも又、前にも述べた通り、繪具を使はれずに繪をかゝうとする愚に陷り易いも
のであるが——亦同樣である。かうした凡ての方面は——全く完全な健全な戀愛は、前記の通りに
極く罕にしか實現されないにしても——必要で、又少くともあつて惡くないものである。肉體的の
方面は、非常に多くの理由から、——肉體的の要求や健康を含めて、又恐らく特に多くの障壁を取

り除いて、他の親密への道を打ち開くと云ふ理由から――望ましいものである。心的の方面は、關係に形と隣廊とを與へるために、望ましいものである。又情緒の方面は、表現されるべきものを供給するために、靈的の方面はその全構成物に、恒久性と絶對的の安定とを與へるために、又望ましいものである。

此の種の何かの大きな關係が成り立つためには、寧ろ緩漫な、漸進的な完成の方法が必要なのは恐らくかうした複雜した性質のためなのである。凡ての樣々な要素は狩り立てられて、第一線に立たされなければならない。凡ての偉大な理想と同じやうに、戀愛も亦二つの方面を持つてゐる。――即ち直截的な內面と、無數の細かしいものを具へた、複雜した外面とである。意識の上でゝは、それは一瞬の內に、――單純で、無比で、不變な――姿を現す傾向を持つてゐる。だが經驗の上でゝは、それは多くの骨折を以つて實現されなければならない。凡ての要素は活動を開始して、その各の分け前を、全體の結果に寄與しなければならない。若しも我々が、かの精子細胞と卵子細胞との接合の現象（第二章參照）――各の核の核粒の要素に起る非常な變化と混亂。核の融合。最後に（新生體の形成のために）各要素が現出して、その各の分け前を全過程に寄與し得しめるための、染色體のなす一列の整頓――を想起するならば、我々は我々自身の內的な經驗との、不思議な類似に

驚嘆せざるを得ない。即ち戀愛は心の中を探し廻つて、內的な性質の凡らゆる要素を、その曝れ場から狩り立てる。そしてそれに一定の定義と形とを與へ、兎に角それに出場を促して、謂はゞ出發線を踏ますやうな事をせしめる。我々は又後に、此の事に立ち戻つて論じよう。此處では唯私は、如何なる大きな關係にも、充分な時日の餘裕が必要である事を示すために、此の過程の複雜さを力說する丈けに止め度いと思ふ。どの方面の――心的、情緒的、肉體的などの――性質が、偶々皆の先きに立つ事があるとしても、それは事件全體を專有すべきものでもなければ、又よく專有し得られるべきものでもない。それは當然他の方面のものをも引入れて、それに各の地位を與へなければならない。そして此れは時間と、一時的の惑亂と混雜とを意味する。「戀に陷る」ことは、不思議にもこうした效果を現すものである。それは恰も細胞內に於て我々の認めたものと類似の混亂が、心の中に始まつたかのやうにして、――心や肉體の働きを止めて――暫くの間それを痲痺せしめる。巧みな話手が無口な馬鹿になつたり、通人が程のいゝ馬鹿になつたり、立派に仕事をしてゐた者が間違つた事許りするやうになつたりする。我々がかうした事の上に、更らに人間々の非常な相違や性格要素の混交する割合の相違を附け加へて考へて見ると、正しい戀愛關係の條件は、如何に極度に複雜したものでなければならないが、又それを取扱ふ場合には如何なる手練と忍耐力とが必要で

あるかと云ふ事が、明白になつて來るであらう。

故に青年や夫や又は戀人は、よく急いで性的行爲を濟すことは、戀愛の開始でもあれば、又同時にその完成でゝもあると考へるが、さうした無智は非常に有害である。それは事件の始まりよりも寧ろその終末を示す場合が多い。何故なれば、各の場合に於ける中心的な放射力に、完全な働きを現さしめるためには、寧ろそれに猶豫、然かも充分な猶豫を與へる必要があるからである。かの中心體は融合の接近と同時に、原始動物の内に姿を現して、その内部の核粒の要素を支配するやうに思はれる。又人間の戀愛に際しては、放射力が姿を現して、非常に不思議にも、戀人の個人性の要素を陶汰したり、それを作り變へたりする。ところが、此の兩者を類似したものと想像するのは、余りに空想に過ぎた事であらうか？　或意味から云つて、中心體の魔力は、人間界の事象に熟知のかの魅惑に相應しないであらうか？　それ等は共に、姿を深く隱した、無上に重大な種族の生命と力と、又は神性と云つてもいゝものとを表すものから、現出するのではなからうか？

此の魅惑と云ふ事柄と、その存在の有無に應じて、戀愛が目ざめたり又は冷えたりする。その決定的な力とは、何と云ふ不思議なものであらう！　此處に狩獵場での或る椿事のために、容貌が滅茶苦茶にされた、一婦人の話がある。彼女は自分の許婚を呼んだ。そして氣なげにも彼に、自由を

申し出た。ところで彼は……その申し出を受入れた！　と云ふ譯は、彼女の美が破壞されたがために、彼にはその幻と神性とが、喜なしにされたからであつた。又此れと同じ今一つの話がある。だが此の場合ではそれとは反對に、男は直ちに愛と献身とを約束した。――それは彼女の肉體上の欠點のために、彼女の輝きが彼に取つて曇らされるどころか、寧ろ彼女の氣高い感情のために、一層輝かされたがためであつた。

斯樣な魅惑は、人間の隱れた洞窟の中で働き續ける。そしてブルーノーの「火山の構成」のやうにして、二つの魂を一つに熔かし合し、遂に本當の、深い、又恐らくは永遠の結合として、明る味に現出せしめる。結局眞實のものは、内的の結合である。それは交合に凡らゆる喜びを附與し、感覺の世界に透入して、それを壯嚴と美に充ちた世界に、洗ひ聖めてしまふ。斯樣な創造的な、構成的な力に對しては、充分の猶豫が與へられなければならない。オヴィッドはその著「戀愛術（アルス・アマトリア）」の中で、多くの行を此の問題に費してゐる。「著者をして」と彼は云つてゐる。「濕つて松明のやうにして、緩い情熱に燃えしめよ。」……Non est Veneris properanda voluptas（性交は本當の快樂でない）……Quad datum ex facili longum male nutrit amorem（易々と受け容れられる戀愛は、長持ちはしない）」などがそれである。そしてかうした文句は、疑ひも無く、主として情事の實際上の所作に就て

述べられてはゐるものゝ、偉大な熱情の一層重要な方面にも亦、非常によく適用される。接近と時日と手練の長い前景、牽引力の散布、相互の浚入、惱み又は苦痛すら――最も、他の事柄に於けると同樣、かやうな事柄に於ては、屢々最上の事は豫期も準備も絶したものであるが――かうしたものは當然期待もし、又覺悟もされなければならない。

そして若しも男子が、その性質の凡ての要素に、それが現れて、此の偉大な神秘に參加するやうの猶豫を與へる必要があるとするならば、又女子にも、その役目を果たす爲めの猶豫を與へる事が尙更ら一層必要であると云ふのは、概して戀愛は、男子よりも女子に於て（勿論、例外はあるが）一層絶頂への進み方が緩漫であると云つていゝからである。男子は明かに、その演ずべき一定の役割に專念する。だが婦人に於ては、戀愛はもつと散漫なもので、それが全生命の生氣付いた、創造的な狂亂となる點に迄到達するには、もつと長い時日が必要である。愛撫、優しい取扱、挑發、犧牲、及び何千とも知れぬ間接的の影響が相集つて、徐々に此の結果の作成に力を盡さなければならない。そして此の場合に生ずる事態には、屢々男子側の非常な自制が必要とされる。然かもかうした事は、決して仕甲斐のない事ではない。「眞の結婚は」と或人は云つてゐる。「彼等は深刻な戀愛から、今一つ別な――銘々から離れてゐて目にも見えないが、各々の手を捉へて二人を一緒に結び合

す魂が生れる時初めて行はれる。それは太陽と星辰から生れる光り輝くものであつて、最初の間は脆くてかよわいが、次第に肉體を具へてゐる子供のやうに成長して行つて、彼等を導き、又彼等と共に踊るのである。」

かやうな勞苦とか遲滯とか犧牲と云ふ凡てのものからして、美しい金剛不壞の結合が皆、鍛え上げられるものである以上。さうした事は決して少くも仕甲斐のない事柄ではない。一切の藝術に於けるがやうに、此の最も偉大な藝術に於ても亦、斯樣な勞力なくしては、よく長きに耐ゆる如何なる結果も得られるものではなく、又或程度迄の惱みと苦痛のない場合に於ても、同樣である。若い人達や未經驗の者は、或はさうと考へないかも知れない。彼等は運よく、又事實何等の努力もなしに、男子は唯の一筆で「幸福な乙女」を書いたり、又は「希臘の奴隷」を大理石に彫り刻む事が出來るものと、考へるかも知れない。だが凡ての經驗は、それと違つた事を示してゐる。故に男女間の完全な事業には、間接や直接の無限の骨折や忍耐が、拂はれてゐる事も示してゐる。故にかうした結合が萠し、又形成されるためには、必らず、常に多くの苦しみが掛けられなければならない。――なぜなれば苦しみに依つて初めて、人間の魂が鍛ひ上げられ、又旨く互ひに當て嵌るやうに彫り刻まれるからである。

苦しみのない戀愛を――人が戀愛の事を考へるに及んで――眞面目に想像する事が出來るであらうか？　初めから少くも拒絶されずに承諾されて、素直に云ひなりになつてゐる花嫁や、にこやかな兩親や、一見洋々とした前途や、無限の財産で元氣づけられる求愛を、おゝ男子よ、假りにも自分の心に畫いて見るがいゝ！　何と云ふ退窟極ることであらう！　どんな强い心の持主でも、此の暗示には果して尻り込みしないであらうか？　又附隨物や條件の點で、それがたとへ樂しさうに見えてゐやうとも、尙かうした結婚かよく眞の戀愛と稱し得られるであらうか？

何故なれば、何かの價値のある戀愛になると、その證據としてそれはいつも、苦痛や努力を要求する。そして容易く成就されるやうなことには、滿足しないからである。岩石や絶壁を越さずして人はどうして偉大な絶頂が知られよう？　然かも苦痛は屢々、或る不思議な方法で、戀愛の尺度――眞實の戀愛を確かめる尺度であるやうに思はれる。そして（神秘の一つであるが）それは一つの大きな喜びに變形する。然り若し人々が理解さへするならば、此處に最も貴重な神秘の一つがあり偉大な謎の解決があるのである。

だが一般に、眞の戀愛の進路の順調でない事は、多少共に、凡ての人々に依つて了解されてゐる。そしてそれを順調に進まなくせしめるのは――彼女自身に非常な苦しみとなるにも拘らず――女子

の持つ不思議な横柄な本能なのである。エリスは實際的に、羞恥の凡ての進化を――遠く動物に迄溯つて――此の本能に基因せしめてゐる。――即ち此の本能に依つて、女性は絶えず求愛の方面に凡らゆる困難や障害を（羞恥や矛盾や移り氣などで）投げかける。そして男性の内に、それに打ち克つための工夫や激働や精力を喚起する。又その眠つてゐる性質の各要素を覺醒する。そして完成を手控えさして、性格や色々な性質に、その集注のための、猶豫を與へる。又間接には彼女自身の上にも、それと同じ效果を惹起する。故に畢竟かうした方法で、最大限度の熱情や動搖が作り出される。そして人間の場合にあつては、戀愛はその魂の深味と、隱れたる洞窟とに透入するのである。此れが即ち羞恥の起りであつて――それは決して自然の、戀愛に對する否定ではない。寧ろ一時的の障害で、戀愛をして一層動搖の激しい、魅力の深いものたらしめる。謂はゞ奸智に長けた老婦人の策略のやうなものであり――又戀愛を更らに一層深刻たらしめ、且つ溝渠を深めて一層深遂なものたらしめる。彼女の手段でゝもある。

實際的にも、又は策略の上から云つても、余り容易く相手の戀を受け容れるのは、間違つてゐる。釣針は餌を引き戻す時にのみ、魚に喰つ附く。此れは憶えて置くべきことだが、オヴィッドはかう勸言してゐる。「戀人はたとへ戸口が入り易くても、又事實そこから入るのが便利であつても、須ら

く窓口から這入らさるべきものである。」そして、大抵の娘達は、（たとへオヴィッドは讀んでゐなくとも）本能的に、此れは正しい策略であると知つてゐる！　本當の戀人に取つて、無造作な云ひなり次第の、利他的な——全く氣持の上では基督教的で、枕同樣に、少くもそれ特有の形と云ふものが無い——愛情程、嫌惡すべきものではない。ロマンスは、利他主義を一寸口にした丈けで、飛び去つて終ふ。そしてロマンスが、戀愛の本質をなしてゐるのである。

故に戀愛に特有の障害丈けではなしに、本質的な相違も亦、熱情の成長に取つて必要である。年齢の相違、性の相違、階級、氣質、血統、學問、教養の相違など——その相違が余り大き過きない場合には——凡て必要で、又有益である。それ等は凡てロマンスを意味する。そして原始的な、原始動物の法則として我々の知る、本質的なものゝ交換に、多大の貢献をする。兩性間のロマンス——それは普通、同性の間に於けるものよりは、遙かに大きい——の永續するのは、男女相互が決して相手を理解し得ないと云ふ事實に、基因するのが、全く本當らしい。その一方の者は他の者に取つて、いつも夢幻の國の人物であつて、或時は本當に神々しく、又時とすると悲しい哉！　その反對の者であつたりする。だが單純な人間の割には、その隣廓は決して明確なものではない。

だが苦痛と惱みとの問題に立ち戻らう。さうしたものゝ働きの内には、單に戀する者にその戀の

範圍若しくはその深味を啓示する以上の、何物かゞ存在してゐる。それ等は確かに、事件の内面的な實際との、或何かの關係を持つてゐる。結合が成立され、又或意味から云つて、新しい生命が創造される、鑄型に嵌めたり、叩いたり、鍛え合せたりする過程との、或何かの關係を持つてゐる。それは恰も、二つの裸かの魂が接近して、若しくは何處か接觸の近くに迄やつて來る時、一方の者が必然的に他の者を燒いたり、燒き焦したりするやうなものである。心的な要素の強烈な化學作用は、本當の焰に似たものを發生せしめる。新しい結合が形成され、甚大な變形が行はれ、不思議な諸の力が開放され、又恐らくは新しい個人性が創造される。そして丁度分娩と同じやうに、此の全過程の完成と徴候とは、決して單に喜び丈けではなくて、又苦悶なのである。

此の際、しして間違のない事は、唯堪え忍ぶことである。騒ぎ立てたりするのは、有益なことではない。心の方面で苦惱と呼ばれるものは、肉體の方面で我々が勞働とか努力とか稱するものに相應する。諸君が荷車の車輪に肩を掛ける時、その努力からの苦痛と壓迫とを感ずる。だがそれは諸君に、諸君は力を行使してゐる、即ち或る何かの事がなされつゝあると云ふ事を確信せしめる。それと同樣に、心の苦しみも亦もつと調和し難い他の世界に於て、或何かの事の行はれてゐる確信を、諸君に與へる。愛する者を篤つたり、佛頂面をして見せたり、又は責めつけたりするのは、色々な

事の内でも、一番愚かな事である。又慾より以上に悪い、無益な事である。何ぜなれば、それは間柄を疎隔する事しか出來ないからである。恐らく相手も同じやうに苦んでゐるのかも知れない。——恐らくもつとひどく苦んでゐるのかも知れないし、又もつと少なく苦んでゐるのかも知れない。だがそんな事は、どうでもいゝではないか？　苦しみが現在やつて來てゐる。そしてそれに堪え忍ばなければならない。何んな事にもしろ、兎に角仕事が行はれてゐて、變形が成就されつゝあるのである。諸君は、諸君の愛する者に、自分の代りに苦んだり、又は自分が苦んでゐると云ふ單なる理由から、相手の者にも亦苦んで貰ひ度いと、欲するのであるか？　又諸君の欲するのは、戀愛ではなくて、憐憫であるのか？

一方獸つてかうしたことに堪え忍ぶのは、非常に有效なものであると、私は信ずる。それは全く目に見えない糸で、人々を諸君に惹き寄せる。既に云つた通り、心が張りつめたり亢奮したりする事實は、何處かに壓迫若しくは索引が行はれてゐる事を示す。その糸は目には見えないけれども、(自分の想像してゐた者ではないとしても)その糸の一方の端には、それに對座する誰かゞゐるものである。

言葉は兎に角、戀愛の場合に於ては、詰らないものである。それは詰らないどころでない、何の

益にも立たない。更らにそれは無益以上に悪い、と云ふのは、それは人を欺くからである。戀愛は藝術である。「それは動作に依つて發現されなければならない。」と瑞西の一作家は云つてゐる。「そして言葉に依つて露はされてはならない。」又ハヴェロック・エリスは、更らに明言や誓言に頼る誤りを述べてかう云つてゐる。[6]「男子が女子に向つて、己れの妻になるのを懇願するのが、求妻の第一歩で——又恐らく求愛の全部である——と考へるやうな無分別な戀人達に依つて、此の事は殆んど了解されたことが無い。此れはひどく見當違ひのことである。ために非常に大きな要求を、急にその時機でも無いのに持ち出して、求婚者としての機會を全く永遠に無にして終ふ場合が、不斷に行はれてゐる。」又他の處で彼はかう云つてゐる。[7]「戀の願ひは、言葉でなし得るものでない。又言葉で忠實にそれに答へ得るものでない。戀愛の存續する限りは、微妙な占ひは尙今日でも、必要である。」

戀愛は藝術である。音樂や美しい詩の意味が、單に話丈けでは傳へられないのと同じやうに、幾ら言葉で明言した處で、戀するものはその云はうと欲する事柄に近い、何かのものを云ひ表し得るものではない。そして此れは（それには色々の理由もあらうが）一つの非常にいゝ適當な理由がある。——と云ふのは、戀人自身すらその云はうと欲する事を、知つてゐないからである！　事情か

くある以上、何かの事を述べ立てる事は、殆ど全く、人を述したり、若しくは人を偽くことを述べるがやうなものに等しい。故に端正な戀人は、此の事を知つてゐて、口を緘して語らない。自己の献身に就て喋々するのは、その献身を殺すことである。——又愛する者の目に、その献身を詰らない、いゝ加減なものとせしめることである。

兎に角戀する者は、云ひ度い事を記述したり、又は說明することは出來ないにしろ、それを感ずる事が出來る。——又絕えずそれを感じてゐる。そして此の感じを、他の感じと同じやうにして、彼は間接の方法——象徵、動作、行爲や身振りのアルファベット、又は生命と藝術との凡らゆる象形文字——に依つて、表現することが出來る。動物や天使や、言を云はない凡ての辛福な生物と同じやうに、彼は天地萬有の、古い原始的な、普遍的な言葉を使つて、自己を述べ傳へる事が出來る。

註 1 ハヴェロック・エリスの非常に勝れた「戀愛術」に關する論文は（"Studies in the Psychology of Sex", vol. vich. xi. 參照）、此の論文の主題をなすものゝ多くを含み、又更らにそれよりもずつと遙かに廣い範圍と見解とを含むものとして、又此處に擧げらるべきものである。

2 "The Cell," by E. B. Wilson, P. 391; "Das Leben", by Jacques Loeb (Leipzig, 1911), PP. 10—20, &c. 參照。植物の樹液（ゝし）の發生や動物の身體の痛疽などは、又かやうな化學的若しくは一間

接的な受精の例であると考へられるゝやうに思はれる。

3 "Psychology of Sex", vol. vi. P. 517.

4 "Studies in Psychology of Sex," Vol. i.

5 "Ars. Am." iii. 605.

6 "Psychology of Sex," vol. vi. P. 542.

7 同書五百四十四頁。

第四章　戀愛の究極の意義

「自己の献身に就て喋々することは、その献身を殺すことである。」恐らく假初めにも言を云ふ事丈けでも、それを殺すことになると、云ふべきであらう。屢々人の考へる事であるが、我々の周圍の人々を假りにも實際、沈默の魔術の輪の中に止まる事が出來さへすれば、彼等――男や女――は、どんなに神聖な美しい人間となる事であらう！　又どんなに優しい愛すべき、美しい魅力と堂々たる運命を持つものとなるであらう！　だが悲しい哉！やがて此等の神聖な者の一人が喋り始める。――すると、それは丁度あの伽話の中の、口を開く度びにそこから二十日鼠の飛び出す婦人のやうである！　此れには殆ど誰しも堪らぬ位の驚きを感ぜざるを得ない。此の驚きは、その際現される無智のためではない。――なぜなれば、動物や、又は天使すら、皆極めて氣持のいゝ無智ではないか――寧ろそれは知らず〳〵の内に現し出される心の狀態――屢々言葉の端や聲の調子などに聞かれる、あの白々しい嘘のためなのである。

だが戀愛は此の虚僞を燒き盡して終ふ。戀愛が――たとへ野卑な、亂暴な、殘虐な戀愛であつても――十萬の日曜學校よりも、憐れな人類の薫化に霊す所の多いのは、實に此れがためなのである。それは小さな人間の魂の巣喰つてゐる、山と群る虚僞――詰らぬ自惚や詐りや卑怯――を掃蕩する。又卑しむべきもの――口を開くや否や舌の先きから飛び出す、凡らゆるもの――を改變する。それはかうした凡てのものを、綺麗に燒き拂つて終ふ。そして戀人を唯無言に――然し殆ど僞りのない者とならしめて終ふ。

戀愛は藝術である。然かも最大の藝術である。――そしてその眞實は言葉では、即ち直接的な如何なる言葉を用ひても、現はし得ないものである。諸君は勿論愛する女に見せるために、十四行詩を書くかも知れない。だがそれは一つの仕事であつて、即ち何か或る事柄をすることである。それは藝術上の仕事であるか、若しくはさうした仕事をしようと努める事である。――又どうしても戀人が、それを讀まなければならぬ譯のものではない！　又諸君は自己の感情を示す、もつと決定的な――例へば戀の競爭者を劍で斬り殺すやうな――手段を取るかも知れない。それは差支へのない事である。だが婦人を明言で煩さがらしたり、又明確な返答を求めるのは、(それは自己自らが嘘を云ひ、又彼女に對しても嘘を云はすことである。)共に詰らない、無益なことである。

戀愛の表現は、一つの大きな技術である。そしてそれに熟達するためには、人間最高の創意と能力とが必要である。――だがそれは一般の人々には全く無視され、又憎惡されてゐる。そして極く少數の人々（及び必ずしも「尊敬すべき」人と云へない人々）に依つて、その術が磨かれてゐるに過ぎない。それは美の表現が大きな藝術であると同じ理由で――戀愛そのものが（美と同じやうに）日常の生活や談話の世界と違つた、別な世界に屬してゐると云ふ理由から――又大きな藝術である。

言語は人間の大きな特權である。それは人間を、他の生物から區別せしめる。そして特に文明期の間に於ては、人間の一つの大きな誇りとなつてゐる。動物はそれを使用しない。彼等はまだ、その必要に達してゐないからである。天使もそれを使用しない。彼等は既にその必要を通り越したからである。それは人間の意識の、第二の階梯に屬する。即ちそれは自意識――自我を孤立的な、他のものから掛け離れたものとしたり、又は自我を他の自我とは相反のものとして、事實數百萬の他の中心の中にゐながら（何と云ふ奇妙な矛盾した言葉であらう！）然かもそれは、萬物の本源たる中心であるとする、根强い意識――の上に築かれてゐる。かの日常の言語は、凡て此の種の意識から發生し、又發生して來てゐる。――即ちそれから發生してそれを描寫し、分析し、詳說し、又表

現する。――そして結局その發生して來た元の意識と同じやうに、それは混亂した、錯覺的な、不充分なものである。そしてそうした自意識の上に築かれない――又事實自己集注の否定でゝもある――戀愛は、唯その欲するところのものを、生命、動作、詩歌、犧牲、暴行、死、又は偉大なる宇宙萬有のパノラマの言葉で、表現することしか出來ない。

自意識は戀愛に致命的のものである。自意識的な戀人は決して、自己の「思ひの屈く」ためしが無い。女子は彼を眺める――それからもつと興味のある、別なものに眼を轉ずる。近代の商業主義的文明と基督敎との全時代も亦、戀愛には致命的のものであつた。と云ふのは、かうした大きな運動は、共に人々の考へを自己の個人的な救濟の上に、基督敎は魂の救濟の上に、商業主義は金箱の救濟の上に――集注せしめたからである。かうしたものは自主的な意識を最高程度に迄增長せしめた。ために――さうしたものは皆、人類史上に於ける用途も、又は演ずべき役割も持つてゐたかも知れないが、社會の集團的な精神に對しては、致命的のものであつた。又私的生活に於ける魂の悅ばしき表現に對しても、致命的のものであつた。

自意識は、眞の魂の表現である戀愛には、致命的のものである。そしてどうして（或何かの理由から）近代の世界に於ける此の題目の取扱方が、凡て此の苦しい硝子張りの谷間のやうなものゝ中

に迫ひやるのであるか――どうして子供が、素知らぬ顔と蹙め面の只中で、無智と暗黑との内に育てられて、その愛する者の善良な點や美しい點は全く無視してしまつて、唯自我と自我に附きものゝ邪惡な事を考へるやうに强ひられるのであるが、又どうして此の同じ態度が大人の時代に迄持續するのであるか、又どう云ふ譯か、戀愛の自己犧牲的な英雄的行爲が行はれ難くなつて、性的行爲そのものすら、戸外で――自然の偉大な、充滿した生命と直かに觸れて――行はれる代りに、一般に、心の暗黑と不健全の象徴であり、又人間性の更らに卑むべき要素の扶植場でもある、密閉した息苦しい部屋の中で行はれるやうになつたのか、全く不思議な事と云ふの外はない。[1]

既に述べた通り、如何なる永續的な結合、即ち眞に偉大な、完全な戀愛の關係にも、充分な猶豫が與へられなければならない。恐らく自分の氣持で、實際に如何ともし難くなる迄、決して行動に出ないのが、(若しかやうな事柄に、何かのいゝ規則があるとすれば)いゝ規則であらう。兎に角此れと反對の方法――極く僅かな壓力でゝも、直ぐ樣蒸氣を排出してしまふやうに、自分の感情を外に現し出す方法は――明かに間違つてゐる。此れは深奥のものが搔き起されたり、又大きな力がその働きを開始するための機會を、與へない。又或程度迄の、男子側の自己抑制と手控とは、前にも述べた通り、婦人の戀情を開發して、それを確立せしめるための猶豫を與へる。だが此れには限度が

ある。そして同情や思ひ遣りすら、必ずしも戀愛に適當したものではない。そこには又、その自由の力を振ふべき、もつと大きな――巨大な本質的な――或るものが存在してゐる。そして結局、(若し適度に使用されるならば)力は戀の最も大きな贈物である。私は、凡らゆる婦人は皆、その心の奥底でゝは、暴行を加へられる事を欲してゐると思ふ。だがそれは正當な男子に依つてゞなければならない。此れは何ものよりも、最も感謝して受けらるゝ贈物である。何故なれば、それは最も眞面目であるからである。然もそれは、凡らゆるものゝ内でも、最もし辛らい贈物である。――と云ふのは、非常に鋭い本能でなくては、その適當な時機を見定める事が、出來ないからである。若しも運惡くそれが不適當な時機に行はれでもすると、事は凡て全然臺無しになつて終ふ。

自然は强力や能力を尊重する。此の事は、自然の中心に動いてゐて、その秘密を分け持つ戀愛に於ても、同樣である。既に少しく述べた通り、戀愛を一種精練した、優美な、利他的のものとするのは、此の上も無い愚言である。一般に暴力は戀人に取つては、冷淡よりも堪えられ易い。又毆られたり、蹴られたり(實際的にも比喩的にも)すると、それで戀情が刺戟されて一層濃厚になるやうな氣質の戀人は、澤山にあるものである。オヴィッドさへ――恐らく當時の遊野郎式の人間であつたに相違ないが――かう云つてゐる。Non nisi lacsus ama (反抗なくして戀愛は成立せぬ) 眞似事

の性の戦ひか、さうでなければ本氣の、敵意を含む戦ひには――如何なる事があらうとも、愛する者に向つて肉薄しなければ止まない感情が存在する。何とかして相手を感動さして、自分の印し、即ち印象をその愛する者の上に殘さうとする――又反對に相手の者に感動させられて、その印象を感じやうとする――のが、此の場合の要求である。男子がよく熱狂的な戀に陷つて、その熱情の充たされない許りに、愛する乙女を殺して終ふ不思議な場合があるが、此れが即ち説明であると、私は思ふ。私は此れは、想像的な他の戀敵に對する嫉妬心のやうなものだとは、考へない。それはさうしたものよりも遙かに直接的な或るもの――ナイフか若しくは彈丸丈けでゝもいゝから、彼女の本當の自我に到達しようとする盲目的な焦慮――から來るものと思ふ。私は此の事は、絶えずお互ひに喧嘩をし乍ら、然もどうしても夫婦別れの出來ない、多くの不幸な既婚者の場合を、説明すると確信する。彼等は互ひに、本當に愛し合ふ事が出來ない。然も互ひに一人でゐる事も出來ぬ。一種不思議な狂氣が彼等を騙つて、絶えず接觸したり、衝突せしめたりするのである。

だが此處に簡單に述べた事柄の内やその向ふには、更らにそれ以上の戀愛全體に關係のある或ものが存在してゐる。既でに述べた通り、「戀に陷る」と云ふ異常な、又屢々苦痛でもある經驗に際しては、人間の内部に、大きな變化が行はれる。驚く可き動亂と變革とが行はれる――そして古い習

慣は斥けられ、新しい習慣が採用される。愛する者の存在が、此の魔術的な撰擇と改造の力を發揮する。――そして此れは、その關係が「成功」したものであらうと、又はその反對の不成功なものであらうと、それには可成り無關係なのである。主要な事は唯接觸であつて、一人の人間が他の者を接觸し合ふ事である。

我々は既に原始動物の場合に於て、「成熟分裂」と、融合の準備としての「極體の排除」との、驚くべき事實を知つた。――即ち將さに融合しようとする二細胞が、互ひに接近する時に、その接觸の以前に先立つて、變化が行はれる。そして一方の細胞から、核粒の要素の半數が排除され、又他の細胞からも、その核粒の要素の半數が排除される。此の分裂と排除の正確な性質は、まだ明瞭にされてゐないが、それは兩方に殘留した要素をして、互ひに補足的なものとならしめて――その結果、結合の行はれる場合に當つて、新しい以前にない結合物の内にではあるが、種族の生命の屬性を一つ殘さず保存しようとする――性質のものである事丈けは、充分信ずべき理由がある。事實原始動物は妨げとなる或要素を排除して、その融合と、種族の生命の實現のための準備をしてゐる。そして自然我々には、人間の場合の前記の混亂や變革は、果して此れと同目的のものであるか、若しくはそれと酷似した點を持つかどうかと云ふ事が、疑問となつて來る。實際人間の戀愛に際して

如何なる事が目に見えない世界に行はれやうとも、我々は兎に角、それは遠大な深遠な意義を持つ或物である事丈けは信じない譯には行かない。又その過程が、微々たる人間に對して、屢々大きな苦痛を含むのを發見するのも、容易く容認の出來る事であつて、決して不自然なことではない。

戀愛の補足的な性質は、屢々人の指示するところであつて――醜い者が美しい者と、背の高い者が低い者と、活動的な者がぐずな者と結婚するなどが、それである。ショーペンハウェルは「意志及び現識としての世界」の中で、此の題目に就て特殊な研究をした。プラトー、ダアウィン、及びその他の人々も亦、此れに言及してゐる。生物は恰も戀愛に於て、自己に欠除してゐる要素を供給し均衡を保ち、又種族の理想を完美せしめるところの他の者に向つて――ダンテ・ロゼッチの言葉で云へば――「激しい渴きと鋭い饑え」とを感ずるものゝやうに思はれる。そして我々の各が、どちらかで常人離れをしてゐたり、完全や均衡が失はれておたりする。故に我々は皆相手の側に於て、それを補修する性格を見出す事が必要のやうに思はれる。――そしてその相手も亦、我々の供給し得るものゝ内の何物かを、必要としてゐる。そして此の考へ方は我々に一つの箴言(モット)を――どんなに苦痛なものとして自己の弱點、缺點、愚鈍、不德、不作法などを意識してゐても――「失望する勿れ」と云ふ箴言を與へるであらう。恐らく主として三文小說あたりからしか、此の題目の研究をしてゐ

ない無智な人達は――時とすると、戀愛は一定の型に嵌つた出來事であつて、十八歲から三十五歲の間に、或る條件の下に、一定の型に嵌めて行はれるものであると、考へてゐる。そして諸君が若しもさうした年齡以外のもので、不幸にも美貌も、又恰好のいゝ鷲形の鼻も持ち合せてゐないやうであるならば、寧ろ初めから希望を棄てた方がいゝと考へてゐる― 彼等は、男と呼ばれる者と、女と呼ばれる者とがある、そしてさうした者の結合が、更らに第三の結婚と云ふ型に嵌つた事柄を作り上げる。そして萬事が終るのであると考へてゐる。

だが或種の神意の取計らひに依つて、實際の事實は、それとは非常に相違してゐるやうに思はれる。――即ち事實、何十萬とも知れぬ異つた種類の男と、何十萬とも知れぬ異つた種類の女とがゐて、勢ひ何億萬とも知れぬ違つた種類の結婚が取り行はれる。又事實優しさ又は淑かさの程度も無限であれば、性格、教養、若しくは病弱や年齡の程度も亦、無限である。そして戀愛は、さうしたものゝ間を遍歷させられてゐるのである。そして實際、肉體若しくは精神上の缺點で、――恐らく(或特殊な人々に取つては)誘引の對象となる事はあつても――障碍となるやうなものは、何一つ存在しない。かくて醜い者や不具の者でも、相手を見出すのに、――休日に海岸に行けば、直ぐに確認出來るやうに――少しの大きな困難も感じない。藪睨みは、哲人デカルトに於けるがやうに、或

人に取つては、確かな誘引となるであらう。又菊石(きくせき)も或人に取つての、必須のものとなつてゐる。[1]更らに私は、女の義足を見て直ぐ樣ロマンスに心を亂した人の實例を、どこかで讀んだことがある。[3]

だがかうした特殊な原因に基くかも知れないやうな極端な場合は別としても、相反する者の間に行はれる補足の原則は、極めて明瞭で、又顯著である。毬毛のある可笑しな小女が、背の高い堂々たる怒彈兵に依つて撰ばれる。背の高い立派な恰好の貴婦人が、椅子の上にでも上らなければ接吻出來さうもない、小男の戀人となる。上流社會の綺麗な貴婦人が、癖りつぼい非常識な教授に思ひを寄せる。讀書餓の學者が(「微賤なジュード」(ジュード・ジ・オブスキュア)に於けるがやうに)單なる賣春婦に、又賢い美人が(「笑ふ男」(ローム・キ・リフト)に於けるがやうに)にや〳〵と笑ふ道化者に心を惹かれる。そして勿論「惡い」男は、いつも聖者のやうな女に救はれる。一方男勝りの鬼のやうな女は、進んで杖で毆られるのを好むやうな男を見出す。又小猫のやうに、たゞ譯けも無く大人しい女は、牛のやうな男を夫に持つ。(そして人は唯「二人共いゝ態だ!」と云ふ事しか出來ない。)……最後にいゝ恰好の鷲形の鼻は、どうしても獅子鼻と結婚しやうと執心する。——そして此れは他の肉體や精神の方面はどうあらうと、そんな事には一切お拘ひなしなのである。

誰しも知る通り、全く若い青年で、本當に年上の、出産年齢を通り越したやうな婦人しか、戀する事の出事ない場合があるものである。そして此れは不思議な事である。と云ふのは、それは戀愛に於ける諸の力をして、生殖や種族の存續から超越せしめ、又それと無關係のものとならしめてゐる。そしてそれがために、ショーペンハウェル式の說明に當て嵌らぬ事を、示してゐるやうに思はれるからである。又同じく若い少女の身で、彼女の父か若しくは祖父としてはよささうだが、どうしてもその夫とは見えない程の、ひどい年寄の男に、熱心に愛情を示す場合のある事も、我々は皆知つてゐる。かうした場合に於ては、恰も苦い者は戀人と親とを——此の二つを一つに合體して——欲し求めるやうに思はれる。そして斯樣な戀の酬ひられる場合は、それは色情的な愛としてよりは、寧ろ一種の保護的な愛として——或は、兎に角保護的な性質と色情的な性質との、密接に結び付いた愛としてゞある。

又此れと同じ樣に、成熟期に達した頃の、若しくは全くの大人の男女が、(熱烈に、獻身的に)まだ成熟期に達しもしない、子供や少女を丈けしか愛しない場合も、無數に存在してゐる。——そして彼等の愛は、その獻身の對象が、先づ二十か二十一才の年頃に達すると、大抵その熱烈さや濃厚さを失つて終ふ。——そしてかうした愛も多くの場合、熱烈に酬ひ返されてゐる。更らに此も亦、

明かに生殖や種族の保存ではなくて、單に補足丈けの――弱年者は年長者の助力と保護とを求め、年長者は、保護本能の捌け口を求める場合であつて――（若し假り初めにも正しく賢明に行はれるならば）よく兩者側に於ける完全な、圓滿な生命の構成に役立つかも知れない、――本質的なものや諸性質の、交換の場合である。

かうした凡ての場合に於て（そして上記の如きは勿論、數千中のほんの僅かな實例に過ぎないが）、その全性質を、戀愛と云ふ作用を通じて――それに關係する個人の生命を完全にするか、又はその後裔者の内に彼等の特質の或ものを結合さすかして――保存しようとする種族の生命の努力が覗はれるやうに思へる。私は「覗はれるやうに思へる」と云ふが、その譯は、此れ丈けでは、よく事實を完全に説明するとも、若しくは戀愛の全意義を説明するとも思へないからである。だが此れは、兎に角、問題の重要な一方面を暗示してゐる。種族の生命の完全な性質は、いつも斯樣な方法で自らを組成し、又自らを保存するのである。更生の過程はいつも行はれてゐる。そして此の過程は前にも述べた通り、生殖のよりは更らに根本的なもので――若しくは單に生殖などは、その一部分に過ぎないところの過程なのである。

更生は戀愛の眞相を開く鍵である。――即ちそれは先づ第一に、誰か他の者の内に、又は誰か他

の者を通して生れ代り、次いで第二には唯、子供を通して生れ代る事なのである。そして原始動物の場合に於けるがやうに、人間の場合に於ても亦、生殖のみがその結合の根本的な目的と、見る事は出來ない。と云ふのは後者の場合に於ては、何億兆とも知れぬ結合の内の莫大な數は、事實子無しであつて、（前にも示した通り）全く必然的に子の無い場合も、可成りの割合に上つてゐるからである。しかもかうした子の無い結合も、子のある結合と少しも變らず密接で、又それに關聯する戀愛も、それと變らず熱烈で、又徹透的であるからである。「若しも女子が自分の意向に應じて、男を自由に撰べるならば」とフロレンス・ファが、その能辯な婦人の經濟的獨立に對する辯護の中で、述べてゐる。「彼女は實際疑ひも無く、自分の一生の伴れ會ひとしてはどんなに不適當なものであつても、子供に取つての適當な父親を撰擇するであらう。」此の女流作家は此の章白の中で、（恐らくシェーペンハウェルに倣つて完全な子供を生むことが戀愛結合の、無意識的ではあるが、一つの主要な目的であつて、個人的な親としての生活は、此の目的のためには本能的に、犧牲に供されるものである事を、暗示してゐる。勿論此れには非常な深い眞理が含まつてゐて、戀愛の强大な力が、屢々世間的な便宜や、戀人自身の適合など殆ど無視したり、又は（又實際原始動物に於けるが如く）親の生命が次ぎの時代の者の生誕のために、殘酷にも又無情にも犧牲に供されたりしてゐる。だが

それにも拘はらず、私は此處に掲げるやうな議論は、事實としても、又學說としても危險であると思ふ。寧ろかう云つた方がより正確で、又危險の程度も少くはなからうか？「若し女子が自由に撰擇していゝやうであるならば、彼女は、たとへ自分の伴れ合ひとしては最上のものでなからうとも、肉體や精神上の、自己の性質を最も完全に補ひ又完成する（そしてそれがために自分に立派な赤子を與へてくれる）男子を撰擇するであらう。」

前にも暗示した通り、既婚者が屢々表面上では必死の喧嘩をしてゐながら、然も互ひに深いところで永久に相手を把握してゐて——夫婦別れをしながらも、やがて又一緒になつてしまふのは——不思議な事である。かうした場合に於ては、彼等は互ひに、恰も爭鬪に依つて、互ひに他に得られない刺戟を得てゐるやうに思はれる。Irae amantium redintegratio amoris（痴話喧嘩は戀の色揚げである。）又結合の本來の目的が、唯次ぎの時代に求めらるべきであるとする考へには、何處となく一種物足りない點が存在してゐる。なぜそれを此の時代に於て求めていけないのであるか？ なぜ人類の幸福がいつも後裔者に讓られなければならないのであるか？ 私は、戀愛の目的は單に種族の保存丈けではなくて、種族の完成、即ち戀愛が明日に於ては勿論、又今日に於てもよく實現し得る、完全な、充分な自己表現であると考へる。エレン・ケイは、その名著「戀愛と結婚」の中で、

此の事を旨く表現してかう云つてゐる。「戀愛は結合を要求するが、それは單に、生命の創造に關係がある許りではなく、相互を通じて兩者が、離れ〳〵に獨りでゐる時よりも、更らに偉大な新しい存在となり得るがためである。」

此の性的誘引の補足的な性質は、かの若き天才オットー・ワイニンゲルに依つて、更らに重んぜられた。彼はその著「性と性格」の中で、性的誘引の法則に關する一項目を設けてゐる。そして本當の獨逸人式な方法で、男女間の相異つた型に對して代數的な公式を作つた許りでなく、又或一定の個人間の誘引力に對しても亦、同じく公式を作つた。——そして後者は、その二個人が互ひに完全に補足的である時には、勿論絶大なものとなるのである！ マグヌス・ヒルシュフェルド博士は、その興味の深い著書「ディ・トランスヴェスティテン」の中で、特に性特質に特別の注意を拂つて、人間の型の相異の題目に關して、ワイニンゲルよりも更らに一層詳細に渡つてゐる。彼の說明によると、性特質は四つの部類に分たれる。そしてその内の二つは生理的のものであつて、即ち一位的特質（性的器官と附隨物）と二位的特質（毛髮、音聲、胸部など）である。そして他の二つは心理的のもの、若しくはそれに關聯した（戀情、心的習慣、衣服などのやうな）ものである。此の四つの部類は、夫々約四つ宛の違つた要素を含んでゐる。故に彼は、全部で人間の内に、十六の要素を表

示してゐる。――そしてその各は、他の十五のものとは獨立に變化して、少くとも三つの形、即ち確然たる男性か、女性か、若しくは中性の形を取る事が出來る。かくして彼は、かうした相異から出來る違つた型の數を計算して、四千三百四萬六千七百二十一と云ふ數に到達した！――此れは確かに、どんな實際的な目的にも向かない程の大きな數である。故に我々は更らに此れ以上、それを分析する必要がないと云つていゝと思ふ！　そして實際かうした想像的な分析や解剖を、幾分我々は嘲笑するかも知れない。だがそれ等は、我々が人間性の持ち得る相異の大きな、驚くべき數を確認する助けをしてゐる。そして更らにかく假想された四千三百萬餘の間に於て、各變種が夫々その相手の型、即ち補足的な個人を得る事を考へるならば、學理的にも可能な完全な結合の莫大な數や、又は種族の生命の完全な立派な表現をなし得る、明確な樣々な方法の莫大な數も、確認する事が出來る。

だが我々は、今少しく抽象的な方面に入り掛けてゐる。でもう一度、實際的な方面に立ち戻らう。確かに補足的な考へ方は、人間の結合を多分に説明するやうに思はれる。なぜなれば、結合する兩者側の性質が、眞に全く相互に補足的であるやうな場合は、極めて罕れではあるにしろ、凡ての人々は明かに、極く僅かの程度にしか自分にない屬性を、相手の内に探し出して、それを讃美する傾

向を持つてゐるからである。此れと同時に、或る共通の性質と共通の下地は、愛情の基礎として必要なものである。そして同じ興味と習慣に對する共鳴と一致も亦、相互の反對なものに對する讃美と同樣に、有力な絆である事を忘れてはならない。全く違つた階級に屬したり、生活上の違つた習慣を持つやうな人々の間には、又は全く違つた種類や色彩の人々の間には、時々無限のロマンスが存在する。そして彼等は一瞬の内に、彼等相互の内に、燃えるやうな理想と不思議な世界とを觀取する。だがかやうな場合の結合は、疑問でもあれば危險でもある。と云ふのは、非常に屢々相互の理解と共通の下地が、非常に制限されてゐるからである。又常に深味に存在して深奥な作用を行ふ遺傳的な本能や影響は、それ等の彷徨者を呼び離し、又彼等の從ふ星からさへも、引き離して終ふからである。

共棲する者の間の氣持の一致や理解は、出來る丈け究極の點に迄、啓發されなければならない。なぜなれば、それは永續的な結合の一條件であるからである。そしてそれは、相手の他の戀愛をおつぴらに理解したり、又は許す事の出來る位に迄、達する事が出來る。(又さうした點に迄達せられねばならぬものである。)要するに、人生に對する深い興味を、二つ若しくはそれ以上に持つ人にあつては、極く罕にしか、さうした凡てのものに共鳴し又理解する、相手を見出せるものでない。此の

場合、彼の個人性の或一部分は、恰も寒さの中に取り残されてゐる。そしてそれが若しも重要な部分でゞもある場合には、彼がその方面の相手や戀人を見出すのは、極めて自然な事である。斯樣な二つの戀は――（一つの方は自然優勢で、他が從屬的なものである事は勿論であるが）屢々完全に一致して、旨く折り合ひの付く場合もある。そして若し此の第二義的な戀愛が、氣持よく我慢され又許容されるやうであるならば、その結果として一般に、第一義的な本來の結合は、更らに一層鞏固なものとなるであらう。

だが此れは決して、一人の男が、例へば二人の男に同時に「戀に陷る」事が出來ると云ふ意味ではない。愛する事と戀に陷ることゝは、非常に相違したものである。そして後者は、一時に一人の人間に向つてしか進んで行く事の出來ない、感情の奔流である事を示してゐる。（澱んだ水は、多くの島々を抱き、取り圍む事が出來る。だがそれは、一時に一つの方向にしか流れる事は出來ない。）だが此の奔流は、いつも永遠に持續するものではない。時節が來ると、それは靜かな湖の樣な狀態に納まつてしまふ。――でなければ、それは實際流れ切つてしまつて、姿を失つてしまふ。

此の流れ切つて喪失して終ふ事を阻止出來るのは、即ち戀愛術の役目なのである。慣れ〳〵しくなる事は、どうしても避け難い必然の事である。故に寧ろかうした戀愛の性質の内に植え付けられ

た、意地の惡い傾向に抗ふのは無益なことであるとは屢々論ぜられるところである。だがかうした說は、極く一小部分の眞理しか含んでゐない。肉體的な戀愛には、或種の肉體的な兩極性が存在してゐて、それが電氣の兩極のやうに、接觸に依つて中和することは事實である。かの原始動物から上は人間に到る迄の、結合の中心的な現象となつてゐる――本質的なものゝ交換は、一定の期間の後の或る一定の場合に於て、完了せられる。そしてその後には、比較的安靜な狀態が到來する。心的な方面に於ける本質的なものゝ交換も亦、之れと同樣である。數年後には、最早や二人の人間は以前程には熱烈に、意見の交換をしなくなつて終ふ。又御互ひに興じ合つたり、爭ふやうなことも無くなつて終ふ。――然かも此れは當然のことなのである。と云ふのは、御互の氣心もすつかり判つて終へば、又恐らくどこかに似通ひ合ふ處まで修正し合つたからである。だが健全な場合にあつては、此れは唯興味の中心が他の部面に移つた迄のこと、即ち戀愛の裁判管理區域が、他の法廷に移動された迄のことである事を、意味するに過ぎない。若しも肉體方面の驀進や奔流に似た方面が幾ら減退したり、又は精神方面の動亂や火花が幾分少くなつたとしても、一方には矢張り、精神上の結合が益々確かになつて行つて、遂には天體をも寫す程の湖水のやうな靜さが得られると云ふ意味に於て、更らに偉大なものが、此の際獲得されるのである。然も尙かうした凡ての、ずつと奥底

の處でゝは二人の個性間には、微かな流れと交流れとが行はれて、遙か大自然の奥所に於ける、深い目に見えない或種の活動と氣脈を一にしてゐることが、意識されるのである。

勿論此の種の戀愛の持續性と永久性とが得られるためには、情緒と肉體との兩方面に於ける、或程度迄の節制が必要である。此の兩方面孰れかの過饒から生ずる、或種の嘔き氣に類した氣持は、絶對に避けらるべきものである。新しい興味の中心や接觸點が、探し出されなければならない。一時互ひに離れてゐる事も、回避されるべきものではなくて、寧ろ奬勵されていゝものである。又前にも少しく述べたやうな、夫婦喧嘩の種とならない程度の、輕い戀人を他に持つことも、亦同樣である。實際かうした關係を、何の氣兼もなしに、自分の夫や妻に打ち明けられる氣持程、對手の氣持を、一層自分に惹き附けるに預つて力あるものはなからう。又夫婦たるものが、斯樣な程度に迄自分達の關係を信頼し得て、(舊弊な人間は恐らく、度膽を拔かれるかも知れぬが) 初めて持久的な鞏固な結合を作るに至つたと、云はるべきである。

斯樣に相手の心の核心を捉んでゐ乍ら、然も尙完全な自由を許し合ふと云ふ義俠的な思遣り程、有力な者は、他に戀愛に持續的な價値を與へるものゝ内には存在しない。エレン・ケイは——もう一度彼女の「戀愛と結婚」の中から引用すると——かう云つてゐる。「(戀愛に於ける) 誠實は、約

束しようとして、事實決して約束し得るものではない。それは日毎に新しく獲得し直さるべきものである。」そしてかう續けてゐる。「かうした眞理——昔の戀愛法事二廳(コート・オヴ・ラヴ)と稱へた、義俠的な氣持なる者に取つて、至極明瞭な眞理であつたが——今日に於ても尙主張されねばならぬとは、實に悲むべき事と云ふの外はない。此の法事廳は戀愛と結婚の兩立し難い一理由として、かう述べてゐる。『妻が戀人同志が示し合ふ程の深い思遣りを、その夫から期待することは出來ない。と云ふのは、その受取るものは、夫に於ては權利であるが、妻に於ては、一個の恩惠に過ぎぬからである。』何年もの間、かうしたロマンスの後光に包まれた戀愛を續けたり、又は自由の日に新たなる贈物とも云ふべき、かうした優しい獻身的な氣持を持ち續ける事は、實に立派な藝術である。然も立派な難しい藝術であつて、又確かにその「勞に値する」藝術である。

大體戀の熱情なるものは、どう見ても不可思議極るものと、云ふの外はない。そして前にも述べた通り、言葉が少ければ少い程、それは純良なのである！ たとへ人々が(騷々しく)やつて來て諸君に戀を打ち明けやうとも、餘り大した注意を、それに對して、拂はない方がいゝ。——と私は云ひ度い。彼等の捧げるものゝ純粹であるや否やは——恐らく彼自身にすら、分つてゐないのである。又諸君は、與へやうとする力も——又は與へないで差し控えやうとする力も——ないものを、

捧げようとして、此れと同じ間違に陷つてはならない。最後の勝利を得る者は唯、沈默と時間とである。彼等は共に神々の膝の上にひれ伏してゐる。そこは――誰かも云つた通り――「冷たい居心地の惡い」處のやうに思はれるが――恐らく彼等には、一番適した場所なのである。

註 1「性的行爲に羞恥心が伴つて、遂に暗黑内の行爲となつたのは、明かに次の事實に基く事が多い。即ち文明人間に於て、その行爲の行はれる重な時間が、その日の仕事の勞れが不消化な食物や酒精飲料のやうなものゝ技巧的な刺戟と戰つてゐる、暗黑な夜の初め頃で、然かも息苦しい部屋の中に於てゞある。又此の習慣は、幾分婦人側によく現れる性行爲に對する無關心乃至憎惡に基いてゐる。」(H. Ellis, Studies in the Psychology Sex, vol. VI. P. 558).

2 H. Ellis, vol. V. PP. 11 and 12. 參照。

3 Krafft-Ebing, Psychopathia Sexualis, 7th ed, P. 165. 參照。

4 Liebe und Ehe, Fucher, Berlin, P. 192.

5 English Edition; Heineman, 1906.

6 Die Transvestiten, Berlin, 1910, P. 290.

第五章　死亡術

我々はいつか、戀愛や戀愛上の諸問題を取扱ふ、賢明な方法を發見するであらう。そして今迄人間界の不幸や失意の因をなしてゐた戀愛をして、遂には我々に有用な、爲めになる優しい神性のものに變ぜしめる事が出來るだらうとは、既に前章で、少しく述べたところのものであつた。大自然の諸の力――地上の火や洪水や、天上の風や雷電など――に對する我々の經驗も亦、略此れと類似したものであつた。然かも賢明に取扱つた結果、それ等は皆等しく、人間の有力な助力者とも、協力者ともなるに至つたのである。かうした結論は、又死と稱する偉大な自然界の現象とその過程とに關しても、當然當て嵌めることが出來よう。我々は今や、肉體的にも、精神的にも、共に現在の生命から離脱すると云ふ、此の人生の一大事實に、本當に當面しなければならない時機に際會してゐる。即ち此の事實を研究理解して、その變化の支配者となり、――以つて死をして我々に、非常に有益な便利なものたらしめなければならない――時機に際會してゐるのである。

今迄は不思議に――直ぐ此れを指摘出來る機會が來るだらうが――此の種の科學に關する臨床學的な、生理學的な、乃至は心理學的な見地からなる研究は、至つて僅少であつた。例へば（此の章の題目である）死亡術のやうなものは、殆んど捨てゝ顧られない狀態にあつたのである。

勿論此れは困難な――研究するにも困難であれば、實行するには尙更困難な――術である。だが畢竟此れは、一層我々をしてそれに近からしめる理由となるに過ぎない。死を避ける術は、人々の注意の焦點となつてゐる。そして何千何百とも知れぬ位の、それに關する著作が出てゐる。だが何人もそれを實際に避ける事も出來なければ、又早晩それを經驗しなければならないものである以上、さうした最後を愼重な落着いた態度で迎へる方法も亦、人の注意を喚起すべき充分の魅力を持つてゐる筈である。

人々は當然――我々を待ち受けてゐる、かの廣大無邊の死の海の事を考へると――船乘に水泳の稽古があるやうに、又希望者には自由に無代で敎へられる、此の種の航海に必要な色々な敎訓も亦少し位はあつても、よさゝうに考へるであらう。だが人間の生命は一つしかない以上、それに必要な練習をすることは、全く不可能な事に屬する。だがそれに近いものを、忍耐の結果、修得出來ない事はなからう。世の中には、一旦死にながら、再び數分間か數時間後に、息を吹き返したやうな

記錄は、いくらも存在してゐる。私の知つてゐる一人の旣婚の婦人は、數年前のこと、永患らひの果てに、とう〳〵醫者から見離されて終つた。そして次第に衰弱して行つて、どう見ても死んだとしか見えない狀態に達した。醫者は死の宣言をした。そして親族達は、葬式の準備を始めた。だが自分の子供が氣掛りで、どうかしても子供の危險期の間丈けでも、面倒を見てやり度いと云ふ一念から、自分はどうしても死ぬまいと決心した。そして意志の弱い女であつたから、その決心を死守したのであつた。二三時間は經過した。すると彼女の友人達の驚きと喜びとの中に、彼女は「あの世」から戻つて來た。――それから彼女は、充分自分の家族の者の面倒が見られる位長い間、生き永らへてゐた。此の場合、彼女には彼岸の狀況を傳へるに足る丈けの、明瞭な經驗を得る事は出來なかつた。だが、肉體や精神の上層の眠り、若しくは明瞭な死の中を通しても、彼女の「生きんとする意志」が確持されたと云ふ事實程、彼女に死の深味に於ける或程の復活の確信を持たしめ、又死の到來に際しては、凡らゆる恐怖と躊躇とを、一掃するに充分力あるものはなかつた。

恐らく日常普通の心の方面に於ては、死は非常に睡眠に酷似したものであるかも知れない。又死が實際に到來した場合にも、恐らくそれは殆ど、感知される事はなからうとも、考へられるのである。だが心の深い方面に於ては、屢々或一種の、偉大な覺醒の徵候が現れる。法悅の表情が屢々、

顔一面に現れたり、又時とすると、既に死んだ友人を、突然はつきりと認めたりすることもある。又多くの場合、記憶や認識が非常に擴大するやうに思はれる。そして屢々、飛行したり上昇したりするやうな、明瞭な感覺を持つことさへもある。だがかうした事實は、一切後に亘つて論ずる事としよう。そして此處では唯、主として、肉體の方面丈けを、更らに深く觀察することに止めて置かう。だが今少しく述べた事丈けでゝも——死に附隨する——病氣の若痛や友人との別れや、又は將來の計畫の破壞と放棄と云つた風の——どんな障害があらうとも——死そのものゝ經驗は、必ず非常に興味の深いものに違ひないと、考へざるを得ない。旅出とはよく云はれる事であるが、現世の航海と比べて、それは又どんなに長い、不思議な通景と、幻影と、又は呼び交ふ聲々とを持つた航海であらう？　又それは誰しも通らなければならぬ經驗であつて、事實無數の人々がそれを通過し又現在に於ても不斷に通過しつゝあると云ふ事丈けでゝも、死は我々に深い魅力を持つてゐる。そして假りに、自分丈けは死なずともいゝやうな事情になつても、矢張り自分は、寧ろ進んで死を撰ぶだらうとさへも考へられるのである。

前にも述べた通り、何人にも分り易い、死に關する教訓や手引きが、殆ど存在してゐないのは、全く不思議極まる事と云ふの外はない。醫者達は一體、何をしてゐるのであるか？　出產や分娩に

關する學術的な本は澤山にあるし、分娩を平易にする方法も、亦充分考究されてゐる。だが出生と丁度對座して、又それとは補足的な地位にある、此の死と云ふ事實に關しては、殆ど沈默と周章との以外には、何物も存在しないではないか。

一般に、死と云ふ大事件に具へる方法は、(附隨的な出來事は別として) 大略次ぎのやうになるであらう。——肉體的にも健全でなければ、又道德的にも欠ける處のある生命は、必然的に衰微的な傾向を取つて、遂には病氣に陷つて終ふ。それから少し宛衰弱が重つて來て、初めて驚愕の餘り醫者を迎へるやうになる。それから少しは健康が回復する。だが元通りにひつくり返つて、一向捗しく快くならない。それから更らにひどい衰弱がやつて來て、狼狽が一層甚しくなる。そして遂には數時間でも壽命を延ばさうと云ふ一念から、劇藥や注射や手術のやうな、色々の手段が講ぜられる。遂には死が到來するが、それは皆の人には優しい者としてゞなく、何だか打ち負かされたやうな、陰氣な氣持を起さすものとしてやつて來る。患者自身に取つても亦、それは愼重な態度も威嚴も凡て無くした、遽しい苦しい最後としてやつて來るのである。

此れはどうしても、いゝ事だとは云へない——　あの動物の——全體として非常に落着きのある——死——あの靜けさ、落着き、威嚴、それから一般に云つて極く顯著な、激しい苦痛の缺除などを

――考へ合すと、又は此れと酷似した、野蕃人の狀態を考へ合すと、我々は全く、かうした相違の理由の、何たるかに迷はざるを得ない。「凡らゆる時代の盟主」たる人間が、斯樣な意氣地の無い馬鹿げた態をするなどゝは、平常には、避け難い死などは眼中にないやうな生活をして居乍ら、然も一度それが到來すると、それの來るのが分つてゐて、又充分その準備の時間もあつたにも拘はらず遽かにひどい、無益な周章て方をするなどゝは――全く以ての外だと云ふの外はない。死はどう見ても――生物の一種の解體のやうにしか思へない。それは一種組織立つたものを、無茶苦茶に解きほぐし、寸斷して終ふやうなものである。かうした紛亂的な解體は、或場合に於ては、健全な常態のものもあらうし、又場合に依つては、不健全な、病氣に由來するものもあらう。此の最初の場合に於て、死は、一種の古ぼけた殼を脱ぎ棄てるやうなものであるかも知れない。そしてその殼が、即ち後とに脱ぎ棄てられるのである。――それは丁度、蚊やその他の昆虫の蛹の殼が、脱ぎ棄てられるやうなものでもあれば、又芽や球莖の外皮が、次第に成長するに伴れて、剝がれて行くのにも似てゐる。そして大抵の老人は、皆かうした死に方をするやうである。――その肉體には少しの動搖も苦悶も現れずに、極く平靜に、恰も木の葉が萎むがやうにして、死んで行く。そしてそれと同時に、屢々その人の靈的な性質が不思議にも非常に明快に、又明敏になつて行く事が多い。此處に

は勿論、或種の解體は存在してゐる。だが苦悶に充ちた寸斷は見られない。生命の中心は此の場合更らに一段と奥の微妙な領域に入つて行つて、以前よりは更らに一層明るい焔を、そこで守り育てるやうに思はれる。そして外部の肉體は、一切一種の脱け殼のやうにして、脱ぎ棄てられて終ふ。だが第一の場合にあつては、事情甚しく此れと相違してゐる。此處では、生命の結合が旨く保れてその中心が徐々に内奥に退いて行くと云ふやうな事はなしに、反抗的な不從順な多くの中心が現出する。そして激しい鬪爭を、その内部に於て惹き起すのである。此れが即ち、病氣乃至は病氣の中心であつて――肉體の方面でゝは、腫物とか、寄生虫とか、黴菌の侵蝕の類ゐのもので、精神の方面でゝは、激情とか、貪慾とか、不安とか、恐怖とか、又は嚴格な習慣と云つた風のものである。そしてかうした者は夫々獨立の中心を拵へて、肉體を自己のものにしようとして、激しい引裂き合ひを始める。そして遂にその結果、死の到來の道を開くに至るのである。――然かも此の種の死は決して内部の人間が、自ら進んで精氣的な領域に退場する爲めに起るのではなくて、單にさうした人間の働く場所としての、生命體が破壞されるがために起るのである。

（かうした内的な人間や、他の生存の領域内への、その種の人間の移入などに就ては、定めし色々な說もあるであらうが、兎に角）前者のやうな死に方は、確かに普通な、望ましいものであつて、

又奬勵もさるれば修養もさるべきものである。だが翻つて、後者のやうな死に方は、明かに苦しい、且つ嫌惡すべきものである。

斯樣な見地から云へば、肉體内の構成的な調整的な力を强くして部分的なものゝ發生や擾亂を押へることは、(概して)最もいゝ手段――長生きをしたり、又は死をして極く樂な、取り附き易いものならしめる、最良の方法――であるやうに思へる。遠くに離れ〳〵になつてゐる――肉體や精神上の色んな器官や能力のやうな――部分的な中心をして、生存中は絶えず、首腦の地位にある中心に對して、隷屬的の地位に立たしめなければならない。又出來る丈け、怠慢に過ぎる事も無く、又は過激な亂暴過ぎる者でもない、極く正當な役目を盡すものと、ならしめなければならない。斯樣にして初めて、生命の力が衰へ初めるに對しても、尙さうした色々な器官や能力は、依然として首腦たる中心に隷屬してゐて、又比較的平靜も失はずに、その中心をなす者に對して、今後の通過路と發展との餘裕を與へるのである。實際世の中には、内部の精神や意識が、その儘何の變化も受けずに通り越して、肉體的の色んな寄せ集め者丈けが、着古した着物か、又は前にも述べた脱け殼か何かのやうにして、脱ぎ棄てられて行くやうな死に方も、間々存在するものである。

とは云ふものゝ、構成的な調整的な力を强くする事は、決して嚴格な、半ば壓制にも失するやうな習慣や規則（たとへどんなに良いものであつても）を作れと云ふ意味ではない。内的の人間――後に說明するが――は、如何に良い習慣や規則があらうとも、決して左樣なものに依つて代表される位、微力な自由の無いものではない。さうした規則や習慣は、寧ろ低い程度の心や肉體に適用さるべきものである。然かもかうした者の增長する時には、無節制な煽情的な傾向に劣るとも勝らない、生氣を枯渴して無氣力に導く惡傾向を生み出すのである。

斯樣な反對の失敗にも陷らずに、常に大自然や人間の生命の根元と接觸を保つて、確乎とした賢明な生き方をする事は、決して容易な事ではない。又今日のやうな文明の狀態に於ては、尙更らの事である。だが左樣な努力は――生命やその生命の結末に取つて――決して無益な事ではない。又中年の間よく自己の生命を常態に持續さす事は、恐らくその終末に際しても、又よくその常態を保たしめ得る、最上の方法であらう。だが普通に行はれる醫術――藥品、興奮劑、睡眠劑、手術、又はモルヒネや血精の注射のやうなもの――は、いつも此れとは反對の傾向を持つてゐる。さうした者は、確かに中心的なものゝ働きを弱めたり、擾亂したりする傾向を持つてゐる。又同時に、局部的な諸の中心を刺戟したり、狂亂せしめたりして――遂には患者をして、屢々惑亂した無意識な、無茶苦茶な、一個の亂雜と腐敗の固まりとしての、死に方をせしめるのである。大海に向つて船を進

水せしめるやうな場合には、その建造中に於てすら、既にその準備に忙殺されるべき筈である。私は醫者を商賣とする者ではない。だが誰が、醫學的乃至生理學的な見地から、かうした――如何にしても死の準備をなすべきか？　……如何にして或程度の滿足と自重と理智とを具へて、此の大變化に處すべきであるか？　と云ふやうな――題目に就て、論文を書く者があらう？　就中、醫者や看護婦や親族の人々などの普通に採る、患者の壽命を數時間でも（若しくはせいぐ〜數日間でも）永引かしたい一念からの、あの無益な手段を、凡て一掃して終ふ事は出來ないものであらうか？　さうした手術や注射や、その他凡らゆる種類の醫術的な侮辱のために、最後迄（無抵抗な儘に）――出來る丈け、又恐らくは十中の八九迄本人の希望する、その通りに、安靜に放任される事も無しに――惱まし通されなければならぬとは、何と云ふ不幸な事であらう。此れは今や明白な間違となつて來た。どんなに素人考への、無智な親族達の願ひが激しくとも、その最後に際して、醫者の手に掛らねばならぬと云ふ事程、更らに一層本人の急怖心を强めるものはなからう。兎に角病氣の苦痛がどんなにひどくとも、普通は死に先立つて、さうしたものは凡て無くなつて終ふ事程、我々の心を慰めるものはない。世間一般には、「死の苦悶」とか、「最後のあがき」とか云ふ言葉が、行はれてゐるが、事實死の瞬間そのものは、極めて平和なものである。かの亞米利加南北戰爭の折、野戰

病院の任務に服して、親しく無數の臨終に接した、ウォルト・ホイットマンは、多くの場合、死は極めて簡單に、恰も日常茶飯事のやうにして、「朝飯を攝るのと全く同じやうにして」やつて來るものであると、書き記してゐる。「死は出產と同じやうに、苦しいものではない。」とエドワード・クラーク博士は、その著「幻影――幻視の研究」の中で云つてゐる。そして大抵の醫者も亦、此れと大體同じ意見を持つてゐるのである。

實際死には、一種尊敬に値ひする神聖さが存在してゐる。又大抵の場合、將さに來らんとする事柄や、又はそれに對して必要な事柄の明確な本能が、患者自身の內にも自然に現れるものであると云ふ事も出來る。それが故に、友人の嘆きや附添の者の干涉などからは出來る丈け遠ざかつて、旨く獨りで死の通路を通り越せるやうな、平靜な期間が患者に與へられるやうの、凡らゆる手段が盡さるべきであらう。

心理的方面

我々は此れからもう少しく、心理的な方面から、死と云ふ題目に就て考察して見よう。と云ふの

は決して此の問題が生理的心理的との兩方面に完全に分離さす事が出來ると云ふ爲めではない。實は前の部分で、少しく生理的方面に偏し過ぎたがために、此處では寧ろ、心理的の方面を多く取り扱ふ方が便利であらうと云ふ、理由からに過ぎないのである。

そして此の方面には一つの有利な點が存在してゐる――と云ふのは、我々は初めて此の方面で、充分死亡術を實際に行ふことが出來るからである。此の方面で初めて我々は、自分から勉めて死に近づいたり、又は實際に死の門を通過したりする事が出來る。大抵の人々は皆、(睡眠は別として)日常の意識を失ふなどゝは、全く一種の非常に恐ろしい事であるかのやうに考へてゐる。此の恐怖心を取除く爲めには、毎日自ら進んで死の門を通過する――即ち日常の意識から離れて、心の方面で時々死んで見る――に越した事はなからう。そして我々はその方面で、いつか遂には自然と、それに慣れて終ふのである。

科學の敎へる無味乾燥な事實、例へば火が燃えるとか、水が凍るとか、又は地球が地軸を中心に廻轉すると云ふやうな事實の内で、雜念を抑制して、(ぢつと堪え忍ぶ時は)自然に日常の思考を越した向ふの、又その性質や特色も全然日常の思考と類を異にした、或種の意識の領域に到達すると云ふ事實程、確實な、又根本的なものはないであらう。――そして此の意識は、半ば普遍的な意識

であつて、又我々の日常の自我よりは、遙かに比較にならぬ位の廣大な自我に對する實感なのである。又日常生活の平常の意識は、全く小さな部分的な自我の上に築かれてゐて、事實小さな部分的な意味に於ての自意識である以上、さうしたものからの離脱は、又當然我々日常の自我や世界からの死脱を意味する筈である。

此れは普通の意味でゝは、死を意味してゐる。だが別な意味に於ては、それは眠りから覺醒して「自己」即ち自分に取つての本當の又最も親しい自我は、凡ての宇宙の森羅萬象に行き渡つてゐる事を――山や海や星辰などは、皆自分の肉體の一部分であつて、又自分の魂は、一切の生物の魂と接觸を保つてゐる事を――發見する事なのである。然り、以前よりも更らにさうした者の魂との一層近い接觸を發見する事である！　又それは、永遠不滅の生命と廣大無邊の歡びとに對する確信を得る事であつて――「安息と喜びの井戸の水を飲み、樂園の神々と共に席を同じうする事である。」

此の經驗は實に偉大な、又言葉に絶した莊大なものである。故にそれに一度び當面すると、凡ての些々たる疑問や疑惑は、忽ちの内に一掃されて終ふと云つても、敢て過言ではない。又此の種の經驗が、唯の一度でも獲得されると、その結果として、勢ひその人の以後の生活や人生觀が、凡て一變してしまふやうな事實が無數に存在してゐる。

前記の雜念の抑制は、どう實行していゝか、又それに附隨する結果や內容は果してどんなものであるかと云ふ問題は、此處に論ずるには少しく場外れの感がないでもない。[5] で此處では唯、さうした抑制や、それに伴ふ意識の變化が、完全に實現された曉には――それがほんの一度であつても――日常の心的な自我は、それと同時に、その惱みや心配や、又は制限や不完全な事などと共に、凡て完全に一掃されて終ふ。そして（その間）一種の死物となつてしまふ事を、云へば充分であらう。そして事實その一方では、かの本當の人間は、今一つの別な世界の中に移入するのである。

斯る經驗を、幾らか完全な程度に獲得したことは、直ちに、死の門を通過して、既にその實狀を知るに至つた事を意味する。と云ふのは、譬へ肉體的な感覺や能力を如何に破壞しやうとも、それは決して內奧の自我には、何等の影響も與へない事を知るに至るからである。即ち自己の眞の自我は、同時に他の生物の生命の中にも滲透すれば、又他の人々の肉體の中にも行き渡つてゐる事が認識出來れば、自己の肉體がたとへ後とに殘らうと殘るまいと、さうした事はも早や、何等の問題ともならなくなるからである。肉體の殘る殘らぬは、決して同じ事ではない。だがそれは、必ずしも嚴然とした重大な問題ではない。諸君の入ることを許された廣大無邊の大海は、たとへその岸邊から、一個の眞球貝を取り去つたとしても、何等大した影響は、無からうではないか。

此の點に關しては、私は一度ならず原始動物に關する事實を引用した。そして原始動物は、その個々の細胞や生命全體が如何に分裂しても、矢張りその生命は持續されると云ふ理由から、不死と考へられてゐると云ふ事を述べた。又その不死である理由としては、次ぎのやうな事實もある。即ちたとへ後裔者の細胞の或者が死滅しても、その生命は繼續されて行く――そして數百代の後に於ても、個々の自我は矢張り、元の一番最初の者とは、全然の同一物なのである。そして我々が今論じてゐる死の場合にも、矢張り此れと類似の點が存在してゐる。と云ふのは、一度び魂の共通的な生命が認識經驗されると、最早や何物もその生命を破壞する事が出來ないからである。死は唯、一つの形から他の形のものに移ることに過ぎない。そして原始動物が死以前の處で、即ち死がまだ地上に現れない頃に於て、既に一種の不滅性を獲得したと同じやうにして、解放された魂は、又、を乘り越した向ふの處で――事實それを唯途上の一些事として乘越して――不滅性を獲得するのである。

かうした偉大なる不滅の自我の核心、即ち內的な力强い永續的な生命に對する意識は――たとへ如何に深く埋沒してゐようとも――常に各人の裡に存在してゐる。そして唯それを本當に忍耐强く

探求する者にのみ、その發見の自由が任されてゐるのである。私はかうした經驗――安息や滿足や擴大や力の感や全知と絶大の感すら伴つた――は、嘗つて今迄にない、人知と科學的研究との結果になる、根本的な重大なる發見であると考へる。又それは事實、無數の人々に依つて、例證されつゝあるのである。勿論前にも云つた通り、永續的な生命の正確な性質や、所謂感知にも絶した細微な自我や、又はかうした者の部分的な個人的な意識との關係などの――乃至は一定の個人性や記憶などは、どの程度迄、かうした者に附隨して行くかと云ふやうな――問題が殘つてゐる。此れは後に論ずることゝして、此處では唯、經驗上の問題丈けに止めて置かう。

死の接近や、又は將さに襲ひ來らんとする死の到來に際しても、尙想起したり立ち戻つたり、又はそれに向つて一心に縋り付く事の出來るものが存在してゐる。そして我々が一生涯の間にそれを體驗する事の多ければ多い丈け、尙更ら一層容易く、終焉に際しても亦それを、確持する事が出來るのである。肉體的な死が、如何なるものを――苦痛や失望や、能力の分散と云つた方面で――持ち來さうとも、尙其處には確固たる一事實、即ち我々の性質中の最も深い、最も普遍的な部分のもの〻復活に對する確信が、現存してゐる。又此の種の最深の意識は――凡らゆる病氣や衰弱のやうな障碍にも拘はらず――死が何等の破滅の因ともならない位、非常に明確な場合も存在する。斯樣

な場合には、肉體は幾分外皮が脫け殼のやうにして、(恐らく努力とあがきとは伴ふが、苦悶や絶望の類ゐは全然なしに) 脫ぎ捨てられて終ふ。そして生前少しく入つた事のある、かの神聖な生命を新しい別種な形に於て實現するために、死を通過するのである。私はかうした處に、我々の努力の究極の目的がなければならぬと思ふ。かうした狀態こそ、死の到來に際してもよく、生命持續の確信を與へ、又失敗や散逸などの、何等の不安も感ぜしめない、唯一の條件であるやうに思はれる。又此れは、我々日常の不撓の努力が、皆此の種の不滅のものに對する實感と、その把握とに向つて捧げられねばならぬ事を、暗示してゐる。又寬大な行爲とか犧牲的な熱誠とか、偉大な熱烈な戀愛とか、又は日常の外皮の下に、確乎として事物の核心を捉へんとする努力心などは、皆かうした狀態の獲得を容易ならしめ、同時に人類大多數の者のために、その勝利の日の到來を促進するに力あるものである事をも、暗示してゐる。かくして死の門の通過とそれへの移入は、少しの障害も無い、極めて自然なものとなつて、相當な時機に於ては、寧ろ歡迎さるべきものとさへ、なるのである。

然し乍ら、生前かうした意識を時折り獲得した人でも、病氣か衰弱か、又は心神の消耗などのために、此の種の深奥な意識が、ぐらつくやうな場合がないでもない。又生產に於ける、此種の實感

が皆無の場合か、又はあつたところで左程取り立てゝ云ふ程でも無い、極く僅かな場合も、無數に存在してゐる。此れに對して我々は、一體何と云ふべきであるか？　たとへ信仰の深い人や哲學的な傍觀者には、不滅な火花が見えたとしても、それを認めることも感ずることも出來ない本人に取つては、果してそれは、何の慰安とも力添えともなるであらうか？　然かも我々は、果して此の種の難問に對して、何かの解答を期待していゝものであらうか？

かゝる問題の解答を得ようとしたり、又はかゝる種類の大多數の人々の――死と云ふ瓦解が到來した――場合の事相をば、適確に捉へやうとするためには、我々は先づ何よりも、人間の性質を大略、分折して見る必要がある。それに依つて我々は、その性質各要素の本體や、又はその各要素の行き着場所を、知る事が出來よう。此の目的の爲めに、我々は人間の性質を分つて、大略次ぎの四つにする事が出來る。――だがかゝる場合の分類は、普通極めて概略的のものであつて、又ほんの試驗的のものに過ぎない。即ち、(一)既に述べた永遠的な不滅の自我、(二)內的な個人的な自我、即ち人間的精神、(三)外的な個性、即ち動物的な自我、及び(四)肉體が即ち、それである。此の內(一)の永遠的な自我と云ふのは、全人間的生命の萠芽、即ちその根元をなすものである。又私は、寧ろ人間諸性質の凡らゆる部類や各要素は、(勿論大抵の場合、自己の從屬する眞の根元を意識して

ゐないが)皆事實、かうしたものからの表出物であると云つて、差支へないと思ふ。それから(二)の內的な、個人的な自我、即ち人間的精神と云ふのは、人間の「性格」の極く微細微妙な要素を包含するものであつて――友人などに於て平常熟知のものであるが、記述するには甚だ困難なものである。だが大略して、それは愛情、勇氣、機智、同情、好美の念、平等感、自由、自恃、又は決心と云ふ風の言葉で、現さす事が出來よう。此れに反して(三)の外的な個人性、即ち動物的な精神は(全然輕蔑されるべきものではないが)高慢、野心、所有慾、又は嫉妬と云ふやうな、より部分的な慾望や熱情と關聯してゐて、又直接肉體と關係のある、飲食物や性や休息や、又は睡眠などに對する慾望とも、關聯してゐる。(四)の肉體は、凡ての物質的な器官や部分的なものを包含してゐる。更らに此れ以上の中間的な分類は、敢て不可能なことではない。又實際さうした分類が作られてゐる場合もない譯ではない。だが、現在の場合では、かうしたもの丈けで、充分用が足りるのである――だが此れは、甚だ不完全な價値しか持たない事を忘れてはならない。全體かうした事に明確な廓線を施したり、又は區分を附けようとするのが、間違つてゐる。又事實人間の諸性質は、決して區劃的なものではなくて、連續的なものである事を忘れてはならない。又かうした四つのものに分離はしたものゝ、その各要素は、決して不斷に意識上に現れてゐるものではない。寧ろ大抵の場合

無意識的な、隠れた、知覚し難い處に伏在してゐる事を記憶しなければならぬ。

註 1 Carrington and Meader; Death: Its cause and Phenomena, (1911) 中の "Vision of Dying" の章及び本書第六章參照。

2 H. Pieron, "Contribution à la Psychologie des Mourants" in "Revue Philosophique" Dec. 1902. 參照。

3 Civilization: Its Cause and Cure. P. 11—21. 參照。

4 Carrington and Meader; Death: Its Cause and Phenomena, P. 300. 參照。

5 Upanishads ("Sacred books of the East," vols. I. and VX); Bhagavat Gita; R. M. Buche's Cosmic Consciousness; Raja Yoga Lectures, by Vivekananda; Ancient Wisdom by Annie Besant; The Art of Creation; A visit to a Guani, by E. Carpenter. 及び其他多くの書參照。

第六章　死の通路

前記のやうに、人間の性質をば大略四つの部分に分類すると、その内の二つのものゝ死に際する運命は、極めて明瞭である。即ち(一)の中心的な自我は(「我々」自身がそれを意識すると否とに拘はらず)常に永劫に且つ不變に、殘留して、絶えず光榮に輝き乍ら、世界を照すことは明かである。それは來るべき無數の生命の出產の源として永存し、又永存するであらう。此れに反して、(四)の實際的の、目にも見、又觸知する事も出來る肉體は、死滅し且つ解體して終ふ。勿論それは要素の形を取り乍ら、大自然を通つて、かの偉大なる出產の源に復歸するかも知れない。だが個人的な肉體としての生存は無くなり、又傍觀者の目の前で、その形を一變して終ふ。かうした全人間の二つの區分のものゝ運命に就ては、少しの疑問の餘地も存在しない。——即ち内的な中心的な部分は、よし有るとしても甚だ緩漫な不斷の變化を行ひ乍ら、永續して行く。一方外的な物質的な外殼は、直ぐ樣腐敗して、解體して終ふ。

然らば殘りの二つの部分、即ち人間的な部分と動物的な部分との運命は、果してどうなるであらうか？　此等の部分は、共にその屬する兩極端のものゝ運命を、夫々或程度迄享受すると見て、差支へない。即ち(三)の外的な個人性、即ち動物的な生命は、肉體に關係する處が最も多い。その慾望や熱情は、(それ自身として心理的には、獨立してゐるが)常に肉體の上に、その滿足と表現を、求めようとしてゐる。此等のものが、肉體なしに働き得るとは、どうしても考へ得られぬ事柄である。例へば口や食道のやうな、活動の場所を持たない飲酒慾(勿論夢の中でゝは、かうした通路は自然に現出して、即ち心的な幻像が作り出されて、その活動が行はれるとしても)の存在は、我々には、どうしても想像することが出來ない。虛榮心や性慾の場合に於ても、亦此れと同樣である。即ちそれ等も亦、或程度迄の肉體の借用が必要なのである。

故に、肉體を土臺に活動して、且その肉體内の各々の器管や部分に相當する、かうした心理的な各要素は――即ち熱情や慾望は、皆その肉體全體のものと共に――或程度迄の破滅を免れ得ないのは、容易く首肯し得られる事柄である。それ等のものは（大低の場合）、決つて恐しい苦痛と混惑とに襲來される。恐る可き不安と困惑とが、それ等のものに向つて殺到して來る。そして肉體が破滅分散するに伴れて、さうした要素も亦、分散の苦悶を味へば又それ自身の解體と死滅とをも、見豫す

るのである。[1]

だが、單にかうした事實だけで、斯く簡單に、此等の要素が消滅すると決論するのは、そは間違でなからうかと考へられる。と云ふのは、斯樣な慾情や動物的な精神は、たとへ肉體に賴つて自己の働きを現はしてはゐるものゝ、それは全く肉體とは別種のものであるからである。それ等は皆自身に、それ自からの創造力を具へてゐる。[2] 例へば前にも述べた通り、飲酒家が、一度び酒を斷ちでもすると、彼はその飲酒の行爲を、猛烈に自己の空想内で演ずるやうになつて來る。彼は一碼も長い食道と、そこに無限に流れ込む酒のことを夢みる――さうしてさうしてゐる間は少しも平生と變らずに矢張りその口や食道を動かすのである。虛榮の强い人や性慾的な人なども、此れと同じ樣に、又その肉體に變形や修正を與へて、その必要とする形の形成を助けてゐる。そして長年に亘つて、かうした種類の作用が經續された結果、今日のやうな、動物や人間の形態や、又はその身體の各部分や器管などが、造り出されたのである。[3] 即ちさうしたものは皆、その下に潛在する心理的なものや、慾情や、又は諸の性質などの外に現はれて具體化したものに過ぎない。――そしてかゝる心理的なものそれ自身は、元來深く宇宙的な精神の中に藏されてゐて、その中から外に現はれ、且つ成長して行つたものではあるが、矢張り此の宇宙的な精神とは、隱密の間に繫り合つてゐるのである。

故に肉體の死後に於ける動物的な生命や、又はそれに附隨する諸々の慾情の運命は、果して如何？　と云ふ問題の合理的な明瞭な解答は、恐らくかうなるであらう。普通の狀態に於ては――外に現はれなくなると云ふ意味で――それ等も亦死滅してしまふ。それ等は矢張り、肉體と同樣に死滅する。だが、それには次ぎのやうな相違がある。即ちそれ等は皆心理的であつて――皆意識と、その下に潜在する自我とを持つてゐる。――故に、たとへ肉體が死滅して、地中や空中に戻るとしても、それ等は皆その發源地たる心理的の根元に――その具現する大我、即ち宇宙的精神に――戻つて行く。此れを譬へば、動物の場合では種族の自我、即ち種族の精神に復歸し、不完全な人間にあつては、半ば種族の精神と半ば種族の精神との關係ある、人間的精神の中に復歸して行く。そして完全な人間にあつては、全然、人間的精神、即ち肉體的な個人性の中にのみ復歸するのである。然かも此の場合の人間的精神は、かの最高永遠なる大我と固く結合して、種族の精神とは全然獨立に既に自己の神聖不滅な生命を獲得したものなのである。

即ち極く普通な死の場合に於ては、それが動物と人間との如何に關せず、皆その動物的な精神は共に等しく極めて平靜に、又極めて自然に、(恰も冬になつて羊齒の葉の落ちるがやうにして)その根元に復歸して行くのである。そしてその經過も、極めて簡單に、氣持よく、又殆んど少しの苦痛

もなしに行はれる。だが此れは、本能的にか(健康な動物や原始人のやうに)、若しくは意志的に(人類間の極く僅かな人々のやうに)、完全な肉體並びに精神上の統一がそ、の生命體内に保たれてゐる場合に限のである。慾望や熱情は、此の場合、皆その全生命體の精神即ち自我なるものと直接的な密接な關係を保ち乍ら、再び一定の時期に、自ら進んでその内部に向つて樂々と引込んで終ふ。そこには殆ど何等のあがきも苦悶も見られない。だが多數の人間には――特に此の文明期に際しては――かうした種類の結合が、殆んど無くなつて終つてゐる。そして熱情的な要素の多くは、ともすれば、その根元の精神に反抗して、我儘な狂氣染みた亂暴な行爲に出勝ちなのである。然かもさうしたものを取押へて、よく整然とした、靜かな平和な狀態に復歸さす事が殆ど出來ない位の有樣に迄、立ち至つてゐる。否寧ろ全身的な微力に乘じて、さうした者は更らに進んで猛烈な活動を開始する。そして此の種の「死に際して强力な」熱情は、その主力を發揮して、病弱や老衰の人々を惱まし、遂にはよくその死をして、恐ろしい迄に落着きのない、苦痛なものとせしめるのである。それ許りではない。さうしたものは間々一種幽靈のやうな形を取つて、瀕死の本人に現れる許りでは無く、又傍らに附添ふ人々の眼にも、現出するのである。

フレデリック・マイアズ氏は、此の問題を取扱つて、心理的な部分が、全體の人間から、或狀態の

下に分離する傾向を psychorrphagy と名付けてゐる。彼の考へに依ると、かゝる現象は、單に死に際して起る丈けではなく、さうした psychorrphagic diathesis と彼の呼ぶ素質の人々の、平常に於ても亦、起ることになつたのである。そしてさうした人々は特に或種の幽靈を現出さす特殊の傾向を持つてゐる。彼はかう云つてゐる。[5]「私の假定する『分離』の現象は決して一生物の生命の全體に當て嵌るものではない。寧ろそれは、或る非常に特殊な、心理的要素の作用なのである。そしてその特長として、空間の何處かに、一人若しくはそれ以上の人々に依つて認知される、幽靈を現出さす力を持つてゐる。私は、此の種の幻像は、他の人間の心の上に、即ちその腦髓の上に作り出されるか――即ち此の場合に於ては、その人は心の習慣や、若しくは先入見のために、自分の近くの外側に於て、それを認める――若しくは直接、或空間の『戸外の空き地』などに作り出されるかの、孰れかであると考へる。そして此の場合にあつては、數人の人々が、同時に又同一の場所に於て、それを認知するのである。」

そしてマイアズ氏は、非常に澤山の、興味深い、且つ立派な證據を與へた實例を列擧してゐる。それには、生存中のほんの一時的な幽靈から、臨終に際して長期に亘つて執拗く屋敷などに現出する幽靈などに至る迄の、澤山の實例を示してゐる。そして私が今此處に此れを引用した譯は、幽靈

なる者は、單に病者や瀕死者の生命體の分散から、その本人に現はれる丈けではない。更らに此の種の幽靈を作り出す心理的要素は、それが强烈な場合に於ては、よく持續してその空蟬の肉體を生き長らへさす事も出來れば、又屢々可成の長い間、他の人々の周にも姿を現す事が出來ると云ふ事の、有力な證據の存在を、示さんがためであつた。[6]

外的な個人性、即ち動物的な部分の、運命に就ては、此處で議論を打切らうと思ふ。そして(二)の內的な側人性、即ち人間的精神の運命に就て、研究を進めて見よう。我々は此れに對する解答に深い興味を感ずる。と云ふのは、我々――少くとも考へ深い人々――に取つては、人間の此の種の部面が、丁度「我々自身」を代表してゐるからである。讀者は恐らく、「自己」即ち自己の「自我」なるものは、人間的精神と我々が稱する、かのより高尙な性格の集合であつて、決して一つの普遍的存在（兎に角さうした存存に合體したい、微かな希望はあるにしても）でもなければ、又動物的自我と我々の呼ぶ、部分的な慾望や興味の集合體でもないと、考へるであらう。讀者は確かに、かうした者こそ、最も自分に興味を與へ、又よく自分を代表する者であると、云ふであらう。では此の種のものは一體、どうなるのであらうか？

私はかうした人間的精神即ち「我々」なる者の、死に際して取り得る道は、明かに唯二つしかな

いと思ふ。即ち助けを外的の、動物的な、自我の領域に求めるか、又は内的の、中心的な、普遍的な生命に求むるかの孰れかである。そして明かに唯後者の道のみが、よく我々の要求を充たして呉れるのである。だが初めの間はよく我々は、助けを外的のものに求めるが、それは寧ろ當然な、無理からぬ事である。だが悲しい哉！　さうした方面の、從來我々の慰安の源泉であつた性質は、死の到來と共に皆、死滅の運命を脱れ得ない事を、發見せざるを得ない。大部分の動物的な能力は、皆既に分裂して——無力と眠の狀態に陷つて行く。肉體の諸器管は活力を失つて、その或者は既に用をなさなくなつて終ふ。又心の色々な能力は——特に明瞭な外的の、例へば事件や名前などに對する記憶のやうな能力は——散逸し始める。或場合にあつては、實際死の接近すると同時に、一般を見る目も廣く且つ明瞭になり、又内部の性格や個人性も、一層活々と麗しくなることも、亦絶對にない譯ではない。だが一般には、それは極めて危險な航海なのでめる。そこには決つて、暗雲が停迷してゐる。意識は、それを取卷く、抵い程度の心の色々な作用で、ひどく蹂躙されて終ふ。慾情が跋扈する。下らぬ一寸つぽけな、心や肉體の方面の習慣や習癖が、嫌やと云ふ程現はれて來て人を惱まし通す。幻像や幻影が、壓倒せん許りに押し寄せて來る。そして我々はいつか、見慣れてゐるやうで見慣れない、さうした多くの人物が、妙にしつこく、又恐ろしい位の智慧と眞實性とを

具へて去來する、此の世の端れに來てゐるのに氣づく。そして思はず驚愕と周章の餘り、度を失つてしまふのである。かゝる場合に際會しても、尙よく飽く迄我れを忘れずに、沈着な態度で、かうした暴徒を懼伏するためには、どうしても心を落着けて、此の眩ぐるしい變轉の只中にも、何か或種の確乎(しっかり)とした、頼りになるものを發見することが必要である。

そして此の種のものは、唯一つであるが、確かに存在してゐる。——此の事は極力、力説される必要がある——即ち既に述べた處の、かの偉大なる、凡てを濟度する普遍的な大我が、それなのである。又、我々自身の精神の奥所の中心にある、かの莊大遍在の生命が、即ちそれである。(そして眼に見ゆる世界の破滅にも、死の到來にも、追ひ拂はれることもない位、既に生前、かうしたものに避難處を見出し得た人は、幸福である！) そして死に際しても確固として動かないものは、唯此れのみであり、又我々個人的な人間は、皆それに向つて復歸しなければならないのである。

私は、個人的な精神が進んでかうした道を取るのは、單に最大な義務でもあれば、最大の幸福でもある許りではなく、又或る意味から、乃至は本來の性質から云つて、然かあるべきが、寧ろ當然の事であると思ふ。と云ふのは、普遍的な存在を内に認めもせず、又さうしたものに信頼することをもしないやうな人々でも、尙矢張り無意識の内にではあるが、極めて密接に、此の種の存在と繋

がり合つてゐるやうに、思はれるからである。そして、最も本質的な人間的精神として我々の記述した、かの優れた人間の性質こそ、最も深く、かうした普遍的の大我との關係を持つものではなからうか？　平等――凡ての他の人間や動物に對する、內的な意味での平等感――自由――局所的なものや物質的なものからの超脫の感――無關心――色々な運命に對する無頓着――又は寬大、溢るゝ許りの慈愛心、戀愛、威嚴、勇氣、力――と云やうな凡てのものは――皆個人的な精神が、普遍的の大我に近づく時、初めそこに出現して、その個人的な精神を色付けるのではなからうか？　斯樣な性質は、皆此の大我との完全な、若しくは部分的な結合の、自然な「證左でもあれば、又その象徵」でゝもあるのではなからうか？　尙かうした部類に屬するものゝ內でも、更らに一層明瞭に無意識的な、知覺を絕した領域に所屬するもの（直ぐ此れに論及するが）は、ないであらうか？――即ち深い記憶とか、直覺とか、透視とか、讀心術とか、豫言的能力のやうなものである。

即ち人間の內的な、個人的な精神は、既に普遍的な生命と結合してゐる。又さうあるのが寧ろその本來の性質なのである。或はその人自身は、かゝる結合を明瞭に意識もせず、又自己の本性の深味も知らないかも知れぬ。又優れた性質を持ち乍ら、恰も何かの薄膜が被はれたやうにして、凡てを濟度する、かゝる存在の意識を遮られてゐるかも知れない。だが大我は矢張り依然として、そこ

に嚴在し、又その人自身の生命の核心をなしてゐるのである。

斯樣に考へて初めて內的な個人性は（意識的か無意識的かのいづれかの方法で）皆、その死に際しては、自己內部の永遠の自我に向つて縋り付くことが、明瞭になつて來る。又此れは宗教なるものの世界史上に於て演じた役割を、說明するものであつて、又宗教と死との密接な關係を說明するものとも考へられるのである。世界各國の樣々な宗教は、色々な形式を借りて、此の中心的な普遍的な生命と云ふ、根本のものを現さうと企てた。だがそれは皆不完全な域を脫しなかつた。で人々はいつも、或る簡單な方法での、最も本質的な諸性質の、濟度と完成との印しとして、その宗教的な信條や祭禮や儀式を遵奉した。――然かも此れは、その意義が充分意識的に分つての上か、若しくは（大抵はさうであつたが）唯單に、無意識的に、乃至は潛在意識的に分つての上の事であつた。

兎に角死の到來が、何等の混亂も孤立も持ち來さぬ位に迄、深く意識的に此の種の偉大な生命の內に避難場を見出し、又それと己れを合體し得た人は幸福である。かゝる人々は、不思議な――時としてはその意外なのに驚いたり、狼狽したり、又は這入り辛らい、努力の掛つたりするものではあらうが、決して恐しいものでない――航海が用意せられてゐる。だがさうした狀態に達し得ない――（折々は、以前には見る事も出來たが）今では此の宇宙的の大我は、搔き曇らされて、殆ど、

明瞭に捉むことの出來ない處に迄退いてゐる――人々は、飽く迄我れを失はずに、確乎たる態度を持する必要がある。又現世的な誘惑物や障碍物から離脱して、有り丈けの信仰と信念を喚び起し乍ら、敢然として此の不思議の旅路に、立つことは、最もいゝ、又最も自然な方法であるであらう。シリアの荒野にジェリコの薔薇と云ふ植物がある。形は普通の鑵菊の大きさで、又それと似寄つた花を附ける。それが雨のない季節に入つて、その周圍の土が乾いてすつかり砂になつて終ふと、敢然として自分の根差してゐる處から身を引き離して終ふ。そして丸い一つのボールのやうに――花も根も凡てが――なつて終ふ。それから風に吹かれて、濕つた日蔭の處に來る迄、平野の上を逍遙ふのである。そしてさうした場所に辿り着く時、初めて又それは長く延びて地面に根を差し入れ、次いで頭を擡げて、再び愉快に花を開くに至るのである。此の小さなジェリコの薔薇のやうにして又人間の精神も時々は、その根（此れは動物的な部分に擬へる事が出來る）を拔かなければならない。そして現世の煩はしいものから、離脱する必要がある。かの人間の精神の生命の遠い源となつてゐる、天上界の大陽ですら、その光を曇らされる事があるかも知れない。だがさうしたものには無頓着に、強烈な球體に身を固め乍ら、現在その遠い旅路に愉快に出掛けてゐるのである。

更らに我々は、我々の精神が此の世を離れて行く實狀や、又はその途中の經驗などに就て、憶測

を敢てする事は出來ないであらうか？　云ふ迄も無く我々は、そこでは色々な不思議に出逢ふに相違ない！　私は、我々の精神が現世から離れて、他の生存界（我々の感覺では分らないが、兎に角はつきりとした）に移入する時、その間には確かに境界地とも云ふべきものが存在してゐて、そこで一種の中間的な現象が、起るに相違ないと思ふ。その現象は、現在の我々の能力丈けでゞは、極くぼんやりと、然かもほんの突發的にしか認知する事が出來ない。だがそれには、我々日常の現象のやうな、確實さと規則正しさとが缺けてゐる。そしてその現象は、（一）現世的な生命や、又はそれに附隨する感覺などの分裂によるものと、（二）彼の世に屬する者の形像が、幽か乍らも認知されると云ふ事に由るものとの、二通りがあると、考へられる。

（一）の場合に就て云へば、病氣が危篤に達する時には、大抵の場合、人の心は「漂浪」して、群起する凡ゆる種類の幻像や幻覺に、惱まされる。そして此の種の混亂は云ふ迄もなく、頭腦の中の血液の循環の過剩や、又はその缺乏に基因する。又は何か或種の、肉體方面の病氣に基因するものである。だが此れに關しては、更らに廣い一般的な見解が、立てられると思ふ。我々の慾望や熱情は、皆獨立した一個の心理的な存在を持つてゐる。そして全體的の精神に從屬はしてゐるものゝ、矢張りそれ獨特の生命と意識とを持つてゐる。又我々の器官や機能も亦、凡て從屬的な地位にはゐ

るが、矢張り或程度迄の獨立した知力によつて、各々その作用を續けてゐるのである。だが「我々」は、普通の狀態に於ては、少しもかうした獨立の存在や、又は知力には氣付いてゐない。――それが明瞭に認められるのは、唯さうしたものが謀叛を起した時丈けである。肉體や心の病氣が現れる時、そこに初めて此の種の謀叛が開始される。我々は我々の器官や慾情の、獨立した、又要りもしない苦しい活動を意識するやうになる。――そして實際かうした人々は、不幸にも無數に存在してゐる！　又或種の機能や慾情は、遂に一個の個人性を取つて、本當のものとしか見えない、無數の幽靈となつて現れる程の、獨立的な活動をさへもするのである。此れは夢に於ても見られる現象である。そこには謀叛のやうなものは無いが、心の高い方面の作用が休止してゐる。それで低い地位の心の作用は此れに乘じて、途方も無い物好きな活動を始めて、實生活の驚くべき假面劇を、そこに演出するのである。

然らば、全身が病氣で衰弱し切つて、人間の核心をなすあの内的な個人性が、長い旅出の身仕度をする死の瞬間には、果してどんな事が起るであらうか？　肉體の事のみに干與してゐた詰らない慾望、即ち低い地位の心――絶えずくだらぬ成功や滿足に齷齪してゐた（夢の中や心の目覺めてゐる時の狀態を諦視する時、發見される）小さな無數の精靈や惡魔――は、一體どうなるのであらう

か？　生命體の機能や作用を司る無數の知力は、どうなるのであらうか？　又はさうしたものゝ活動は、死の到來と同時に、果して不用に歸して終ふのであらうか？　不思議な假面劇や苦しい病氣の夢魔なとが、益々强度に繰り返されるやうな、危險――又はさうらしいものに――は存在しないであらうか？　部分的な慾望や慾情の凡てが、肉體と同時に力を失つて靜寂に歸する――少くとも長い眠りの小屋の中に――恰も狩の後との獵犬のやうにして――靜かに戻つて行く――位に迄、よく平常から全身の統一が付いてゐるやうであれば、さうした幽靈や魔襲は毛頭現れて來ない筈である。だが普通の人々には、左樣な統一が付いてゐないし、又付いてゐるべき道理も無い。故に此の場合その精神は、單に死に瀕する肉體の部分丈けでは無しに、又無數の心（全然とは云へないが、主として「動物的な心」のからくたの中や、最後の危機に投げ棄てられた、心の金具や襤褸着の山のやうな中を通つて、退場するものと見るべきであらう。又その肉體は、死に際して全身の活力を失ふと同時に、又一個の腐敗物が、無數の微細な生命となつて、崩壞するものと見るべきであらう。即ち此處に、少くとも低い位地の心が、不思議な無數の幽靈の群――死人から發散放出する無數の幻像――となつて、崩壞する傾向が現れる。勿論此の幻像は、大抵の場合、唯病人自身にしか見えないが（と云つて此れは必ずしも、結構な訪問客の譯にはならない）時とすると透視力ある、附添

の人々にも認知される。又時間や空間を距てゝ――無數の實證のある「亡靈」の實例のやうに――それを見る事さへも出來る場合がある。その描寫は、甚だ面白くないものであるが、大體に於て、皆或種の既定の事實との一致點を持つてゐるし、又確かな傳說や學說とも一致する點が多い。で假りに容認出來ものと見て差支へなからう。

內的の自我である人間的精神が、現世から他の世界へ、即ち死の彼岸に向つて拔け出す現象は、著しく出產――常態に於ける嬰兒の誕生――の場合と、符合するところが多い。嬰兒の生れる時には、丁度肉體の下等な部分を通つて外に現れるやうに、人間的精神も亦、その死に際しては、現世よりも更らに一層非物質的な微妙な世界に、心の凡らゆるがらくたや塵芥の中を通つて、移入する。又陣痛は非常に苦しいものであるが――大體の場合豫備的のもので、實際の出產は極めて迅速な樂なものである――と同じやうに、死の準備である苦痛やあがきも亦、屢々、非常に甚大な場合が存在する。(即ち精神から引き離される惡魔の悲鳴とか、自己と共働する生命や肉體內での據り所から切り離される知力の叫聲とか、動物的心の驚愕と困惑とか、又は種々なる器官の苦鬪とか、云つた風のものが、即ちそれである！　)だがその最後の死への移入は、實際極めて平穩な、喜ばしい、又懷しいものなのである。

兎に角、人間の他の多くの經驗の場合と同じやうに、單に此れ丈けを以つて、直ちに凡てに通ずる特質であるとするのは、確かに大きな間違に相違ない。恐らくそこには非常に多くの種類が存在するであらう。或場合には、その首腦部は、(その地位から去らざるを得なくなつた際に)謂はゞ足踏にされて追ひ出されるやうな――自分の部下の憎惡と決戰しなければならぬやうな――事もあらう。又は鄭重な前途を祝福する挨拶の內に、愉快な樂な航海に就く事もあらう。或は「輝く雲に包まれて」最早や獨り後とに止まる事を欲しない、多くの部下に扈かれて、旅立つ場合もあるであらう。私は恐らく、かうした多くの種々相が、死の旅出に際して、現れるに相違なからうと、思ふ。出產の經驗の間にも亦、此れと同じく、非常な差違が存在してゐる。印度の部落の婦人などは、一時間許り皆の列から離れて、やがて又次ぎの宿場で、皆と一緒になると云ふやうな例を、我々は聞いてゐる。又死や死の準備は――醫者や僧侶が、死體を解剖したり、古くさい經文を讀む事を止めて、もつと有益なことを告げ知らしてくれるならば――非常に樂なものとならぬとは、誰が云へよう？

次ぎに境界線上の第二の現象に移らう。此の場合では、前にも既に述べた通り、彼岸に屬する者の形像が幽か乍らも、死に際して認める事が出來る。此れに就ては、私は深く論究しようとも思

はぬ。だが近代の心靈現象の研究は、臨終に際して、死んだ筈の友人を明確に認めたりするやうな多くの事實の實證を得てゐる。此れは確かに、その友人の記憶丈けが、特にはつきりと復活した爲めであると說明されてゐるが、此の說明が實際に、當て嵌らない場合も多く存在してゐる。――と云ふのは、例へばその友人の死が本人に分つてゐない場合でさへも、黃泉からの客として、彼に訪れる事もあるからである。[7] 又近代の研究は、靈媒の力に依つて、死者との通信が完全に行はれたと云ふ、可成りの確證も示してゐる。かうした事は、今日でも尙未決の問題に屬してゐる。だが忘我の狀態や死に際しては、境界線の此方側のものゝ解體に基因する、幻像の出現と云ふやうな現象丈けに止まらずに、尙更らに、彼岸からの眞の通信や、又は幻像の出現と云ふやうな現象も、亦存在するものと考へていゝ理由が、充分存在してゐる。

兎に角人々の死に際する經驗の差異は、皆その中心の置き場所に依つて生ずることは、明かである。又――死亡術の一つとして――我々の自意識を常に永續的な我々內部の不滅な性質の部分に向つて（生存中に）集注しなければならぬ事も明白である。即ちかくして初めて我々は、他の生物とも結合し、又その繫がりを實感する事が出來るのである。又言葉（即ち自意識）は、初めてその下らぬ間違つた意味を失つて、宇宙の炳乎たる眞意義を現すに至るのである。恐らくかうした場合に

於ては、その精神は死に先立つて、早くも神聖なるものゝ幻を捉むであらう。即ちさうしたものに絕えず我々の意識を集注させ乍ら、內的な精神の、外的な個人性や又は諸の機能などに對する威力を强めると同時に、又その精神と唯一の大我（又正當に理解するならば、凡らゆる活力の源泉となり、又無限の力の中心ともなる）との結合を困めることは、何よりも先づ、我々の努力の目的でなければならない。――かくして初めて外的な動物的な個人性は（本當は決して卑下さるべきものではなくて、常に美しい性質のものであるが）、遂にはその獨立した自尊的な活力を失ふであらう。若しくは專橫的な活動と爭鬪とに出づる事なしに、更らに一層、內的な自我の忠實な表現とも、又はその道具ともなるに至るであらう。又斯樣な狀態に達し得て、初めて動物的な精神は、肉體の解體と軌を一にして、容易く眠に就くことが出來れば、又人間的精神內のその根元に向つて、復歸するやうにもなるのである。そこで大人（おとな）しくその復活の時機を待つと共に、又その人間的精神をして、（シリアンの薔薇と同じやうに）現世の混惑から離脫し乍ら、容易く長がの旅路に出立せしめるに至るのである。

誰しも、かうした自由の旅出には、必ず大きな歡喜と滿足の念が、伴ふに相違ないと、考へるであらう。――それは丁度、水の中に育つた蛹が、輝かしい空氣と日光の世界に飛び立つ、かの蜉蝣

の喜びと滿足とに似てゐる。又嬰兒に取つては、此の世に生れ出づる事が（何かの不都合の事はあるとしても）喜びであるに相違ないと同じやうに、又死者にとつては、死は――移入の際の危險や末知に對する危惧の念や、友人との袂別や、長い間育んだ體の分散とか云ふやうな、多くの不都合なことがあるにしても――喜びであるに相違ないと、考へられる。古い殼を脱ぎ捨てゝ、一生涯にかき集めた、がらくた物を振り捨てゝ終ふことには、確かに不思議な、一種の歡喜の念が存在するに相違ない。幾千とも數知れぬ心や肉體の、嫌やな古臭い缺點や覊絆などは――初めてその眞の意義を解得して――一切振り落されて終ふ。そして精神と云ふ船は、「その涯し無き航海に」、一種の竦動とも身慄ひとも付かぬ氣持に襲はれ乍ら、一度とも歸らぬ港に向つて、出帆するのである。

勿論我々には、かうした進水や出帆を、詳細に知り盡す術を持たない。人々の死に方は、常に我々の決めた通りには行くものではない。何かの事件がそれを決める時もあらうし、又我々自身に關係のない遺傳上の缺點などが、それを決める場合もあらう。又病氣に依つては、苦しい場合もあらうし、又至つて樂な場合もあらう。又はひどい肉體上の衰弱を來す病氣にあつては、寧ろ死への旅立ちは――現世的な肉體方面のものが執着力を失つて、その反對に心や德性が、極めて亮かになるがために――樂なものとなる場合もあらう。此れに反して、刺戟的な性質の病氣や、又は活力が未

だに殘つてゐるやうな場合にあつては、必ずそこに激しい長い爭鬪が續けられるに相違ない。だが兎に角、かうした死の過程が完了する場合の、一種の蘇生安堵の感は何人にもよく想像し得るところである。普通の病氣の時でさへも、衰弱が激しくなつたやうな場合には、よく一種の不思議の精神の擴大の感が、經驗されるものである。然らば肉體が眞に死滅する時の、さうした擴大の感は、果してどんなものであらう！　――かうした無限に擴がつた生命の感じ。新しい然かも、無限に廣い大海に向つての船出にもさも似た此の種の氣持は、果してどんなものであらう！　此の世の端れに暫く立ち止り乍ら、後とに殘る自分の殘骸を、それを繞る詰らぬもと一緒に意識し、又內なる視力で、それを直視さへするとは――何と云ふ不思議なことであらう！　さうした者は皆、實際に形を具へた、物質的なものではあるが、今や自分自身から離れた――全く見も知らぬ無關係なものとして――此の、眞の生命の岸邊に横たはつてゐるではないか。やがて立ち止まる事も瞬間にして、我々の精神は、さうしたものから身を振りかわし乍ら、かの微妙な無限な精氣の世界に、それを調べ探らんがために出掛けるのである。然かもそれは現世の有形の世界に內在して、それに隅なく滲透し、又そのあらゆる制限を、超越してゐるのである。

註 1　私はかうした心理的要素を余り人間的にどしつけたり、又は余り意識と知力との作用に反せしめる傾

きがあるやうに見えるが、さうした人には、此の章の附註を參照して見て貰ひ度いと思ふ。

2 本書第七章百十九頁參照。

3 The art of creation, ch. xii. PP. 209, 210. 參照。

4 Human Personality, &c., cn. vi.

5 Ibid. P. 196, ed. 1909, edited by L. H. Myers.

6 此の種の幻像や亡靈や化物屋敷等の詳細は、Gurney, Nyers, and Podmore; Phantasms of the Living. 及び The Report on the Census of Hallucinations, Praceedniigs of the Psychical Research Society, vol. X.; L'inconnu et les problèms Psychiques, by Camille Flammarion; Lombroso's Fenomeni Ipnoticie Spiritici の中の一章 ch. Xii. 化物屋敷及び本書の第八章參照。

7 前記の Carrington and Meader, PP. 318—27, 參照。

第七章　死後の狀態はありや

我々は前章に於て、死を誕生に擬らへた。そして他の世界即ち死の彼岸に向つて人間精神の移入するのは、丁度出產——嬰兒の現世への——に相當すると述べた。又斯樣に一旦姿を現し乍ら、再び姿を搔き消して行くやうな有樣を考へると、自然そこに隱されたる別の世界の存在を推測したり或はそれに就て考察の眼を向け度くなるのは、至極無理からぬ事である。

だが果して、死の彼方には、何かの一定した形の生存界がありとする理由が、あるであらうか？寧ろそれは全然の空虛と虛無であるか、若しくは、せい〳〵精神が生れては又死んで戻つて行く、一種の無形なものゝ塊り（エーテルか電子か、兎に角いづれにしてもさうした塊り）に過ぎぬと云つた方が、本當ではなからうか？　そして私が此處に論究しようと言ふのは、實に此の問題なのである。

歷史的に云つて、初期の原始人は皆、我々の知る通り、その空想の赴くが儘に、「彼の世」には居住者

がゐるとした。然も奴隷とか幽靈とか云ふやうな色んな者が、どつちやに住んでゐると考へた。巨大な灰色の熊、神聖な豺、小鬼、侏儒、惡魔、聖靈、月の神、燃ゆる大陽神とか云ふやうな者が彼の世を支配してゐて、又そこで荒れ狂つてゐた。――そして人間は、その前に空しく慄え乍ら立つてゐるのであつた。だが時が經つに伴れて、思想や科學は次第に確實なものとなつて行つた。そしてかゝる空想に類したものをいゝ加減に受け容れるやうな事は、しなくなつて行つた。ために前世紀の略中頃になつて、此の種の宇宙論は――西歐のもつと頭の進んだ種族に取つて――全く價値のないものとなつて終つた。そして單なる否認的な態度がそれに代つた。知力や個性（人間や動物の）は、現世と彼岸を分つ幕の此方側で働きを示すものであつて、又その現實の世界に於ける活動は、充分識別し得られると云ふことになつた。だがそれは皆多少共に孤立した、恐らくは機械的な宇宙から偶發したものであるだらうと主張された。そして此の宇宙は、現在でも可成り明細に知る事が出來るが、將來に於ては更らに、一層明らかにされるに違ひないと考へられてゐて、分子の機械的な排列と云ふのがそれなのである。そして凡ての現象は皆それに包含されると、考へられたのであつた。然かも此の宇宙の特長の一つとしては、恰も時計の彈條の緩むやうに、いつかは遂に、太陽は冷却して地球は生命を失ひ――かくて萬事は絶滅して終ふのである！　現世以外の、即ちかう

した機械的な宇宙の向ふにある、何かの聰明な世界の存在などは、殆ど議論の端にも掛らない有樣であつた。たとへあるとしても、せい〳〵そこには、唯の空虛と虛無としか無いやうに思はれてゐた。

此れは、甚だ簡單にしか說明出來なかつたが、今から約五十年程前の、聰明な教養のある人々の態度であつた。然し乍らそれ以後の科學や人智の素晴らしい發達は、遂ひにそれからも亦遠くに離れて終ふやうになつた。極く微細な細胞の目にも見得る慧智や、その行ふ生長の神秘（前章に少しく說明した）、それに類似した微生物内の無數の賢い動作、植物の不思議な心理的な感受性（明瞭な）、動植物の形狀や種類に於ける突然の變形や趨異、N並びにX光線、通常の感覺には分らない無數の波動、ラヂウムやその他の光體の現象、巧妙な無線電信、催眠術や潛在意識に關する不思議な事實、又は數千哩を距てた、以心傳心風の通信の可能――のやうな事柄は、皆我々に、全く人知を絶した、微妙極まる力の存在を信ぜしめ、又一種慧星の如きものを具へ乍ら、我々の周圍にそれの活動する事を確實せしめた。かうした事柄は、いつか太陽が冷却して地球は死滅すると云ふ、陰氣な說は、單に感傷風の愚言に過ぎない事を、確信せしめた。實際冷却した世界も存在するであらう。又遙かに、目に見ゆる世界の向ふに重り合つて擴大してゐる領域――全

然捉まへ處もない程の微細なものが、廣大無邊な波動的なものか、又は超感覺的氣體的な、エーテル的な、磁氣的な、心的な、又は靈的な領域――も亦、存在するであらう。いつか我々の日常の生活の、光彩陸離たる被幕は引き裂かれるであらう。然かもその時、我々の知る此の現世は、最早空しい泡沫に映る影繪のやうなものではなくて、宇宙の中心に向つて、唇をなしつゝ擴がつてゐる、廣大な豐溢な生命の、一種のカーテンのやうなものになるであらう。前時代に於ては、或は死後の生命の持續の如きは、到底信じ難いものであつたかも知れない。然し乍ら現代に於ては、先づ第一に、死の彼岸に於ける生命は、現世よりも更らに充實した、豐富なものに相違ないと、推察されるのである。ホイットマンはかう云つてゐる。「我々の認知する足の下や、手や顏の傍らには、我々に認知し難い更らに今一つ別な、平靜な、實在的な顏が覗いてゐる事を、私は信じて疑はない。――又內部は更らに別の內部を持ち、外部は更らに別の外部を、視力は更らに別の視力を、聽力は他の聽力を、又音聲は別の音聲を、持つ事を信じて疑はない。」

此處に於て、初めて我々は、死と出產を、共に世間的な意味と遠つた見地から見る許りでなく、又共に、一つの世界から他の世界への推移を示すものと、見ようとする態度を以つて、死と出產の問題に當面するやうになつて來る。そして今が、世間的な、死の意味の誤りを指摘して、それを訂

正する、最好の時機であらう。死とは一つの狀態ではない。死後の狀態を云ふもはあるかも知れない。だが死そのものは、決してさうではなくて、唯さうした狀態への通路に過ぎない。若しくは現在の狀態から脫出する一通路――と云つた方がいゝかも知れぬ。それと同樣に、出產も亦一つの狀態ではない。出產前の狀態と云ふものはあるであらう。だが出產そのものは、現世の狀態へ現れ出る一つの通路なのである。我々は死を通つて、他の別な生命や生存の狀態に移入するか、若しくはその儘虛無に歸して終ふかの、孰れかである。前者に於ては、明かに死と云ふ狀態は存在しない。又それは後者に於ても同樣である。――と云ふのは、そこには死ぬべき自我も、又は自己の死を知る自我も存在してゐないからである。[1] リュークレチアスは、墓場に對する人間の恐怖心を一掃しようとして、かう云つてゐる。

「かくて憐れなる人間は、
眞の死には、死んどして悲しむべき自我も無く、
又死の挪揄に際しても、立ちて泣き悲しむべき自我もない事を忘れて終つて、
死の惧れに己が心を滿たすのである。」

かくて出產と死の兩者は、共に或程度迄に、補ひ合つたり、又は釣合を取り合つたりする二つの

相反した運行のやうに考へられて來る。又その一つを以つて、他を推して知ることも出來よう。そして我々の推知し得る一つの事は、戀愛がその兩者の運行を主宰してゐて、且つそれ等と密接な關係を持つてゐると云ふことである。

戀愛と出產との關係は、極めて明瞭である。一生物の生殖を意味ある出產は、殆ど凡ゆる生物を通じて、或る深い隱密な方法で、それに先立つ、相異る兩者間の性的結合を意味するところの戀愛と、深い關係を保つてゐる。又戀愛と死との關係は、此れ程迄に顯著なものではないとしても、亦殆ど凡ゆる方面に於て、その關係の跡を辿る事が出來るのである。文學上の詩歌は、皆此の方面の題目で充たされてゐる。自然の詩歌に於ても亦、これと同樣である！ 若しもエデンの樂園の物語に眞が措けるとしたら、戀愛と死とは、全く時代を同じくして此の世に現はれてゐる。又此れと類似の現象が、長年に亘る動物界の、形體の進化に際しても亦現はれてゐる事は、實に不思議なことと云ふの外はない。原始動物は、先づ簡單な分裂の方法で繁殖して、一種の不滅性を具備してゐた。やがて對をなす二つの者が互ひに融合することに依つて、更らに强い繁殖力のある、聯合の生命に入る事を發見した。彼等は文字通りお互ひの中に死滅して、更らに無數の後裔者となつて現れて出た。故に戀愛と死とは、彼等にあつては又、全く同時のものでもあれば、又同意義のものでもあつ

た。又時とすると生殖と死とが同時に起ることもあつた。即ちその母に當る細胞は、後裔者を生み出す、その行爲の中に死ぬのであつた。やがて細胞の集團的組成の時機がやつて來た。――即ち「聚合體」風の生命體の構成である。性的別や性的器管の現れるのも亦、此の時代であつて、性の作用も死の作用も、共に此の時代に於ては、聚合體の分裂作用に依つて行はれた。戀愛は死と、到る處で關係し合つてゐる。男性動物の精液の消費は、既に死の初まりであり、有花植物に於ける果皮の形成や、又はその百花爛漫たる時代が、既にその衰微の初まりを示してゐるのである。「ワイズマンとゴエテは共に」ゲッデスとトムスンは云つてゐる。「非常に多くの昆虫（ばつたや蝶や蜉蝣など）は、產卵後の數時間中に、死んで終ふ事を指摘してゐる。一體疲勞はそれに附き物であつて、男性のものも亦、それを免れる事は出來ない。寧ろ組織の分解的素質の點から見て、男性の方が特に疲勞の傾向を、多分に持つてゐるのである。……蜉蝣に於ける、戀愛と死との密接な關係に就いては誰しも人の知るところである。羽根が生えて、突如として自由の天地に飛び入ると同時に、戀愛の舞踊があり、生殖作用が行はれ、次いで產卵と、兩親に當る者の死とが訪れる。然かもかうした多くの事が、僅か數時間と經たぬ內に行はれるのである。高等な動物になると、生殖方面の定命的な犧牲は遙かに少くなつてゐる。だが人間の生活に於てすら、死は戀愛の應報の女神ネメシスとして

の役目を演ずるのである。」

ヂョーヂ・マグドォナルドは、その著書の一つの中で(「幻影(ファンタスチス)」第一巻百九十一頁)、死が戀愛のネメシスでない、寧ろ自然な不可抗的な成行のものとなつてゐる、一種族を假構してゐる。彼等は到底人力で云ひ現し得ない程の、猛烈な戀愛に捉はれる。そして「互ひの目を深く見入り乍ら、」(確かに立派な、確乎とした落着きを以て)魂を死の中に追ひ出して終ふ。ハイネはその詩「アスラ」の中で、此れと同じ調子のものを歌つてゐる。

「私はエーメンから來た。

そして私の生れは、かのアスラであつた。

そこでは戀すれば直ちに、死が見舞ふのである。」

又新聞紙上の、餘り人から注意も受けないやうな記事などに、よく現れる事であるが、——平凡な近代生活に於てすら——尙かうした、無益な日常生活の覊絆を脱して、直ちに死の只中に飛び入り度い強い希望が、戀人同志のいづれか一人に、現れたりする事實が存在するのである。

此處には或る深遠なる暗示が示されてゐる。——即ち戀愛は人間の本質そのものであつて、——戀愛に依つて發生する普通の生命が、恰も出産に依つて此の世に生れ出る如く——さうした生命も

亦、その解放と誕生とを、その肉體の放棄に依つて得るものであることを、暗示してゐる。少くともそれは、死は、一般に考へられてゐるよりも、更らに深い關係を、戀愛に對して持つてゐて、又さうした關係を持たす事も出來る事を、暗示してゐる。又そこには、或る意味から云つて、人類事業中の最も大きな現象とも云ふべき、此の種の二つのものに對しては、我々は當然、斯樣な見地に立つて觀察すべきものでもあれば、又さうした見地から、準備をすべきものである事を、暗示してゐる。

出産と死の類似から推定し得る、今一つの事柄は、死に際する精神の運命である。若しも我々が何かの方法で、精神と肉體との關係を、その肉體の出現の極く最初の間に於て、辿ることが出來るやうであれば、肉體の死滅にする兩者の關係も亦自(おのづか)ら、明らかにする事が出來やう。我々は實際「精神」なる言葉の意味を、明瞭に定めることは出來ない。だから肉體との關係は熟知してゐる。それは或る意味から言つて、知力を以つて肉體に滲透するところの意識的(同時に又無意識的)なものである。此れが即ち、我々の自我若くは精神と稱するものである。だが等しく又我々は、此れと肉體との關係の何たるかを解するに苦しむ場合も、間々存在する。我々は既に顯微鏡的な、單一な受精細胞からの肉體の發生と、その連續的な無數の分裂による、人間形體の成長とを知つた。(第二

章）又我々は完成した細胞――目や肝臓や、又はその他の部分や器管の各細胞――は、皆其最初の細胞からの直系的な後裔者であり、又その分裂の結果である（勿論その過程中に於て、夫々その適應する場所に應じて、色々の變形はあるが）事を知つた。我々には知的な自我（意識的な、もしくは無意識的な）と、完成せる肉體との間の明確なる關係が分つてゐる。又同時に我々は、かゝる肉體の最初の胚種との關係の存在をも、認めざるを得ない。知的な自我は、確かにかゝる原始的な階梯に於てはさほど明瞭には外部には、表れなかのたかも知れない。だが明瞭に現れ得なかつただけで、それは矢張りその完全な機能すら具へて、存在してゐたのである。然らざれば、恐らく我々は今日の如き生存をなし得なかつたであらう。意識的並びに無意識的な自我は、常に我々の裡に内在してゐた。そして肉體の發現と發展とにつれて、それも亦同時に發現、具現して行つたのである。又それは寧ろ、肉體の發展を導いたとさへ思はれる。――又――各組織の發展の樣子を見るに――現在我々の肉體内の、普通の健全な各細胞内にも、矢張りそれは完全なものとして、内在してゐる且又、その構成的な中心となつてゐるのである。

少しく之に關する實例を擧げて見やう。我々には屢々夜明方などに、輝く露に濡れそぼつた草叢を見ることが出來る。そして各々の葉からは、可愛らしい、美しい寶石が垂れ下つてゐる。若しも

我々がそれを注意して見るならば、その露の粒の一つ〳〵には、遠方にある風景の、縮小圖を見る事が出來よう。又もつと適切な實例を擧げると、ある灌木には葉の組織内に包まれて、小さな透明のレンズのやうな腺がある。そしてそれを極めて緻密に觀察する者には、又同じく遙か向ふの世界の縮小圖を、そこに見ることが出來よう。丁度斯樣な植物と同じやうに、又我々人間の肉體も、光りの中に――その細胞の各々の内に、肉體の守護神と云ふべき自我なるもの丶（若し見る事が出來さへすれば！）光り輝く像を藏し乍ら――打ち慄へてゐるもの丶やうに、考へる事が出來やう。

時々次ぎの樣な疑問の起ることがある。何處に自我はあるのであらうか？　頭にあるのであらうか？　心臓にあるのであらうか？　或は肝臓にあるのであらうか？　それは肉體に滲透したり、又はそれを取卷いてゐるのであらうか？　或は深く内部に伏在する、單一の、顯微鏡的な細胞であらうか？　又は目に見えない分子であらうか？　これに對する答は明らかに、かうなるであらう。それは凡ゆる細胞に生氣を與へてゐる。又身體全體に滲透し、その各部分に自己を表現しやうと欲してゐるのである。勿論、既に述べた如く、特殊の能力を表はす爲には、勢ひ各細胞間に相違が存在してゐる。だが人間的精神即ち自我は、それを超越して存在してゐる。嬰兒の顏と、その生き々々とした輝く表情――新らしく此世に生れて來て、盛んにその伸びるべき路を求めたり、手探つ

たり、又は試みに一歩を進めたりするその人間の表情――を眺めるがいゝ。毎朝被膜がその容貌から落ちつゝある！　知力が身體全體の内に活動して、その表現を求めてゐる。かの聾で盲目であつたヘレン・ケラは、その六七歳の頃に味つた苦しい經驗を、非常に生き〳〵と寫してゐる。それは彼女の肉體上の不具の爲めに、肉體や心の力の求める表現が、全然不可能であつたからである。「自己を表現しやうとする欲望が增大するにつれて、」と彼女は云つてゐる。「いつも使ひなれてゐた僅かばかりの記號は、次第に不足して來た。そして自分を充分表現出來ない時には、いつも激しい感情が伴つた。何か目に見えない手が、私をつかまへてゐるやうな氣がした。そして私は氣違ひのやうになつて、それから身を振り離さうと努めた。」それから、此れは最も感動的な點であるが、彼女は遂に十才の頃になつて、初めて人に聞き取られる言葉を發し得るやうになつた時の、苦痛の輕減、「ぞつとするやうな驚きと、發見の喜び」を描寫してゐる。此の世に生れ出る幼兒の經驗も、皆恐らく或程度迄、此のヘレン・ケラの經驗に似たものであらう。

故に實際我々の「自我」は、健康體内の凡ての細胞の向ふで行動するか、それと結合するか、乃至はそれに生氣を與へるものとして、考へなければならなくなるやうに思はれる。又殆ど肉眼に見えない、肉體の最初の胚種とも、結合するものゝやうに、考へられて來る。諸君は斯樣な生命の根

元に、現在も居、又過去もゐたのである。諸君は確かにほんの時たましか、かうした肉體との完全な關係を、明瞭に意識しないかも知れない。だが前にも述べた通り、自我なる言葉の内には、時々意識の内に閃めき出て、殆どいつもその場合、我々に此の關係を確認せしめる、廣大な潛在意識の領域も亦、含まるものと、考へなければならない。我々は更に一層の深味に隱れた、生理的な、即ち動物的な精神も、度外視することは出來ない。その働きは、極く初期の時代から跡づけ得るやうに思はれるが、それは凡らゆる複雜した有機的な成長や發達を誘導する。そして一種非常に不思議な靈知を具へて、明かにその從ふ方面に於て意識的である。[5]

かくして心的な自我、即ち精神は、唯に肉體と結合して、その最初の出現から引續き、その發達に參與するものと、想像せざるを得ない丈けではない。更らにそれは全體として、普通の意識的な自我よりも遙かに大きい、より廣大なもので、如何なる肉體的な表現、即ちその達成し得る如何なる現れよりも、一層大きなものであると、想像せざるを得ないと思ふ。我々には、眞の自我は、常に唯その一部分しか現はれないものとして、考へざるを得なくなると思ふ。

此の第二の點は、明白なことであると思ふ。と云ふのは、それは何時、又如何なる生命の時期に於て、現れるのであらうか？　それは唯、諸の能力の現れ始めるに過ぎない、嬰兒期に於てゞな

いことは確かである。又かゝる能力の衰亡する、老年期に於てゞないことも確かである。ではそれは、青年期と壯年期の生命に於てゞあらうか？　だがさうした時期に於ても、一個人内の表現の量と性格とは、絶えず變化してゐる。そして此の着換えと云ふべきものゝ内の、孰れがよく、完全にそれを代表するのであらうか？　寧ろ眞の自我を現すためには、幼年から青年の時期を通して、更らに進んでは極度の老年期に至る迄の、各狀態を、考慮に入れる必要を感ぜられはしないだらうか？　否それより以上のものを、考慮に入れる必要がある。と云ふのは、我々――恐らく我々の多くは――諸の要素が、我々の本性の内に隱れてゐる。そしてそれは現實の生活に、現れたことも無く、又決して現れることも出來なければ、將來共に現れもしないだらうと云ふ、深い感じと確信とを持つてゐはしないだらうか？　我々は凡て、我々の内の最上の者と雖も、唯此處に述べるものゝほんの一小部分に過ぎないことを、感じはしないだらうか？　又多重人格の事實を、どう説明していゝのであらうか？　斯る事實は、我々の眞の自我は非常に相反した、非常に分岐した面を持つてゐる。ために長い間、それは全く相互に沒交渉な觀を呈することが出來るが、結局遂には（實際の通り）新しい、より完全な性格の内に、明かに一致調和してゐることを、暗示するものではなからうか？

此の考へ方、即ち眞の人間は、目に見える現れよりも更らに、非常に大きいものであるとする考へ方に、フレデリック・マイアズとオリヴ・ロッヂとは、船の比喩を使つてゐる。そしてそれは、實に立派な比喩である。海上を辷り行く船は、自分の姿を現してゐる。だがそれはほんの一小部分に過ぎない。下方の水の世界には――その世界の上層を動いて行く、巨大な船體――烏帽子貝や海藻の一面に喰つ附いた、形體を具へてゐる。ところがかうした深海の住民がゐるとして、果してよくその何人が、船の空氣の世界に於ける生活――輝しい帆と帆桁が、微よ風を綺麗に受けて、太陽の光や、白雲の漂ふ青空の下に閃めてゐる樣や、船の進むに伴れて、それを取り卷く怒濤や、涯しない水平線、巧妙な航海上の仕掛、羅針盤、又は航路を指揮する船長など――を少しでも知り、又その存在を少しでも想像し得るものがあらう？　確かに（卜知と靈感の瞬間を除いては）我々には、我々の眞相は少しも分つてゐない！　だがかう云ふ瞬間――深い悲哀、熱烈なる戀愛、大きな立派な怒りと熱誠の瞬間――がある。そしてそれは、我々の本性の最奥の所に光を放射して、その照し出す幻に依つて、我々を驚倒せしめる。又（恐らくそれよりももつと屢々）、他の人間内の、不思議な自我が開示される瞬間がある。たとへ自己の神性は認めなくとも（又元來、此れは容易く出來る事柄ではない！）愛する者の内に神性な存在を見出さない限りは、決して眞の戀愛は出來るものでは

ない。――そしてその神性の存在は遠くに離れた、光り輝く、近づき難いものであつて、我々の献身を求め、又實際にそれを要求する。然も人間としての形體は、極めて明瞭に、單なるそれの象徴と假裝とに過ぎない。かゝる不思議な光は、又屢々普く人々の上に照り輝いて、恰も彼等は神々の歩むがやうに見える時がある。斯樣な時には、過度の仕事に疲れた、貧民窟の母親の顏を眺めても、それは大空のやうに照り輝いてゐる。又一揃えの曳馬と一緒に田に働く、耕童の上にも、我々は古代の英雄の氣宇と體軀とを認める。然かも彼等は、少しも、いつもさうしたものに近い事柄に就て語らない。又驚くべきことには、半片（ペンス）の事で云ひ爭つたり、針金虫のやうなもので、ひどく心を惱ましたりしてゐる。それは恰も、少しく薄過ぎる假裝を凝して――芝居か、又は或種の巧妙な瞞しくらをしてゐるやうなものである。それは、それに關聯する眞の人間の、ほんの一小部分に過ぎないことは、極めて明瞭であつて――如何なるものも此の結論を妨げることが出來ない。

即ち諸君の自我は――此の言葉の内には、諸君や諸君の友人をも一般に含めた凡てのものゝ外に更らに恐らくそれ以上の多くのものが意味されてゐるが――潜勢力と能力の凡てを具へて、諸君の現在の肉體の、最初の原始的な胚種の如きものとも結合して、存在してゐたのであつた。[6]その胚種は顯微鏡的の大きさで、内部の働きと變形とは、超顯微鏡的な特質のものであつた。我々には、そ

の發生の源が分つてゐない。又それと結合してゐた精神は、超顯微鏡的な性質のものと考へても、又は第四ディメンションに屬するものと考へても、余り大した相違がない。唯さうした精神が、目に見えない或種の世界に存在してゐて、絶えず自に見える世界に向つて、出現しようと努めてゐたことと丈けは、認めることが出來る。[7]そしてどうしても我々は、此の結論から回避することが出來ないやうに思はれる。

だがかゝる精神が出産前に、もつと適確に云つて、受胎の時又はその以前に於て、既に或種の斯樣な目に見えない世界に、存在してゐたものと結論するならば、その種の精神の死後の存在も亦可能である、と云ふよりも、恐らくそれは可能でありさうな筈である。と云ふのは、受胎に際して、それは不斷の細胞の增加と分化とに依つて、自己の表現と表出の諸器官を作つた。そして次第に、視覺と感覺と日常の知力との世界に、出現して來た。故に衰弱と死に際しても、その精神は又、或種の此れと反對の過程に依つて斯樣な諸器官やその等位を失ふ。そして、遂に目に見えぬ世界に退去するものと、想像されるからである。此の目に見えない世界の性質はどんなものであらうと――人間の知覺に入り兼ねる程の微細な物の世界であらうと、知覺を絶した巨大な物の世界であらうと或はその世界の事物は、現世の事物とは、如何なる處と物とに論なく、凡て平行に存在し得る方法

で、我々の知覺を脱してゐようとも――我々に知覺されない、他のディメンションに存在するに過ぎないとしても――此のいづれの場合を問はず、その精神は矢張りそこに現存してゐる。そしてその本性と運命とを果してゐる、地上の生活の如きは、唯さうしたものゝ一挿話に過ぎなかつたと想像するのが、合理的のやうに思はれる。[8]

そして死の變化の間に屢々起る、かの明白な意識の喪失（兎に角日常意識の喪失）が、持續よりも寧ろ消滅を示すやうに見えても、我々は決してそれで、狼狽するには當らないと思ふ。なぜなれば我々の熟知する通り、睡眠即ち毎夜の眠りに際しても、矢張り此れと同樣の、日常意識の停止が行はれてゐるからである。然も潜在意識は、絶えず働きを續けてゐる。――音響を類別して、或音響には目を醒ますが、他の音響には、その儘眠り續けさして置く。又擾騒を識別したり、肉體の生理作用を行つたり。反射作用に番兵を置いて、危險の豫防をしたりする。――そして遂に朝になつて疲勞が回復すると、再び縺れた意識の糸をメめ直して、覺醒時の活動を新たにする。ところが、斯樣なことが、日常の毎夜の睡眠に際して起る以上は、兎に角それと類似の或る事柄が、又死の場合に於ても、起り得るのが、本當のやうに思はれる。實際死の瞬間には、閾以上の意識は靜止若しくは休息の狀態に陥る。そして閾以下の意識、或は兎に角さうした意識の或部分、異常に活動的に

なる、多くの實證が存在してゐる。聽覺が非常に鋭くなつて、――時とすると、その際聽取される事柄が、日常の聽力の擴大されたものに依るのであるか、若しくは一種の透聽に依るのであるか、殆ど判斷の付き兼ねる程の、鋭い場合も存在してゐる。又視力もそれと同じやうに透視的な能力を帶びて來て、患者は非常に隔感的な感應に、鋭敏になつて來る。そして遠方の出來事を知るやうになる。[9]單にそれ丈けではない。更らに彼は遠方に向つて、感應を拋射するやうになる。かの今日非常によく確認されてゐる、生者の幽靈や死の知らせ――死の瞬間に力を以つて、遠方の死人などの心の内に拋射される、幻像や印象の――現象は、明かに死の瞬間に於ける國以下の自我の、活動と活力の擴大を實證するものである。（と云ふことが出來よう。）そして此れは、私の云ふ通り、消滅と組織の崩壞とを示さずに、寧ろ恐らく、我々存在の深奥な部分への、一層確定的な意識の移入を示すものであらう。瀕死の人々が、居並ぶ友人の涙や哀願にその旅出を妨げられて「あゝ、死なしてほしい！」と叫ぶ場合は、我々の屢々耳にするところである。又前にも述べた通り、一旦明かに死亡した母親が、後に殘る子供の事が氣掛りになつて、謂はゞ己れを生命に、呼び戻したとも云ふべき場合のあることも、諸君は記憶してゐる筈である。かやうな場合は皆、繼續の喪失を示すやうには見えない。寧ろそこには尚鋭い智力が存在してゐて、よく地上の生活を意識してゐるが、不可抗

的な力に動かされて、恐らく更らに一層精氣的な肉體内の、より速かな、微妙な、新しい活動の領域に移入するかのやうに思はれる。

我々は、生命の實際上の事實に依つて、人間の精神は、大きな變形――脫毛と脫皮と變態――を經て、更らに一つの階梯から他の階梯へと、移動するのを知つてゐる。生理的に云つて、肉體は出產に際して一つの新しい狀態を取る。そして乳離れと初齒の時期に別な一つの狀態を取り、更らに成熟期とか、「月經閉止期」とか、又はその他の時期に於て、夫々新規な別の狀態を取る。そして精神即ち内的な生命の變形は皆、(その内の或ものは、非常に顯著であるが)かうした外的の狀態と關聯してゐる。此の最後の大きな肉體的な變化にも、明かに――今も述べた通り――内に隱れた諸の心的な力の發達、即ち擴大が伴隨する。此の最後の變形は、本當のところどんなものであるか、我々は現在では、唯それを色々想ひ巡らすに過ぎない。だが他の多くの變形と同じやうに、その到來する時は、それは既に非常に必要な、避け難いものとなつたのである事を、知ることが出來る。かうした死以前の色々な狀態――出產に際しても、初齒の時期に於ても、又は成熟期やその他の色々の時期に於ても――緊縮即ち息詰るやうな感じがあつた。次第に成長して行く生命は、自己の狀態の余りに狹き過ぎるのを、發見した。そして新しい形體と發言とに突出したのである。此の最後の

變化に於ても、肉體の諸狀態は、全然非常に狹くなるものゝやうに思はれる。抑へ難い衝動と苦しい位な解放の喜びを以つて、精神はその新しい狀態に脫出し、或はそれに恐る〳〵脫出させられる。時とするとその移入は、疑ひもなく苦しい恐ろしい場合もある。だがそれよりも遙かに屢々、又非常に多くの場合に於て、それは一種深い安堵の感の伴つた、平和な靜かなものである。そして時々恰も新しい生命が既に前以つて、その光輝を投げかけたかのやうにして、それが恍惚の感に光り輝く場合も存在してゐる。[10]

然り、我々は死後の狀態の存在に對する、信念を覆すことは出來ない。――その狀態は、或る意味から云つて我々と共に現存し、又我々の生涯を通じて現存してゐる。だがそれは――現在では、極く微かにしか認識する事が出來ないために――唯我々の意識からは、隱されてゐるに過ぎない。

註 1 "De Rerum Natura", iii. 890, translated by Mr. H. S. Salt.

2 Geddes and Thomson, "Evolution of Sex", (1910) p. 275. 參照。

3 第二章參照。又此の說の敷衍としては、Myer's "Human Personality", edition 1909, pp. 90, 91. 參照。

4 "The Story of My Life", by Helen Keller (1908), p. 17.

5 圖以下の、即ち潛在的な自我の說明は、次の章に就いて見る〳〵し。

6 此れに代るべき唯一の說は、「精神」が肉體と結合するのは、肉體の最初の出現と同時ではなくて、それよりは幾らか後れた、即ち肉體が既にその一部若しくは全部が、原始的な細胞分裂に依つて形成された、誕生の前後いづれかであると、考へる說であらう。――即ちその時精神は、かくして作られる有機體を所有して、自己表現のためにそれを利用し、遂に死に際して、それを放棄するのである。此の學說は――可能のやうに思はれる。又昏睡狀態の虛媒の肉體が、獨立した心靈に依つて「憑依」され、且つ支配される事から考へても、さうであるが――或る難點を持つてゐる。その一つは、斯樣な精神の入り込む明かな、一般に認められてゐる時期が、欠除してゐる事である。他の一つは、遺傳系統に從つて既に形成組織された肉體と、その後に於て、自己目的のためにそれに入り込む獨立的な精神との間に、如何にして眞實の有效な調和が確立されたか、それを知り難いと云ふ事である。だがかうした(又その他の)困難は、打ち克ち難いものである。そして恐らく非常に多種多樣な自然界に於ては、精神の肉體の過程は、實に二つの方法で――即ち此の註の中で略說した方法と、(更らに廣く)本文の中で述べた方法とで――行はれるものと見るべきものであらう。

7 "The Art of Creation", 1908, p. 82 參照。又 Bergson's "élanvital", in "L'Evolution Créatrice", p. 100. と比較せよ。

8 かうした題目に就ての、確かに大きな權威である「カパニシャッド」は、屢々反對した言葉を使つた說によつて、精神の他のディメンションに屬する性質を、現さうとしてゐるやうに思はれる。「小より更に小さく(若しくは微細より更に微細で)、大より更らに大きい自我が、各生物の內に隱されてゐる。」(Kathá-Up. I. Adh. 2 valli, 20; 及び Svetasvatara-Up. III. Adh. 20) ――又「肉體に藏されてゐる自我は、百分した毛髮の先端を、更らに百分した、その一つのものと考らるべきものである。又それは無限なものと考らるべきである。」(Svet-Up. V. 9) そして此の最後に擧げた章句は、かう讀け

られてゐる。「それは女でもなければ男でもなく、又男女兩性でもない。それはそれの取る凡らゆる形體であつて、それとは(唯)結合してゐるに過ぎない。そして食物と飲料とで肉體が成長するやうに、個人的な自我は、思想、接觸、觀察、熱情を手段として、樣々の場所に、此の行爲に應じて、連續的に樣々の形を取る。」

9 既に述べたマイアズの著書の "Clairvoyance of the Dying" 參照。

10 戰場に於てすら、戰爭の濟んだ後、戰死者の顏の上に、かうした表情の現れてゐるのが、見られた事がある。

第八章　潜在的自我

かやうに死後の狀態の存在と、或種の存殘とを非常に確實なものらしく考へる時には、更らにそれ以上の、次ぎの問題が起つて來る。即ちその存殘は或意味から云つて、個人的な、若しくは個體的なものであらうか？　或はそれは個人と迄は達しない、若しくは個人的存在を超越した、謂はゞ無形の領域に屬するものであらうか？　勿論外的な下等な心的要素の、個人的存在と迄は行かない程度の存殘は考へ得られる。又最も深奥な、最も中心的な人間の眞髓が、遙かに個人的存在を超越して、存殘することも考へ得られる。だがその孰れに於ても、個人的な存在は繼續しさうもない。萬有精神、即ち宇宙の大我の不滅は、基礎的の事實であると、私は思ふ。それは或見地から考へて明白な事であつて、それに就ては、我々は既に論ずるところがあつた。そして此の書に於ては、それを度外視しては、議論を有效に進め得られない位の重大な公理として、取扱はれてゐる。ところで斯く假定するに及んで、更らに次ぎの事が考へられる。即ち人間各自の精神が、畢竟皆かやうな

萬有精神に根ざしてゐる以上は、各精神の眞髓も亦、當然、不滅の性質を享有してゐるに相違ない。だが斯る性質を享有してゐる限りに於ては、恐らくそれは、個人的存在の及びも付かない、又その記憶や認識からも、全然超越したものであるかも知れない。

斯樣な結論には――よく如何なる確信力がそれに伴ふとも――確かに何處かに、不滿な點が存在してゐる。私は嘗て一婦人が――此の題目に就て、共に話しをしてゐる間に――來世はあるとしても、個體の持續は信じないと思ふと云つたのを、記憶してゐる。「では何を信ずるのですか？」と私は云つた。「おゝ」と彼女は答へた。「私達は皆、一種の幸福な塊りとなるのです。」そして私はそれ以來いつも、此の言葉を忘れずにゐる。

だが幸福な塊りに關する此の考へ方には、魅力はあるにしても、私の云ふ通り、それは我々の感情乃至は知力の、孰れか一方を、充分に滿足さすところ迄は行かない。我々には、更らにそれ以上のものを求める、氣持がある。又我々には、分化と個體化とは一大法則――恐らく存在の究極の形式に迄及ぶ程の、大きな法則――を現してゐるのが、認められる。此の種の漠然たる推論は、精確な理論や觀察程の用はなさなくとも、兎に角個人的な存殘の可能であることゝ、此の題目に關する或程度の臆說の正しい事とを我々に感ぜしめる。

同時に我々は、此の題目は全く非常に複雜してゐる。ために假初めにも議論を進めようと欲するならば、徐ろにそれを進める必要がある。そして後戻りを餘儀なくしなければならぬやうなことを避ける必要のあるのを、忘れてはならない。我々は極めて平氣で、例へば假初めにも我々の本體が分つてゐるなどゝ、假定するやうなことがあつてはならない！　我々は既に（第五章で）或程度迄人間の構成の工合を分析して見た。そしてその發達の連續的な諸方面に於て、非常に複雜したものであることを知つた。我々は此處で――少くとも、人間的精神と動物的精神との、二つの中間的な方面に――更らに今一つの細別、即ち意識的な部分と、單に潛在的な方面のみの部分との、二つの小分けをする必要のあるのを記憶しなければならない。即ち必然的に更らに一層、複雜さが增して來る譯けである。で我々は、此處で言及した章でなしたと同じやうに、かゝる二方面のいづれのものが、よく存殘し得るかを考へなければならない。が更らにそれ以上に、斯樣な存殘は意識的な領域に於てゞあるか、若しくは閾以下の潛在意識的な領域に於てゞあるか否かを、考察しなければならない。此の章に於ては、主として自我の閾以下の、即ち潛在的な部分の研究に携らう。それは表面的な、即意識的な部分と比べては非常に廣大な、變化に富んだものであることが、明かになつて來よう。又さうは云ふものゝ、此の兩者の間には明確な境界線がなくて、交互に絕えず入り代つて

ゐる事も明かにされよう。故に兎に角現在では、「自我」なる言葉の適用の方面を限るよりは、寧ろそれに出來る丈けの廣い意味を持たして、此の二つの部分と、更らに心的の能力の凡らゆるものとを、それに含ましめるのが、一番安全である。

自我の存殘の題目に取り掛るに當つて、先づ當然次ぎのことが、疑問になると思ふ。即ち何が存殘を示す證據となるか？　我々は存殘の意味をどう取つてゐるか？　此れに對する答は、意識の繼續と云ふことであらうと思ふ。恐らく此れが、唯一の滿足な定義であるやうに思はれる。意識は何かの形に於て、我々の存殘の基礎として、又その證左として必要である。又我々の經驗を、謂はゞ一つの鎖のやうなものとして接ぎ合すためには、或程度迄の繼續も亦、必要である。だが繼續は、絕對のものでなくてもいゝ。意識の鎖は、明かに睡眠に依つて切斷される。或はクロ、ホルムの適用か、頭腦の打擊に依つても切斷される。だがそれは再び結び直されて、繼續される事が出來る。それは閾以上の狀態から、閾以下の狀態へ移ることも出來れば、再び表面に現れ出ることも出來る。それは斷續的でさへあることが出來る。だが記憶が間隙を接ぎ渡す限り、我々は生命の繼續の感じ即ち個人的存在の感じを得てゐる。[1] 若しも一群の記憶――例へば古代埃及の或る村落内の生活の記

憶――が、突然或人の心の内に、普通の幼年時代の記憶と同じやうに、極めて活き〳〵と、前後の矛盾もなく、又よく持續的に現れるとするならば、その人は確かに、その村落に先住してゐたものと結論するのが、自然であらう。又かうした推斷を避けるのは、困難なことである。此れと同じやうに、或未來に於ては、我々の環境とは非常に隔絶した他の場所に於て、此の我々の現世の生活の記憶が、現在と同じやうにして、再び活き〳〵と個人的に現れるとするならば、斯樣な記憶を持つその者は、恐らく己れは、嘗て此の地上の現世に生活したものと、結論するであらうと想像される。

かくして記憶は、存殘と意識の繼續（大體から見て）との裁決者であると云へよう。實際フレデリック・マイアズは、意識に定義を下して、「潛勢的に記憶さるゝもの[2]」にさへしてゐる。――即ち記憶は、我々が意識と名付け得る或心の狀態の、必然的の伴隨物であることを暗示してゐる。

非常に間違い易い又時とすると虛僞の場合さへある記憶の如き物に、我々の存殘の識別の根據を置くのは、實際危險なことであるかも知れない。だが人はそれ以上の勝れたもの、即ち何かそれに代るべき物の、存在を知つてゐない！　記憶は絕えず持久的でなく、又活動的でないかも知れない。だがいつか未來に於て現世からの存殘の得心を與へられるものとするならば、それは或何かの形に

於ける、現世に關する記憶に依つてゞなければならないと、人は云ふであらう。又記憶は不規則の誤り易いものであるとは云へ、此の種の形容語は主として閾以上の記憶、即ち我々が意識的な努力を以つて利用し、又屢々役に立たないことのある、皮相的な記憶に對して、當て嵌るものである事を考へなければならない。我々はさうしたものゝずつと奥底で、夥しい、不滅の、だが潛在してゐて、時々表面に現出する記憶の貯えのある事を、微か乍らも意識し、又日毎にその存在の確信を得てゐる。又心理學者の考へ方も、次第に、閾以上の自我はその記憶を、此の貯えの呑み口を開けて得てゐる。そして憶え違ひや忘却は、さうした記憶の貯えそのものゝ失策よりは、寧ろ呑み口を開く方法の失策に依るものであると、するやうになつて來てゐる。實際可成り澤山の心理學者は、現在、凡ての心的經驗には記憶が伴隨する。ためにそれは大きな倉庫のやうなものゝ中に、貯えて置かれるのではなからうかどうかと、探究してゐる。

私は既に前章で、就中（とりわけ）記憶の不思議な貯藏所としての、所謂潛在意識的な自我に就て、述べるところがあつた。そして今暫く數頁を費して、此の種の自我の、更らに詳しい本性の觀察に從事しようと云ふのは、現在我々は存殘の問題を討究してゐる以上は、當然今も述べた通りに、意識の上層は勿論のこと、更らにその下層も亦、共に含めて論じなければならないからである。我々は小さな頭

腦的な自我のみに、我々の意味と探究とを限定して、情緒と衝動の——天才、戀愛、熱誠及びその他の[3]——偉大な自我を、度外視することは出來ない。否我々は此の兩者——建物の正面とその正面の窓とに相當する自我は勿論のこと、更らに一層隱れてはゐるものゝ、より根本的な自我をも——共に含めて、考へなければならない。

此の隱れた自我は、實際驚異に値ひするものであつて、探究の歩を進めれば進める程、益々その範圍と複雜性とが擴大して來る。と云ふのは、「閾以下」と云ふ言葉が初めて使はれた頃は、それは明かに極く單純な——或一つのぼんやりとした、謂はゞまだ人の檢べた事もない、心の部屋のやうな——意味しか持つてゐなかつた。だが現在では、一つの部屋丈けではない。それは寧ろ或廣大な家屋か官殿のやうなもので、我々はその戸口のところに立つてゐる。そしてそれには多くの部屋や廊下が附いてゐて——或ものは暗くて地下室になつてゐたり、或ものは廣くて、灯りが煌々と點いてゐて、家具が具へ附けられてあつたりする。又或ものは高くて、見晴しが廣くて、大空に向つて露き出しになつてゐたりする。そして近仕の心理學者は、かうした新しい領域の適語を見出すのに困つてゐる。——又かうした領域の地理學に疎い關係上、彼等には實際、それは、滿足に出來る筈のものではない！　私は唯此處では——恐らく甚だ疎略に、又甚だ非系統的にならうと思ふが、潜

在的な、隱れた、若しくは潜在意識的な——兎に角此の内のどの名稱を使ひてもいゝ——自我の特質と性質との或ものを、指示する丈けに、止めなければならない。充づ第一、此の自我の記憶は、幾分不完全な觀は免れないにしても、兎に角我々の日常の理解力と評價に取つては、全く靈妙なものであると云ふの外はない。讀み書きも出來ない若い女中が、神經性の熱病の間に、迚も自分には分りさうもない、拉丁語や、希臘語や、希伯來語の文章を、全體空で囈語の内に述べ立てる場合がある[4]。そしてその文章はずつと以前に、一老學者（彼女が當時働いてゐた、臺所の隣りの部屋で、いつもあちこちと歩き廻り乍ら文章を朗讀してゐた）の口から、極く偶然、彼女の耳に入つたものに過ぎなかつた。ところで我々はかうした事實から、下層の潜在的な自我は、ほんの一時的な、又明かに皮相の印象にしか過ぎないやうなものでも、永い間然も不思議な位正確に、把握し得られるものである事を、認める。ミルン・ブラムエル博士は、催眠狀態の者に向つて、命令の發後二百八十分の經過の後に、紙切れの上に、十字を書くやうにと云ふ暗示を與へた。その被術者は、催眠狀態の眠りから目ざめた。そして勿論、命令に就ては少しも意識的な記憶を持たずに、平常の仕事に取り掛つた。だが規定の日と分との經過後、彼女は一片の紙を取つた。そしてその上に、前記の十字を書いた[5]。此の場合、我々は唯かゝる潜在的なものゝ示す記憶の、持續性と正確さとに、驚嘆

する許りである。又溺死の一瞬間に、過去の生活の、凡らゆる行爲や事件が回想されるのも、屢々耳にするところである。此の「凡らゆる」と云ふ言葉の内には、果してどれ程の正確さがあるか、甚だ疑問であるが、兎に角我々は此の場合驚く可き絶大な記憶の復活の、行はれるのを、確信せざるを得ない。[6] 又記憶作用は兎に角、普通の意識とは別種の意識の方面で行はれる。そてしてそれは線狀の繼起的のものではなくて、同一時刻に一纒めとして行はれるものではなからうと云ふ推察を下さゞるを得ない。又「計算の神童」、即ちまだほんの微弱い年頃の秀才が、三千百八十五萬五千十三の立法根は何かと問はれると、即座に三百十七と答へたり、又一萬七千八百六十一の數を與へられると即座にそれは 337×37 の因子から成ると云つたりする場合がある。[7] 此の場合、その子供の潜在意識的な自我が、驚くべき速度で、かゝる數字を算出するのであるか、若しくは、その子供の一生涯の經驗を遙かに超えた、記憶と知識との貯えにその手段を求めてゐるか、兎に角かうした二つのものゝ、孰れかであると、推察せざるを得ない。かやうな場合や、又はその他の觀察された何百何千とも知れない多くの場合に於ては、閾以下の自我の——催眠術、睡眠、夢、或はその他の何かの方法で表出される。記憶は、その速度に於ては勿論のこと、更らにその範圍と豐富な點から云つても、遙かに、閾以上の自我を凌駕してゐるやうに、考へられる。又マイアズは、閾以上、のも

のゝ下に深く透入すればする程、更らに一層その人の記憶は、完全になるときへ極論してゐる。即ち、同一問題に關する、樣々な方面の記憶に達し得られる場合に於ては、「それは覺醒的な生命から最も隔絶した記憶であつて、そのさし渡しは最も廣く、又該有機體の蓄積する印象を、最も深く捉んでゐる。」[8] 此れは實に重要な結論と云ふべきである。そして此れに就ては、我々は又後になつて論ずるところがあらう。

だが、我々の内に潜在するものゝ、此の心的の過程に對して持つ異常な支配力は、單にその專門の事柄の上に現れる丈けではない。それは又一層深く、天災とか豫言の領域に迄も及んでゐる。不思議な直觀の閃めき、即ち複雜した諸觀念の結合は、完全な形と一種の權威とを具へて、屢々人間の覺醒的な領分に跳び出す時がある。そしてそれは明かに、下方に隱れた或種の理解力から出現するものであつて、無限に廣い事物の觀察が、急激に一焦點に持ち來たされる際に、生ずるものである。それは我々に、最も美しい藝術の花を齎しもすれば、又兎に角或種の最も顯著な豫言の實例をも齎す。と云ふのは、謂はゞ時間の掩蔽を受けない、純粹な遠隔視的な豫言的な才能は存在するかも知れない。——又恐らくさうしたものは、存在するであらう。だが多くの、若しくは大低の豫言にあつては、——單に非常に廣大な觀察に基く、極めて迅速な、結論的な、推論に過ぎないのを疑

ふことは出來ない。

斯樣な閃めきと靈感とは、明かに意識的な頭腦の所產ではない。それは寧ろその向ふから來る事を、意識的な頭腦に依つて、感ぜられてゐる。マイアズの言葉を借りて言へば、それ等は「閾以下の自我からの突出物である。」かうしたものゝ外に、更らにそれと同一の源から出現するものがある——狂亂的な戀情は勿論、立派な熱誠とか、强大な自己犧牲の衝動が、それである。

だが潛在的なものゝ現し得るのは、單に心的の過程に對する支配力丈けではない。それは、肉體的な力やその過程に對しても亦、支配力を持つてゐる。既に述べた通り、それ自らが既に驚く可き程度に迄賢明である以上、その慧智力は又、明かに肉體の全部にも滲透して、それに命令を與へる。凡ての人々は、有名なルイ・ラトーの場合のやうに、熱心な宗教家の手や足には、十字架の聖痕の現れるのを聞いてゐる。リマのブリックス博士は、嘗て催眠狀態の人間に向つて、「四ヶ月の間引續き金曜日毎に、いつも胸の上に赤い十字形が現れる」と告げた。——すると事實それに違はず、その記號が現出した。[9] かうした場合は、屢々ほんの囁き聲位で事足りる時がある。すると潛在的な力は速かに、然かも有效に、該有機體內の複雜した活動や機能に變化を與へる。そして初期の結果を現出する。此の場合、果して精妙な慧智と微細な組織的な力との、如何なる異常な給合が、作用す

ることであらう！　又現在我々に熟知の極く有り觸れた、然も甚だ著明の心理的治療の場合に於ても、同樣である！

又主觀的なものが、時々——口頭の如何なる暗示や、明瞭な如何なる外的の影響からも獨立に——その個人の諸能力や諸動作に對して、非常に決定的な支配力を示す場合が、發見される。例へば夢遊病の場合などは、此の實例であつて、その際夢遊病者は、完全に均衡の取れた、しつかりとした足取りで、——百にも餘る筋肉を、最も器用に調整し乍ら、然も閾以上の意識の點では、全く無意識の狀態で、——恐らく狹い危險な家根や、塀の峯を渡つたりする。又屢々此れは、今にも危險の襲來しさうな瞬間に——更らに一層顯著に——覺醒的な能力を完全に具へてゐる人々にも、起る場合がある。ジョン・ミュアがその著[10]「キャリフォーニャの山」で述ぶるところに依ると、嘗て彼は非常に嶮しい絶壁を登攀してゐた。その際地面上から遙か離れた上方の處で、全く進退谷まつて、それ以上登ることも降りることも出來ない、破目に陷つてしまつた。彼は狼狽と四肢の戰慄とに襲はれた。そして今にも墜落しさうになつた。その瞬間、彼の氣持は急に靜まつて、しつかりとして來た。そして兎に角——どう云ふ工合にしてか、よくは分らないが——驚く可き程の敏捷さとしつかりとした足附きとで、彼はその登攀に成功した。そして命拾ひをした。[11] 私は突然新らしい感覺を

所有するやうに思はれた。今一つ別な自我――過去の諸經驗、本能、守護天使――とどう名付けてもいゝが、兎に角さうしたものが、現れ出て、私の身體の調整を確かにした。私の慄える筋肉は、再びしつかりとして來た。岩石の凡ゆる裂け目や破れ目は、恰も顯微鏡を通して見るやうに見られた。私の四肢は施す術もないやうに見えたのにも拘はらず、確乎として慎重に動き出した。高く羽根にでも載せて持ち運ばれるのならばいざ知らず、恐らくは此れ以上に完全な危險からの脱出は、他になし得なかつたであらう。」

マーテルリンクは「偶發事故の心理學」（「人生と花」の中の）章で、危險の際の神經の混亂に當つて、本能、即ち「頑丈な、粗野な、裸かの、筋肉逞ましい、人物」が、突如として危場の救ひに出場する有樣を述べてゐる。「危險の突進よりも尙一層精確な、迅速な瞥見に依つて、それはその場の狀勢を呑み込んでしまふ。そしてその詳細や可能性を明かにして、即座に、征服されざる生命が死の喉に向つて飛び蒐る、力と勇氣と精確と意志との、莊大な、忘るべからざる光景を現出する。」又此れと類似の――極端な危險に際する、人間の心の本能的な落付きと、能力の殆ど奇蹟的とも云ふべき出現の――場合も、多くの人々によつて知悉されてゐる。潜在的なものが、極めて確然と入り込んで來る。そして日常の意識的な心は、その際他の力が、自分に代つて凡てを管理するのを

感ずる。

更らに我々は、今一つ別な、潜在的な自我の能力を、看過してはならない。それは非常に重要なもので――即ち心象作成の力である。此れは凡ての智力あるものゝ持つ、根本的な能力の一つで、又創造の凡ての根底をなすものである。そして「舞臺裏の」自我に依つて、それは極度に驚くべき程度に迄所有されてゐる。此の題目に就ては、私は拙著「創造の藝術」の中で、一般的に可成り詳しく論じて置いた。で此處では再説の必要がないので、唯それからのほんの僅かな個所の引用に止める。ところで此の心象作成の能力は、恐らく進化の最低の階梯に屬するものは別として、他の凡ての意識的な心の本然の屬性をなしてゐる。兎に角我々の如き心であつて、かうした能力を持たないものを想像するのは、困難なことである。此の能力は、心が引籠つて靜止してゐる場合に於て、特に活動的である。作家が書齋に引籠るか、深更迄机に向つてゐるやうな時には、彼の頭は諸々の心象に依つて滿たされる。又さうしたもので滿たされるやうに想像される！　だが睡眠に際しては心象作成の活動は、一層敏活である。此の場合それは、潜在意識的な心、即ち夢の世界の内に出現する。そしてそれのなす無限の創造は、覺醒時の創造よりも、一層活き〳〵とした力强いものであつて、一種不思議な現實的な感じが、それに伴つてゐる。然かもそれよりも更らに深い催眠狀態の

眠りにあつては、その心象は、更らに一層活き〳〵と現出される。催眠狀態の若い學生が、次ぎ次ぎに、自分をナポレオンのやうに、ガルバルディのやうに、又は九十歳の老婆や、ほんの子供に過ぎないやうに、想像する。彼は夫々、さうした人物の役割を演ずる。そして彼等の書體や音聲を做ねたり、最初の二人の名義で、兵士に對して命令を發したり、子供や老人のやうな、慄える書體で書き物をしたりする。然も此れが、全部半時間と經つか經たない内に、行はれるのである。[11] かやうにして、青年の深い催眠狀態の内に作られる心象は、非常に活き〳〵とした、力强い、又劇的なものである。ためにそれは該有機體を占有して、それをば自己の表現の手段として終ふ。又靈媒の昏睡狀態に於ても、此れと同樣な事柄が行はれる。此の場合、或は外部からの暗示はあるかも知れない。又さうしたものは全然ないかも知れぬ。だが兎に角、心象が、靈媒の心の深味に於て作られる。そして昏睡の狀態にある人間を通して、それは内的な心の意の儘に使へる、不思議な記憶や知識を利用して、話をしたり動作をしたりする。そして時とするとその所作は、見る者をして、單に過去の事實の再現に過ぎぬか、若しくは偶然死者との實際の交通を示すものであるか否か、判斷に苦ましめる場合も存在してゐる。[12]

此の力强い劇的な、心象作用の能力は、非常に重要なものである。此れは未だ充分力說された

事もなく、又常に非常な誤解と誤說とを受けてゐる。だがそれは私の考へに依れば、創造の根元をなすものである。それは人間の心の健全な活動の凡ゆる方面に於て看取せられる。奇想とか空想を賞讃する點に於て子供のする遊戯とか、戯曲、文學、美術、科學的發見などの——常に、又至る處に行はれる、單なる創造の欣びの内に、看取される。試みに上層の心の、意識的な、統禦的な、撰擇的な力を、暫く無心の狀態に休止せしめて見るがいゝ。すると此の最要な創造的な力は、潛在的な自我の深味に出現するであらう。それに少しの暗示でも與へて見るがいゝ。するとそれに相當する人物が、一人どころか、一打(ダース)も、又は一行列も作つて、その深淵から飛び出すであらう。然かも此れは、單なる創造の欣び丈けで、呼び出されるのである。果して此れに勝る不思議が、他に存在するであらうか？　それは創造の可能性に對する、何と云ふ不思議な瞥見を、我々に與へる事であらう。

斯樣な潛在的な心、即ち斯樣な靈妙な力を持つ類のものが、かゝる種類の役割を演じて、且つ架空的な胡魔化しに近い演出に力を借すなどゝ云ふ考へには、全く奇異の感を抱く人が、ゐるかもしれない。だが此れに、人を僞すなどゝ云ふ罪を被せる理由は、何處にあらう？　それは遊戯——我々凡ての遊んでゐる遊戯——でである。宇宙の萬有は、絶えず空想を恣まゝにしてゐる。そして無限

に盡きぬ産出力を以つて、永速に、心象、觀念、又は新らしい形狀とか形體を作り出してゐる。かうした形體の内で、自己を主張し、自からに形を與へ、又空間を充たしたり、要求を滿足せしめるところのものがあるが、――さうしたものは皆、現實の世界に突出して、我々に熟知の動植物や、人間や藝術品などの本原となつてゐる。そして自己を主張し得ないものは、再び目に見えない世界に戻つて行く。我々は昏睡狀態にある靈媒の心の、遙かに深い處に於て、かゝる深淵の過程の行はれるのを――心象の噴泉狀の奇出の行はれるのを――即ち創造の發端を認める。それは純然たる表現の欣びである。音樂家に、一寸とした暗示か手掛りを――三四音符から樂旨――を與へる丈けで彼は直ちに、それから即興的に、生氣の籠つた音樂を作り上げる。催眠狀態にある人間や靈媒に於ても亦、同樣である。即ちさうした人間に暗示を與へると、彼は即座に、それに相當する人物を創作する。又我々が此の不思議な力を導いて、それを自分の事丈けに止めて置く時でも――それを詐欺的なものと做さずに、立派な目的に利用する場合に於ても――同樣である。

勿論、これは無價値の目的に使用することが出來る。靈媒の力ある者が、自己の内に、かうした不思議な劇的の能力の存在を發見すると、時々それを個人的な利益に利用しようと考へたり、又はその誘惑に負けたりするのは、我々の容易く理解出來る事柄である。劇的な習慣が覺醒的な自我を

捉へる。そして彼を狡猾な當てにならぬ人間に變へて終ふ。だがさうしたものゝ凡ての下に、創造と創造的な本能――幻想的な虛空のものに一定の住所を與へる力、戲曲家、藝術家、發明家の天才及び目にも見え觸知もなし得る世界の源――が、存在してゐる。

と云ふのは、忘我の狀態、極度の肉體の疲勞や衰弱、死の瞬間、夢、若しくは深い幻想などに際して姿を現す――下層的な自我からして、(不思議に思はれるかも知れぬが)實際に見たり聽いたり又は觸知もなし得られる聲とか幻とか體形が出現する。そしてそれ等はいづれにしても、見る人々に、見たり聽いたり、觸知もなし得られる現實界の現象とは、全く暫くの間は、區別し難い程はつきりとした感じを與へるからである。靈媒に關聯した實體化――姿を現し、話をし、又は人に觸れたり觸れられたりする人物、餘分の手足、音響、光、物體の運動などの――皆或方法で、靈媒の存在と關聯してゐる――現象は、今日では、充分深く、科學的な注意深い觀察によつて、確證を與へられてゐる。ためて(全體として)それに對しては、何等の合理的な疑問を差挿む餘地も存在しない。[14] 又同樣に生者の幽靈、若しくは瀕死の人か最近に死亡した人から現はれる幽靈にも、一般に否認の餘地のない程に有利な證跡が、非常に多く存在してゐる。[15] 又それに對しては、充分の確認が與へられてゐる。例へばオリヴ・ロッヂ卿が、その「人間の存殘」(百一頁)で擧げてゐる話――誤つて

毒藥を呑んだ勞働者が死ぬ瞬間に、青い斑點のある顏をして、日頃非常に慕つてゐた傭主のところに出現する。そして彼（勞働者）が自殺したなどゝ云ふ噂には、惑はされぬやうにしてほしいと賴んだ話――などは、何と云ふ異常なものであらう！　然も此の話は充分詳細に、信憑に足るものとして「心靈研究會々報」第三卷九十七頁に揭載されてゐる。そして我々はよく、それを無視することが出來ない。だがかうした事が、死に際して起る以上、それと同じ事は又、夢の狀態に於ても行はれる。[16] 夢を見る者が、或人を訪問する明瞭な夢を見る。するとそれに應じて彼は又、それと同じ時刻に、相手の人間に依つて認められる。幻想の狀態に於ても亦、同樣である。時々相手に向つて自己の形像を認めさす程深く、誰かの事を考へたり、又は自己の內的な自我を、その人間に出掛けさす事が出來るものである。

勿論斯樣な現象は、ほんの幻覺に過ぎなくて、少しの客觀的な存在も有してゐないと、云はれるかも知れない。又事實屢々、さうも云はれてゐる。だがこれに對しては、かう答へる丈けで充分であらう。我々の現實界の事物も亦、それ相應の幻覺であつて、それは確かに、何等の客觀的な存在も有してゐない。私の庭園にある水仙は、私の感覺を極く僅かでも置き換へると、直ぐ樣色彩、匂ひ、又はその形體をすら、全く一變して終ふ程度の幻覺である。その客觀性と稱せられるものは、

その基礎を、諸關係の永續の上に――同一の場所に絕えず存在してゐるとか、一時に別々な人に依つて、又は別々な時刻に同一の人間に依つて、認められると云ふやうな事に――置いてゐる。だが此れを以つて客觀性の定義であるとするならば、嚴重な試驗的な狀態の下で、屢々繰返し、或靈媒を媒體として認められた、形體も亦、當然その程度に於ける客觀性を、持つてゐた筈である。

亞米利加で、リヴモア氏と云ふ――紐育の實業家が――ケイト・フォックス（近代の靈媒の內でも最も早い、最も自發的で又最も自然であつた）を媒體として、自分の亡妻と交通した。彼女は――單に一軒の家丈けではなしに、多くの家で――幾度となく現れた。頭丈け現れることもあつたし、身體全體が現れる時もあつた。そしてその時には、いつも一種名狀し難い音響と光とが、それに伴つた。彼女は物を敲いて通信した時もあれば、特にそこに置かれてあつた、名札の上に明白な文字を書いて、通信する時もあつた。そしてかうした現象は六ケ年の長きに亘つて、その間に三百八十八回の記錄に殘つてゐる、降神會が行はれてゐる。そして大抵の會合は、皆獨立の目擊者に依つて確證を與へられてゐる。[17] 斯樣な事情の下に於ては、全くそれを持續された幻覺か、乃至は詐計であると想像するのは、困難なことである。

英國では、（靈媒のフロレンス・クックを媒體として）ウィリアム・クルックス氏に、「ケイティ・キン

グ」の姿が、三年の間（千八百八十一年――八十四年）何回となく無數に現れた。そして彼と、王立協會々員シー・エフ・ブーリ氏に依つて、最大な科學的な注意を以つて、研究された。彼女の幽靈は、屢々實驗者に話し掛けたり、彼等に觸れたり彼等に觸られたりした。又書物をしたり、子供と一緒に遊んだりした。それは屢々室外に出て來た。又三度迄實驗者に依つて、昏睡狀態の靈媒の上と、且つその傍らとに同時に現れるのが見られた。それは靈媒よりも背が高くて、容貌も違つてゐた。クルックスはその脈搏を計つた。そして靈媒のは一分間に五十打つに對して、七十五打つのを發見した。又私はその他色々の事を發見してゐる。[18]

佛蘭西の科學者のリシェー教授は、アルジェリアの靈媒アイシャを媒體として、彼に對して約二十四回現れた「ベニ・ボア」の幽靈を、非常に綿密に調べてゐる。彼は數枚の寫眞を撮つた。又脈搏とか呼吸とか、その他のものを調べた。[19] 多くの科學的な著者で、又取り分けかうした方面の純然たる懷疑論者であつたロムブローゾは、ユサピア・パラジノの降神祭で、自分の（ずつと以前に死んだ）母親を、何回となく見もすれば、又彼女に依つて度々接吻された事を、確言してゐる。[20] 又ドエスベランス夫人を媒體として、十年間非常に頻繁に、「ヨランダ」の娘らしい姿が、消えたり現れたりした。[21] そして此れは、彼女の周圍に集る人々に、熟知の事であつた。そして諾威の二十五名の高

官等や知名の士から成る委員は、千八百九十六年に、彼女の降神祭に際して、非常に綺麗な女性の姿が繰返し現れて、實驗者の間を愉快に歩き廻つたり、その手を捉んだり、それに言傳てを傳へたりして、やがて雲霞の中に消えた事を、公認してゐる。[22] 降神祭に現れる、斯樣な人物に對する確證は、寧ろ無限に增加され得る筈である。だが幾分確定的でないとは云へ、此れと同じ事は又、樣々な幽靈とかその他の現れに對しても、云ふ事が出來よう。かゝる幽靈の、或一定の人間や、場所や家屋との關係は、全く確實のもので、又充分實證も與へられてゐる。――そしてそれは屢々同じ條件の下に於て、再現もしてゐる。[23]

此處に、斯樣な現れや、又はそれに類似の色々な現象は、果して靈媒乃至はそれに關係する他の人間の、所產若しくは作り事に過ぎないか、又は少くともその內の或るものは、分離した「心靈」の働き乃至はその存在の證據であるか否かと云ふ、難問題が起つて來る。だがかやうな問題には立ち入らずに――先づ當分、それは未決の問題であるとしても――尙我々は、かゝる凡てのものは、實際の創造――或何かの形に於ける、人間の隱れた自我の創造――であると云ふ事が出來る。確かにそれは、外的な自然界の、既知の事物のやうには確定的なものではなく、又永續的のものでもない。又一寸表出しては、やがて又元のところに引き込んで終ふ、出來損ねの創造と云つてもいゝで

あらう。だがそれは矢張り、それよりももつと確證的なものとの同一の意味での創造で、不思議にも我々に向つて、凡らゆる目に見ゆる世界の發生と出產との秘奮を啓示してゐる。

かうした何處かに隱れひそんでゐる魔力の源——アラディンのランプ、ジンニーの瓶、善惡のパンドラの箱を——我々の凡てが持つてゐる事は、全く驚異に値ひする事柄である。そして若し我々が此の事實を充分知るやうになる時には、それは必ず、全く以前と違つた人生の見方を、我々にせしめるに相違なからう。それは必ず我々をして、日常普通の——我々に非常に熟知の（又時とすると）それに少しく倦怠を感ずる）——自我なるものは、實は本當の我々である、偉大な存在の一小部分に過ぎない、即ち目に見ゆる實際の世界の後ろの處に、未調査の儘に存在する、集塊的人間の一小部分で、又それの旗と信號とに過ぎないものであることを感ぜしめるであらう。かうしたものを明確にすることは、實際我々に取つて困難でもあれば、不可能なことでもある。又それは恐らく非常に複雜した、遠大な測定し難いものであるかも知れない。だが我々は、さうしたものゝ確かにそこに現存することを、知つてゐる。——そしてそれは明かに、遙かに絕大な能力と特質とを具へて、高きより低き程度に至る迄の、凡ての意識的な自我と、平行に存在してゐる。[24] そしてその表出する

方面に於ては、最も原始的な慾望や熱情を持つと同時に、最高の智力と熱誠の離れ業をも演ずることが出來る。又時とすると、最も氣紛れな暗示さへも受け入れて、滑稽な、若しくは單なる氣儘な無責任な風にして行動をすることも出來れば、又時としては、既に我々の知る通り、最も眞面目に肉體的な全有機體を支配して、それを統禦することも出來る。そして精神的な有機體の方面に於ては、豫言と靈感の最大絕頂に達することも出來る。[25]

即ち此の存殘の問題の內には、日常普通の、上層の、意識的な自我は勿論のこと、更らに深奧な主觀的な、潛在意識的な（若しくは閾以下の）存在も亦、共に含められなければならないと、私は思ふ。肉體の組織的な力が、神經の腦脊髓系と交感神經系統とを含んでゐるのと同じやうに、精神の有機體も亦、その內に、閾以上の部分と閾以下の部分とを含んでゐる。此の兩者は、いつも一緒にして考へられなければならない。そしてその內のいづれか一方丈けでは、恐らく眞の人間のほんの一小部分しか現し得ないであらう。此の二つの自我の正確な相互關係は、唯長い時間と、此の種の困難な題目に關する研究を待つて、初めて明瞭にされ得る類ゐのものに屬する。閾以下の自我は或は我々の日常用ひる意味での、意識的なものとなるべき、定めを受けてゐるのかも知れない。意識的な自我は、主觀的存在の更らに一層廣大な、意識の中に甦るやうに、定められてゐるのかも知

れない。謂はゞ閾以上の自我は、生命の大きな波の先頭のやうなものに過ぎない。そして頭腦の意識は、我々の地上の生存の環境と狀態とを取扱ふのに必要な、道具――死の時か、又はその下方に存在してそれを支持する、より大きな違つた組織の意識の中にそれが沒入する時、その殆ど凡ての價値を喪失する道具――に過ぎないことを暗示する、多くのものが存在してゐる。かうした二つの自我が、絶えず交通し合つてゐることや、又共に或意味での聰明であることなどは、暗示の事實に依つて明白である。即ち暗示に依つて、謂はゞ極く微かな囁き聲とも云ふべきものが、上層の自我に依つて發せられる。するとそれは屢々、下層の自我に依つて理解もさるれば、それに對して力も盡される。又一方下層の自我は、見たり見たり聞いたりされる內的な幻像や音聲に依るか、例へば夢中乃至昏睡の間の書字によるか、若しくは少くとも、外的なものゝ觀を呈する音響か幻像の如きもので、よく上層の自我と通信する。

故に存殘の問題は結局、かゝる相異つた自我の二つの部分間の、一層完全な、有效な理解の問題に、殆ど一變してしまひさうに考へざるを得ない。かうした二つの部分が明瞭な關係を保つやうになる時、單一な人間と、集塊的な人間とが、互ひに完全な理解と調和とを作る時、彼等兩者が、宇宙の大我との繫がりを意味する時、初めて此の種の問題は解決もさるれば、又恐らく、存在もしな

くなるだらうと考へられる。

註 1 勿論我々の日常の意識は、その最も微細な要素に至る迄、斷續的であるのは、全く可能なことである。又それは、活動寫眞の場合のやうに、急速度で續出する繼續的な別々の感覺から出來てゐるのも、可能なことである。だがかうした事實すら、我々に、かゝる意識の下に、より深遠な、又より繼續的な他の意識が存在してゐて、それがかゝる感覺の、結合と比較の手段となつてゐるものと、假想せしめる。

2 既出の "Human Personality," P. 29.

3 "The Aat of Creation" PP. 103—8. 參照。

4 コールリッヂがその著 Biographia Literaria で掲げてゐる、此の有名な實例は、近代の研究に依つて細密に檢査され、又描寫されてゐる。此れと類似の無數の實例に依つて、充分確證されてゐる。

5 Fredrick Myers' 'Human Personality" ch. v の引用する Proceedings S. P. R. vol xii PP. 176—20 3 參照。

6 エイチ・エリスは "World of Dreams" P. 215 で之れに反對してゐるが、旨く成功してゐないやうに考へられる。

7 既出の Myers, ch. iii. P. 66. 及び J. I. Hudson's "Psychic Phenomena" (1893), P. 64 に掲ぐるゼラー・コルバーンの興味ある話を參照すべし。

8 既出の書百頁。デクエンシイの「告白」の中の有名の文句は記憶さるべきである。「私は此の事は確信する即ち心に取つて忘却と云ふやうな事柄は、あり得ない。數千の事件が、我々の現在の意識と、心の上の秘密の記銘との間に幕を張り渡すであらう。又同種類の事件はその幕を破る時があらう。だが幕を張ると破るとのいづれに際しても、その記銘は永久に留存する。」

9 "Journal S. P. R. vol. iii. P. 100; J. I. Hudson, (既出の) p. 158. 參照。

10 New York, 1908, P. 64.

11 Lombroso, "Fenomeni ipnotici e spiritici," Turin, 1909, PP. 28—31. 參照。

12 私は此の後者の可能性は當分未決のまゝにして置く。此の章の註參照。

13 例へば疑ひも無く、——その非常に好意のある辯護者に依つても容認された如く——ユサピア・パラジノーの場合など、此れである。だが此れは決して、彼女の早期から伴隨して、或不思議な方法で彼女から發現した、夥しい心靈現象の、非常に多くの實證と實驗とに依つて證明されてゐる事實を否認するものでない。

14 例へば A. R. Wallaces, Miracles and Modern Spiritualism, "William Crookes' „Researches into Spiritualism," C. Lombroso's "Fenomeni ipnotici e spiritici" のやうな書を除に詳細に讀む時には、且つその各の場合に當つて、實驗が行はれたり、檢證法が案出されたり、又は結果が記錄される時の細密な注意を考へる時には、全體としてその結論(最初の二例に於ては、著者自身二十年若しくは三十年の後になつて容認してゐる)の正しい事を、信ぜざるを得なくなる。既でに多くの科學的な、責任のある人々、例へばシャール・リシェー(巴里の生理學の教授)、カミール・フラマリオン(有名な天文學者、ライプチヒの研究所のチエルナー教授、電氣學者のシー・エフ・ブーリイ、又はバーミンガムのオリヴ・ロッヂ卿などは、その實證に對して、重大な賞敵をしてゐる。又數學者のド・モルガン教授、天文學者のチャリス教授、法律家のサージャント・コックス及び心理學者のウイリアム・ゼームス教授などは、それに對する一般の同意を示してゐる。

15 參考として、本書第六章の註6參照。

16 "Phantasms of the Living," vol. ii. P. 289. 及び Mrs. A の „Footfalls on the Boundory of Another

World," by R. Dale. Owen (P. 256) の中に掲げられた經驗を、參照とすべし。此の後者は、充分根據のある通信を多分に含藏してゐるが、やゝ人氣取りに近い表題で、可成りの損をしてゐる。だが此の書の著者は、有爲の、有名な、信頼出來る人であつて、合衆國の代議士で、ナポリの大使である、ラルクのロベト・オウエンの令息である。

17 R, Dale Owen's ,The Debatabl: Land (1871) PP. 385—400. 參照。

18 Crooke's "Researches on Spiritualism" PP. 104 et seq; Fournier d' Albe's "New Light on Immotality" PP. 218 et seq. 參照。後者に於ては、特に詳細な例證が與へられてゐる。

19 "Phenomènes de la Villa Carmen, avec documents nouveaux"; Paris, 1902. 參照。

20 C. Lombroso's "Fenomeni ipnotici e spiritci, P. 193.

21 "Shadowland" (1905) 參照。

22 "Materialization," by Mme. D'Erpérance (Light publishing Co.) 參照。

23 例へばW・Tステイッドが、「評論の評論」千八百九十二年一月號に可成り深しく詳べてゐるウイリングトンの化物工場の話な、參照とすべし。又 "Memoirs of theWesley Fa ily," vol. i PP. 253—60; Whitehead's ,Lives of the Wesleys," vol, PP. 120—66 "Footfalls" by R. Dale Owen, Book iii. ch. ii. 參照。

24 既出のマイアズの書百五十四頁參照。多くの著者の述ぶる通り、「超意識」(スーパーコンシャスネス)なる言葉は、屢々「潜在意識」なる言葉よりも適切な場合がある。

25 此の種の催眠術と犯罪の問題に關して、T・J・ハドスンはかう云つてゐる。(Phychic Phenomena P. 129) 即ち被術者が固く、よくない事として信じてゐる事を强ひてせしめるのは、殆ど不可能なることである。そしてマイアズは關以下の者の何者たるにもせよ。それは決して惡意のあるものでないこと

とを主張してゐる。「例へば自働書記を取扱ふに際して、我々は時々野卑な戯談や馬鹿げた瞞着に出くわすが、その起る元については、疑ひの目を見張らゐるを得ない。我々は、それが自働書記者の一種の夢のやうなものであるか、若しくは、犬や猿の程度に於ける、具現されない靈智の存在を示すものであるか否かに就て、論じて見よう。だがかうした一方に、惡靈とか、惡意のある力に關する、世界的な觀念が宇在してゐる。そしてそれが凡て實際上の惡靈崇拜や、又は漠然たる超自然的な恐怖の多くの根源をなしてゐるが――かうした凡てのものは、我々が此の現在の實證を研究するに伴れて、いつとはなしに、我々の心から消失するであらう。(同書二百五十二頁)

第九章　自我の存殘

我々は前章に於て、現在の題目に關する、何かの充分な理解を得るためには、我々に熟知の、特に意識的な心の方面は勿論のこと、更らに一層漠然たる、潛在意識的な心の方面も亦、自我の內に含まるものと做さなければならない事を、指摘した。此の兩者の間には、交互の作用と流入とが、不斷に行はれてゐる。そして兩者を分つ、何等の明確な境界線も存在しない。實際彼等の合體と交互の指導とに依つて、寧ろ成長なるものゝ大部分が、行はれるやうに思はれる。我々は今迄に、潛在せる、潛在意識的な自我の性質――その廣大な範圍や迅速な認知力――を明かにするための、可成り多くの考慮を費した。で更らに考慮を進めて、外的の明瞭な自我が、(死に際して)下層の自我の內に沒入するか、又はそれとの一層密接な關係を保つやうになる時が、到來するものとすれば、其の時存殘する意識は、恐らく現在とは違つた形を取るであらう。そして宇宙的意識と稱せられるものゝ持つ、瞬刻的に、よく廣きに迄及ぶ性質に似たものを、帶ぶるに至るであらうと考へられる

此れは我々の非常に期待もし、又確かに非常に希望もする結論である。ところで人は、如何に此の種の事柄に考慮を巡らすとも、死後の意識は尚よく、現在の意識とは全く、同一の方面に屬し得るものとは、想像し得られさうもない。(又此れは――序で乍ら云つて――恐らく死後との直接の交通をなす際に、我々の感ずる困難を説明するものであれば――事實我々の存命中に、外的な心に向つて間接に到達する際の、同種の困難をも亦、説明するものと、云へよう。)[1] マイアズは、我々の閾以上の生命を指して、全個人的存在の特殊な一部面に過ぎないと、云つてゐる。そして「閾以下の存殘的な自我との間には――漠然とはしてゐるものゝ決して否認する事の出來ない」――關係の存在をも許す、有利な論據のあることを暗示してゐる。事情かくある以上、閾以下の自我の存殘を容認せしめる、何かの確實な論據の存在に向つて、探求の歩を進めるのが、寧ろ自然のことのやうに思はれる。で私は此の章では、主として此の問題に携らう。

(一) 先づ第一、我々は既に、顯微鏡的な根源からの肉體の發生と成長との既知の過程から、次ぎの事柄を論證した。(第七章) 即ち肉體内に現れるものゝ、亞原子的な、若しくは第四ディメンションの狀態に於ける先在の確からしいことゝ、從つてさうしたものゝ、肉體の解體以後に於ける繼續も亦同樣に、確らしいと云ふことゝである。そして此の論證の内には、上層の自我は勿論のこと

肉體の組織と成長と支持とに對して、多分の責任を持つてゐる下層の自我も亦當然含めらるべきものである。そして此の論證は、更らにかゝる上層下層の二つの自我は――或方法で共に合體して、且生存中に獲得される、餘分の經驗も共に含めて――死後に於ても尚よく存殘し得るものであることを、推論せしめる。

(二) 第二に――存殘のための、重大な必須條件として認めるに至つた――繼續的な記憶は、主觀的の存在の内では特に非常に强大で、又その存在の顯著の特徴をなしてゐる事實に、我々は全く驚嘆せざるを得ない。かうした主觀的な存在の自由に使用し得る――純粹の個人的な、個體的な記憶をも共に含めた――巨大な記憶の貯え、又はその長い間の蟄伏と、條件の叶ふに際して行はれる異常な再現などは、確かに研究者に取つての、一つの大きな驚異となつてゐる。そしてかうした事柄は、皆我々をして、死に際しても恐らくそれは、掃蕩されることはなからうと云ふ、感じを抱かしめる。たとへ死に際してそれは休止してゐようとも、死以後の狀態は、よく彼等をして再び生命に回起せしめ得るものゝやうに、考へざるを得ない。

(三) のみならず我々は、潛在的な自我が事實死に際して、持に活動的になる多くの實證を得てゐる。現在全體として、充分な確證の與へられてゐる――[2][3]「生者の幽靈」の全現象――時とすると

非常な遠距離に迄も達する、幻像の拋出――は、かゝる自我の死の瞬間に於ける強大な精力と活力（若し此種の言葉が許ゆるとして）とを示しさへしてゐる。又死の瞬間、（若しくは何かの危險）に際して見られる、記憶の再現も亦、それと同樣のことを示してゐる。ティ・ジー・ハドスンやその他の人々は、主觀的な心は、決して眠らないと主張してゐる。――即ち如何なる種類の睡む氣や失心や倦怠が上層の自意識的な心を征服しようとも、下層の心は尙依然として、實際に覺醒もして居れば、活動も續けてゐる。そしてかうした事柄が、睡眠に際して（實際の通り）本當であるならば死亡の場合に於ても亦、本當である筈である。

（四）更らに下層的の自我（生存中の）遠隔視的な能力、極く詳細に亘つて、遠方の事物や事件を透視し得る力――は、非常に不思議な事實であつて――又充分確證のある事實である。そして此れは我々をして、思はず立ち止らしめずには置かない。此處では目、耳、又はその他の普通の肉體的な、末稍器官の如何なるものとも、獨立に視力とか知覺力が活動をしてゐる。[4]――そしてその活動の仕方に依つて、精神は、外的な熟知の肉體に關聯したものとは、全く別種の知覺の通路、即ち器官を有するものであることを暗示もすれば、その實證をもしてゐる。此の種の實例は皆、人の聞くところである。それは普通睡眠の境目か、夢の場合に起る事柄で――又此の際持に我々の注意を

喚起するところの多い――死の場合に於ける、普通の事柄である。若しも（事實の明かに示すがやうに）精神が、人間の目や耳の仲介からは獨立して、よく知覺することが出來るとすれば――たとへさうした器官は皆、特殊な現世の用途のために作られ、且つ發達したものと、結論し得るにしても――かゝる器官が無くとも、精神は矢張り、聽覺や視覺やその他の能力を、我々には今日殆ど知られてゐない方面に於て、發達せしめる。そしてよくその能力を働かすであらうと、推論することが出來る。かゝる能力は我々の深味から、必然的に出現するものである。そして疑ひも無く、それは我々のゐる如何なる處に於ても、再現するであらう。「たとへ諸君の眼が潰れても、尙視力は破壞されずに殘つてゐる。以前と同じ根元から、再び別な視覺の器官が現れ出でよう。[5]」

（五）そして此れと同じ事は、又傳心的な能力――即ち遠方に向つて印象や通信を（唯に此れを知覺するに止まらず）送り得る力――に就ても、云ふことが出來る。下層的な自我が、他の、時とすると、遠隔の地にさへゐる人々の、下層的な自我と通信をなし得る、此の種の能力は、新しい心理學に於ては、充分確證のある一事實となつてゐる。そしてそれには、多くの推論の材料が含まれてゐる。それは、我々の知り得る限りに於ては、精神の活動は、既知の肉體と獨立の或方面に於て確かに既知の表現の器官とは獨立した或方面に於て、非常に活潑に行はれることを示してゐる。そ

れは我々をして、肉體からは全然離れた活動の可能なことゝその確からしいことゝを、推論せしめる。我々はかゝる傳心的な能力の中に、更らにその能力の擴張として、心象作成の能力をも、組み入れることが出來る。そして此の種の能力も亦、既に我々の知る通り、死に際して非常に活動的になるものである。そして此の際最も適切な現象として、生者の幽靈即ち拋出さるゝ幻像の可成り多くの場合では(「心靈研究會々報」第五卷四百八頁で、エドムンド・ガアニーの示すところによると三百十六例の內の四十例では)幽靈は、死の行はれた以後に於て——二十四時間以內に於てゞあるが——出現してゐる。此れは明かに幻像を拋出する人の、死後の活動を示すものと考へられる。或は單に傳心的な印象の、その途上に於ける遲延を示すものか、若しくは感受者の意識的な心に現れる迄の、その潛在意識的な心の內での、遲延を示すものであるかも知れない。

かうした凡ての事柄は、著しく徵示的である。それ等は、潛在的な自我は死に際して、死滅の傾向を取るやうな印象を、我々に與へない。寧ろその繼續と、どちらかと云へば增大されるそれの活動とを示してゐる。だがそれと同時に、此處に引用したかゝる現象の、多くの場合に現れる、著しく個人的な特質——不思議な位明確な個人的な記憶、拋出される非常に明確な心象や幻像、最も親密な友人へ使へられる傳心的な訴へ——は凡て、此の種の繼續される活動は、決して單に無形の生

命力、即ち漠然たる傾向の流れの中に、ばら〳〵になつて入り込むものではない。それに反して、それは明かに、個人的な個別的な、特質のものである事を暗示してゐる。

(六) 今一つ別な考へ方がある。そして此處で暫く此れに就て說明して見よう。戀愛の熱情はその肉體や、心や、情緖のいづれの方面から見ても、明かに主觀的、超感覺的の生命に關係した事柄である。小さな自意識的な、論理的な、論證的な、個人的存在は、此の熱情に依つて完全に驅逐されてしまふ。それは巨大な力を具へ、獨特の信念に身を固めて、生存の偉大な深味から跳り出るやうに思はれる。そして凡ての旣定の規則と習慣とを一蹴してしまふ。それは我々をして確かに、その出源の根源をなす伏在的な自我の性質に對する、深い洞察を得せしめるに相違ない。然も地上の生命を輕じて——目的の追求のためには、世間的な前途の希望や、肉體そのものをすら、進んで犧牲に供してしまふと云ふことが——此の種の熱情の最も顯著な、特徵をなしてゐる。旣に述べた通り(第六章)最も肉體的な戀愛に於てすら、死との一種不思議な關係が保たれてゐる。そして屢々、所望の對象を殺して終ふ場合がある。——

「なぜなれば、人は皆死ぬものではないけれど、各の人は皆、その愛する者を殺してゐる。」

又一方更らに情緖的な戀愛は、殆ど歡喜して生命を蔑視し、進んで愛する者のために、死と危險

とに當面する。それは言葉に現さなくとも、明かにかう云つてゐる。「人が非常に尊重する、此の人間としての部分が無くとも、自分はよく、自己と自己の目的とを果すことが出來る。」そして斯樣な言を吐く伏在的のものが、果して全然の馬鹿でないとするならば、それは確かに、肉體的な生命以上の生命の存在を、認めてゐるものと結論せざるを得ない。

我々は勿論、かやうな持續的な生命の實證を、種族の生命に於て得てゐる。又實際我々は一般にさうした生命は、種族の生命の内に存在することを、認容してゐる。そしてその第一の近似として潜在的な、閾以下の自我を、單なる種族の生命であると解するのは寧ろ自然な、又明白なことのやうに思はれる。此れは、下等な、發達の低い程度の生命には、恐らく旨く適切した言であるかも知れない。我々にはかゝる場合の更らに詳しい、完全な知識が欠けてゐる。ために數百萬の餡の群何萬億とも數知れぬ細菌の「人工培養」などの、各個の餡や細菌の持つ、潜在的な自我をば、容易くその屬する種族の自我と、全然の同一物であると、假定することが出來よう。だが人間やその他の高等な動物に於ては、さうは行かない。此等の者の個人的な心の内には、顯著な個人的な要素が發見される。そして我々は、それをよく考慮の外に省くことが出來ない。かゝる心の保持する、他と相違した個人的な記憶の貯えに就ては、既に言及するところがあつた。又さうした心の拋出する、

著しく個人的な幻像に就ても、既に述ぶるところがあつた。更らに再び我々は、その現す戀情の、著しく個人的な特質に當面しなければならない。戀愛の熱情が、如何に多く種族の生命を象徴してゐようとも、又はさうした生命の内に、如何に深く包含されてゐようとも、(そしてそれは、斯うしたものゝ兩者である)——下等な生命形體の場合は別として——その熱情には何等漠然たる、全汎的な、無差別な點が存在しない。それに反して、それは非常に顯著に個人的でもあれば、又明確な輪廓を具へてゐる。何十萬とも數知れず出逢ふ人々の内で、何故唯の一人しか、よくかゝる激情を呼び起し得ないのであらうか?偉大な凡ての戀愛は、何故その深味に於て、他の凡てのものと相違して見えるのであらうか? 此等の事實は皆、戀愛の根源たる潜在意識的なものゝ現す、輪廓上の深甚な相違を、暗示するものではなからうか? かゝる潜在意識的なものは種族の現れでもあれば又その有機的な表現でゝもある。——確かにそれに相違ない。だがそれは同時に深く個人的でもあれば又——相互に——相異もしてゐる。

我々は此處に至つて初めて我々の取扱ふ問題の解決點に、逢着するやうに思はれる。我々の探求の對象たる自我は——特に潜在的な部分を通して——廣大な、持續的な生命を持つてゐる。そして種族の生命と、その向ふの萬有の宇宙的な生命とに繋つてゐる。然もそれは明確な個人的な輪廓と

特質とを、充分に具備してゐる。母親の胎内に於けるがやうに、それは種族の胎内で養育される。そして、一種一纏めのやうにして、自己の個別的な、莊大な運命には、皆多少共に無意識に、無數の再化身を經過する。それは遂に人間に至つて、初めて別個的存在の明瞭な意識に到達する。そして（多くの苦しみを通して）獨立の存在に解放される。そして最後に、地上の死から發散して、我々と別種の、時間と空間の狀態に於ける、宇宙的な生命に移入して行く。

自然界一般の、恐るべき永遠の流轉を考へると、かやうな個體的存在の經續を許す考へなどは、殆ど抱き得られさうにも見えない。又その繼續を詳細に亘つて理解するのは、困難なことである。だが私の云ふ通り、戀愛を通して、我々は此れの眞理である事を、洞察しない譯けには行かない。戀愛は愛する者の無比なことを、明瞭に認知する。又彼女（若くしは彼）の死滅を信ずるなどと云ふことを、全然拒否して終ふ。そして戀愛のみ獨り愛する者を裹くした瞬間にも暗澹たる眞夜中の空に向つてから歌ふことが出來る。——

眠れやさしの者よ、安らかに快く、
眠れ聖靈、惠まれたる靈よ！
星が輝き、月が數增し、

偉大な時代の次ぎから次ぎに移り行く間を。

そして戀人達の會合に於て、初めて天が開けて——ほんの瞬時の間とは云へ——彼等の爲するさうした永遠を、見る事が許される。

勿論此れ以外の考察も存在してゐる。——それは靈媒とか、所謂心靈現象なるものに關聯したもので——此れも亦、死後に於ける或程度の個人的な存殘の結論を豫示してゐる。だがかゝる種類の實證は、いつか充分價値あるものとはなるであらうが、恐らく未だ充分、完全に立證され、表に示され、且つ有效に利用されるところ迄には、立ち到つてゐないやうに思はれる。兎に角私には、それをさう云ふ風に、取扱ひ得ないやうな氣がする。又斯樣な（死者からの實際の通信に關する）實證は、大部分必然的に、非常に個人的の性質を帶びてゐる。ためにその通信は、それに關係する個人に丈けしか傳達されない。で自然さうした人々に對してはどんなに强い確信を持たしめようとも、それは決して廣く一般の人々にも、それと同じ確信を與へ得ないものである事を、指摘しなければならない。故に私は目下のところ、かやうな考察は看過することにする。そして既に呈示された他の多くの論證に依つて、人間の存殘の一般的な眞理を、假定することにしよう。

我々の今迄に取つた論證の仕方は、略次ぎの通りであつた。先づ我々は、我々に熟知の生命以外

の生命の（近代の研究に依つて闡明された）莫大な可能性を主張した。――そして本當らしいものとする範圍を擴めて、不確實なものとする論據を稀薄ならしめた。第二に我々は、記憶の繼續が、存殘を識別する最上の根據のやうに思はるゝことを、指摘した。即ち我々の裁判所に於てすら（テイチボーン事件の場合のやうに）容貌や風采上の事實よりも、寧ろ記憶上の事實が、同一人間を證明するための根據となつてゐる。第三に、我々は此の問題に際しては閾以上の自我は勿論のこと、更らに閾以下の自我も亦、考慮の內に入れる必要のあることを、論じた。そして存殘的な自我は恐らくかうした二つのものゝ調和と結合から現れるであらうと云ふ事を論じた。第四に、閾以下の自我は肉體の死に際して、記憶やその他の多くの方面で特に顯著な活動を呈することを示した。――そして此れは確かに、死と生存の停止とを暗示しない。第五に我々は、一生涯中絕えず精神は、（透視とか、感覺の置換などのやうな）能力を持つてゐる。そして此れは、物質的な肉體からの精神の獨立を、示すものであることを、知つた。第六には、戀愛を通して、精神は肉體の生命を超越する自己の存殘の、深い確信を得るものであることを、示した。そして第七には、主として閾以上の自意識的な生命を通して、同一と個別的存在との感が、引き出される。そして、遂にそれが確立されるに至ることを、暗示した。

さて斯樣な方面に、更らに議論を進めるに當つて、當然次ぎの事が疑問になつて來ると思ふ。此の種の存殘する生命は、果して如何なる種類の肉體に現れるであらうか？　それは兎に角、或何かの種類の肉體內に現れるのは、明瞭であると思ふ。若しも人間的存在が、死に際して、單に萬有精神の中に沒入するか、若しくは「幸福な塊り」の見分けの付かぬ、一部分となつてしまふに過ぎないと結論するならば――そして個人的な記憶は、世界的な記憶の大海の中に流れ込んで姿を失つてしまつて個人的な行爲や知覺の力も亦共に、同じく消え失せてしまふと結論するならば――存殘する自我の肉體の問題などは、少しも起らない筈である。又斯樣な肉體はあるとしても、せい〳〵全宇宙との見分けの付かないものであるとしか、考へられない筈である。だが若しも個體的な存殘の考へ方に、何かの眞理があるとするならば、その個體の限界を示し、又他の個體との――能動的な侵略的な、關係であらうと、若しくは受動的な受容的な關係であらうと、兎に角さうした――關係に輪廓を與へるための、或種の形體の必要であることが、明瞭のやうに思はれる。そこには何かの抵抗と分離との面がなければならない。

我々は此の問題に就ては、次の章で論ずることゝする。だがかゝる「精神體」に關する、何かの確定的に立ち入るに先立つて、暫く一般的な考察に從ふのが、有益であらう。先ず第一、個人が存

殘するとしても、それは決して何かの固定的な不變の形體を取つて、存殘しないことは明かである。個人の形體は、此の現世に於ては固定的でない。又それが他の世界に於ても固定的であるやうには我々は期待することも、希望することも出來ない。經驗と記憶との不斷の流れが、現世から、他の世界へと、更らに恐らくさうした世界から他の別な世界へと、繼續される限り——我々には此れ以外の事が、發見されさうに思へない。實際かやうな凡ての經驗の根元には、普遍的なものゝ一面としての、固定的な、超越的の、個別的存在はあるかも知れない。だが我々は現在、それに携つてゐる暇がない。——たゞそれから現出する——不斷に變化し乍ら、然も絶えず繋ぎ合される——個人的な顯現の流れに就て、論ずることにする。第一に、我々は既に、無形の集合體に融合するとする考へ方と正反對の、存殘的自我の分離と分化の考へ方を細說し、又力說するところがあつた。だが共通の生命と繋がりとが、此の場合に於ても、地上の生活よりは多分ではなくとも、少くともそれと同程度に於て、かゝる個體を結合せしめるのは、明かである。傳心とか交感とか、透視などの顯著な事實によつて、現在の粗雜な外被から解放される精神は、矢張り來世に於ても互ひに反應し合ふであらう。又さうした遠い世界に於ては、恐らく更らに一層迅速に、親密に、反應し合ふであらうと云ふことが、確信される。さうした精神は、次第に層一層立派な程度に、個體的存在と相互と

を發達せしめるであらう。そして梯を追つて次第に前進するに伴れて、又相互に戀愛を通して、その有機的な結合を發達せしめるであらう。實際成長は主として、戀愛の融合を通して行はれる。そして遂には、結合した個體的存在と普遍的存在の最高の程度に到達して、各精神の變形された意識は、その本當の性質——「到る處に靜止してゐる——空間そのものゝ性質」を、帶びるやうになるのが、可能のやうに思はれる。

註 1 既出の書百六十八——六十九頁。

2 C. Flammarion's "L'Inconnu" の中の "Manifestations de Mourants" の長い章を參照すべし。

3 トリスタン・ドアクンハ島の沖に於いて、暴風雨で溺死する人が、同時にノアフォークの百姓家で同時刻に見られたのなどが、此の實例である。"Phantasms of the Living," vol, ii. P. 52 參照。

4 更らに本書第十一章を參照せよ。

5 "Toward Democracy", P. 490.

6 此の問題の議論に就ては、既出のマイアズの第七章「死者の幽靈」の章を參照せよ。

第十章　内的即ち靈的の肉體

存殘する自我の取る肉體の種類に就て、何かの纏つた考へを作るためには、我々は暫く、我々の現在の肉體の發生に立ち戻るのが、最上の策のやうに思はれる。我々は（第七章に於て）我々の現實の肉體の最初の胚種に於てすら、或種の聰明な形體が活動してゐるものと、想像せざるを得ないのを、知つた。それは過去の種族の記憶を集蓄して、それを代表してゐる。又その一方には、かゝる記憶の現在に於ける復位を支配して、それを指導してゐる。そして――（勿論外的な困難や障害に依る變形は、受けるにしても）――或型に從つて、現在の肉體を築き上げる。そして確然たる分裂と分化に關聯した、極く初期からの非常に複雜した、微妙な、胚種内の運動とか、最後に作り出される、適應性を具へた、完全な肉體の構造や器官などは、皆此の考へ方と同じ見當を示してゐる。[1] 同時に又我々は、微細な胚種細胞内に於ける、かゝる種類の形體の出現は、明かに、全然超顯微鏡的な運動に起因してゐるが、その形體そのものは超顯微鏡的な世界か、第四のディメンションか、又

はその他の生存形式の世界のいづれかに屬するために、我々の目には見えないものであると、結論せざるを得ない。故に我々は、先づ當分此處に述べるやうな結論を、容認しても差支へがなからう。又或程の斯樣な目に見えない形體が、我々の各肉體の發生の根柢をなしてゐるとも想像して、敢て差支へはなからうと、思はれる。

だが此れと同時に、我々は不可見性に對する結論は、同時に又非物質性に對する結論を、含むものであると想像してはならない。事實全くそれと相違してゐる。池の表面の水膜に依つて作られる二つのディメンションの世界に住む生物は、下方の水の世界や、上方の空氣の世界に對して恐らく何等の觀念も持たないであらう。――此の二つの世界は、かやうな生物には全く見えない筈であるだが矢張り、魚や鳥、などがその表面を破りでもすると、直ちにそこには或種の非常に有力な、非常に物質的な現象が惹き起される筈である！　又原子や電子は我々には、個體的には、少しも見る事が出來ない。だがそれは我々の呼ぶ物質の世界に入り込む程度は、唯さうしたものゝ數と、電荷の力との問題に過ぎないのである。更らに我々は、不可見性即ち我々に依つて知覺されない事は、決して空間を占めないと云ふことでないのを、記憶しなければならない。事實は全くそれと相違してゐる。と云ふのは、四つのディメンション内の存在には、全く我々に取つての、奇蹟的とも云ふ

べき、空間の占め方がある。――例へば同時に、二つの場所に現れる力などが、それである。又一方には、無數の超顯微的な原子は、靜電氣的な索引と反撥とに依つて、相互間の一定の距離の關を、保つ事が出來る。そして共同して、非常な大きさと複雜した組織とを具へた、雲を構成することが出來る。――それは一般には、全然知覺を超絶してゐる。だが一定の領域を占めてゐて、物質的なものに對して、充分影響を與へることが出來る。

即ち、かゝる何かの目に見えない――恐らく、人間と全然同一の大きさと、容積とを具へた――雲が姙娠に際して、愛精された胚種細胞の内部に入り込む。そしてそれに分裂の刺戟を與へるものではなからうか。又、幾千幾萬の分裂と增加に依つて、成長する有機體が構成される時に、更らにその新しい體細胞の内部にも、透入するものではなからうかと、考へられて來る。それは實際どんなものであるにしても兎に角無限に微細な、組織と構成とを具へた或物である。そしてそれは、肉體的な最奥の活力を、單なる一般的な意味ではなしに、肉體の各部分や各區分の活力を、代表してゐる。それは粗雜な肉體の内に落着く。(若しくは自己の周圍に、肉體を築き上げる。)そしてその生命の組織者とも、供給者ともなる。それは生存中は、その形體と構造とを維持して、危險や死亡を防ぐ。又出來る丈け、死の到來を避けるやうにする。

では、死に際してはどうであらう？　此處に想像したことを容認する丈けでも、我々は容易く、此種の内的な肉體は、死に際して再び離れ去るものであるのを想像することが出來よう。それは直ちに、粗雜な肉體から、それを後に殘して脫出してしまふ。かやうな事は、第四ディメンションの世界に屬するものに取つては、至極容易いことであるに相違ない！　だがさう無暗に他のディメンションの狀態に賴らなくともいゝ。前に述べた通り、内的な肉體を單に原子か電子の雲のやうなものとして、假定する丈けでもその際粗雜な肉體の組織を通して行はれる、原子の通過は、全く、既に一般に知られてゐる液體や瓦斯の滲透性と交流作用とに、一致してゐる。そしてそこには何等の例外の不可能な問題は起らない筈である。かうした原子は細胞壁や、筋肉や、その他の組織を通り拔ける。しそて尙明かに、相互の相關的な「形體」と組織とを維持してゐて、姙娠に際して、胚種やその他の組織の中に入つたのと、同樣の雲を、(勿論生活經驗に依つて、非常に變形を受けてはゐるものゝ)形成してゐる。そして粗雜な肉體を、無活力な狀態を後に殘して、徐々たる腐敗と、下等な形體のための單なる材料となる運命に、任せてしまふ。